

# 東北学院大学 教養学部論集

第 167 号

2014 年 3 月

## 〔論 文〕

宮城県多賀城市における参加型地域福祉の形成について

—— オスロ市の福祉施設の事例を参考に ——

……………柳井 雅也・増子 正…… 1

A Reading of *The Waste Land*, 5. “What the Thunder Said” …… KIKUCHI Hiroshi…… 17

Non-Eulerian Inviscid Vortices …… TAKAHASHI Koichi…… 43

科学的文章の推敲・校正を支援する教育システムの構築……………松 本 章 代…… 53

## 〔研究ノート〕

戦略的人的資源管理論の現状と課題……………小 林 裕…… 63

ソーシャル・セーフティネットと ALMPs

—— 石巻市震災復興基本計画による検証 ——

……………楊 世 英…… 77

## 〔翻 訳〕

ステフェン・ターナー, ジョナサン・ターナー共著 自然科学のようになれない社会学

—— アメリカ社会学の制度分析 —— (戦後部分)

……………久 慈 利 武 訳…… 87

東北学院大学学術研究会

目次

〔論 文〕

- 宮城県多賀城市における参加型地域福祉の形成について  
—— オスロ市の福祉施設の事例を参考に ——  
..... 柳井 雅也・増子 正..... 1
- A Reading of *The Waste Land*, 5. “What the Thunder Said” ..... KIKUCHI Hiroshi..... 17
- Non-Eulerian Inviscid Vortices ..... TAKAHASHI Koichi..... 43
- 科学的文章の推敲・校正を支援する教育システムの構築 ..... 松 本 章 代..... 53

〔研究ノート〕

- 戦略的人的資源管理論の現状と課題 ..... 小 林 裕..... 63  
ソーシャル・セーフティネットと ALMPs  
—— 石巻市震災復興基本計画による検証 ——  
..... 楊 世 英..... 77

〔翻 訳〕

- ステフェン・ターナー, ジョナサン・ターナー共著 自然科学のようになれない社会学  
—— アメリカ社会学の制度分析 —— (戦後部分)  
..... 久 慈 利 武 訳..... 87

- 印の著作は東北学院大学学術研究会のホームページからも読むことができます。  
<[http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo\\_167/index.html](http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo_167/index.html)> にて公開中です。  
東北学院大学 <<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/index.shtml>> から、  
研究・産官学連携→学術誌→学術研究会(紀要, 論集)へとお進み下さい。

執筆者紹介（掲載順）

- |         |             |
|---------|-------------|
| 柳 井 雅 也 | （本学教養学部 教授） |
| 増 子 正   | （本学教養学部 教授） |
| 菊 地 弘   | （本学 名誉教授）   |
| 高 橋 光 一 | （本学 名誉教授）   |
| 松 本 章 代 | （本学教養学部 講師） |
| 小 林 裕   | （本学教養学部 教授） |
| 楊 世 英   | （本学教養学部 教授） |
| 久 慈 利 武 | （本学 名誉教授）   |

## 【論 文】

# 宮城県多賀城市における参加型地域福祉の 形成について

—— オスロ市の福祉施設の事例を参考に ——

柳井 雅也・増子 正

### 1. はじめに

本稿は、東日本大震災（2011年3月11日）以降の宮城県多賀城市（以下、多賀城市）における地域福祉に関する施策について考察することを目的としている<sup>1)</sup>。そのため、オスロ市（ノルウェー国）のサンタンスハウゲン高齢者センターとローカル・コミュニティセンター（旧ボランティア登録センター）で実態調査（2013年8月30日）を行った。実態調査では、参加型地域福祉をキーワードに、住民参加の実態、相互扶助の実態、施設運営の視点から聞き取り調査を行った。ここでは、主に『多賀城市地域福祉計画（第2期）』（2013年3月）を対象に、これに該当する施策や事業を組上に載せて検討することとする。

尚、ここでいう地域福祉とは、福祉サービスを必要とする地域の人々が、安心して暮らせるだけでなく、社会、経済、文化に限らず、あらゆる分野の活動に参加できる機会が得られるようにするため、地域住民や公私の社会福祉関係者が互いに協力して地域社会の福祉課題の解決に取り組んでいくことを指している<sup>2)</sup>。

本稿の検討方法は、① 東日本大震災（2011年3月11日）前後における、多賀城市の人口動態および関連指標、被災状況の確認。② 同市における最上位計画で、同大震災前に策定された『第五次多賀城市総合計画（2011～2020年度）』（2011年3月）で触れられている地域福祉の考え方や取組の方向性と、大震災後に策定された、『多賀城市震災復興計画』（2011年12月）を踏まえて、その後策定された、多賀城市の『多賀城市地域福祉計画（第2期）』（2013年3月）を対象に、研究目的に該当すると考えられる事業を選び、その内容を整理する。③ ノルウェー国オスロ市の2つの施設の事例分析。④ ②と③の比較考察、の順で行い本稿の目的を達成したい。

## 2. 多賀城市の概況と東日本大震災の被災状況

### (1) 多賀城市の概況と人口

多賀城市は仙台平野の東端に位置し、仙台市、塩竈市、利府市、七ヶ浜町に接している（図 1）。市域（19.65 km<sup>2</sup>）の 53% が標高 5 m 以下で、概ね平坦な地形となっている（多賀城市資料より）。鉄道は東北本線、仙石線の 2 路線、道路は国道 45 号線と仙台塩釜線（産業道路）が整備されている。地元で生業に就いている人、工場や事務所に勤めている人、東北学院大学の教職員および学生、数年で転勤する自衛隊員およびその家族、それに整備されている鉄道や道路を利用して仙台市等へ通勤するサラリーマンが暮らす都市となっている。

人口増減について、2000 年以降（2 年毎）の推移では、2000 年 6 万 966 人から 2008 年 6 万 2955 人まで 1989 人増と微増傾向にあった。それが、2010 年 12 月末には 6 万 2870 人（2008 年比：85 人減）となって、東日本大震災後の 2011 年 12 月末には 6 万 1408 人と前年比 1462 人の減少となった<sup>3)</sup>。

これを高齢化率（65 歳以上の人口比）について宮城県内市町村で比較すると、2010 年には 1 万 1354 人（高齢化率 18.1%）と富谷町（同 13.0%）、利府町（15.4%）に次いで県内で 3 番目に少ない数値となっていた。しかし、多賀城市内の高齢者の絶対数の比較では 2000 年が 7570 人に対して 2011 年 12 月末は 1 万 1613 人<sup>4)</sup> と約 50.0% の増加となっている。高

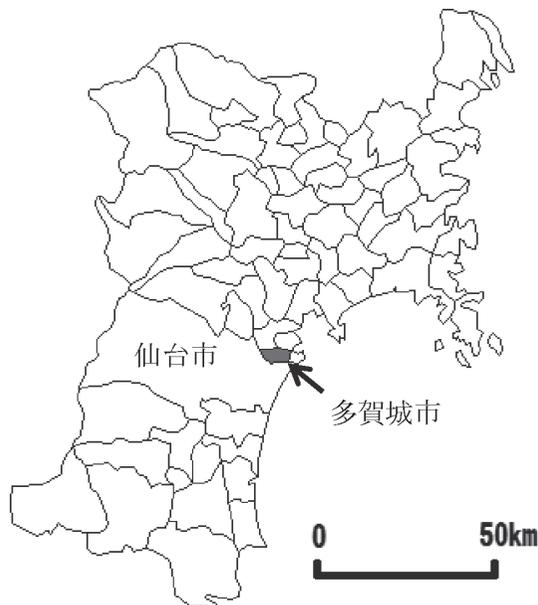


図 1. 宮城県多賀城市の位置図

齢化は進みつつあるといえる。それに、大震災後の人口減を重ね合わせると、人口構成の変化は、今後少なからず当市における地域福祉（財政、担い手等の点で）に影響を及ぼすと考える。

## (2) 東日本大震災の被災状況と復興状況

ここでは、多賀城市の「多賀城市における東日本大震災の被害状況概要」による記録を基に被災状況を記載する。また、数値は2013年5月31日現在を示している。

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、多賀城市で震度5強を観測する大地震だった。その後、津波は仙台港で約7m、多賀城市内では浸水深最大約4.6mの高さで押し寄せてきた。市内の浸水面積は約662ha（市域の約33.7%）で、砂押川南側がほとんど浸水した。これには鶴ヶ谷・丸山の一部、大代地区も含まれている。

人的被害は、市内での死者数（他地域の人を含む）188人（男112人、女76人）で、多賀城市民の死者数（他地域で亡くなった人を含む）は154人（男92人、女62人）となっている。住家の被害は全壊が1746世帯で、その内訳は津波地区が1607世帯（構成比：95.6%）、地震地区が76世帯（同4.4%）となっている。大規模半壊は1634世帯で、津波地区が1507世帯（同92.2%）、地震地区が127世帯（7.8%）と、圧倒的に津波地区の被害が大きくなっている（表1）。しかし、半壊の2096世帯では、津波地区は888世帯（42.4%）に対して、地震地区は1208世帯（57.6%）となっている。一部損壊の1万1530世帯では、津波地区1075世帯（9.3%）に対して、地震地区6390世帯（90.7%）と、いずれも地震地区の被害が多くなっている。これらの事から津波被害は全壊、大規模半壊など、多賀城市に大きな被害をもたらしたといえる。

家屋や事業所の被災、車両被災等によって、多くの災害ゴミが発生した。瓦れき発生推定量は約34.3万トン、被災車両移動数は国道・県道345台、市道・公園等2459台、私有地2752台（自動二輪を含む）となっている。家屋等の解体件数も1102件となっている。これ

表1 住家被害（2013年5月31日現在）

	津波地区	地震地区	計
全 壊	1670 世帯	76 世帯	1746 世帯
大規模半壊	1507 世帯	127 世帯	1634 世帯
半 壊	888 世帯	1208 世帯	2096 世帯
一 部 損 壊	1075 世帯	4979 世帯	6054 世帯
合 計	5140 世帯	6390 世帯	11530 世帯

出所：多賀城市「多賀城市における東日本大震災の被害状況概要（2013年5月31日）」より。

らの結果、り災証明等の申請件数は2万2920件となっている。

社会教育施設、小・中学校、保育所・福祉施設関係、庁舎・市民活動サポートセンター、市営住宅などの被害額は4億5701万2000円、水道関係1億1594万9000円、下水道関係37億64073万円、道路・橋梁・公園関係が6億6073万円、農業関係が4億600万円、水産関係は1億2500万円となっている。商工業関係（多賀城市・七ヶ浜商工会調べを記載）は、会員数843人中、全壊20件、半壊38件、床上浸水253件、床下浸水7件、商品・設備等被災484件となっている<sup>5)</sup>。震災復興に向けた災害ボランティアセンター（社会福祉協議会：2011年7月に「復興支えあいセンター」に改称）の活動では、稼働延べ人数1万9412人、稼働延べ件数では2542件の取組がなされている。また、他自治体等から約2万1000人の支援も受けた。仮設住宅等は、完成戸数373戸、同入居戸数355戸、借上仮設住宅市内居住戸数969件、住宅の応急修理申し込み戸数は2033件（うち修理完了1820件）となっている。

このように道路・上下水道等のインフラ関係及び、住居・事業所等の大きな被害にとどまらず、多くの人命が奪われ、仮設住宅での暮らしを余儀なくされている人が多数いることが指摘できる。

### 3. 多賀城市の地域福祉の概略

#### (1) 『多賀城市地域福祉計画（第2期）』の位置付け

ここでは主に『多賀城市地域福祉計画（第2期）』（2013年3月：以下、地域福祉計画）を参考に、同市の地域福祉策について検討する。そのため、東日本大震災が発生する直前に策定された上位計画『第五次多賀城市総合計画（2011～2020年度）』（2011年3月：以下、総合計画）で触れられている地域福祉の考え方や取組の方向性と、大震災後に策定された、『多賀城市震災復興計画』（2011年12月：以下、復興計画）で、新たに重要になってきた視点の確認も行っておく。尚、復興計画と地域福祉計画とは計画上は直接の結びつきはない（図2）。

総合計画における地域福祉は「政策の大綱」（同計画書 p 30）の政策2に「地域政策の推進」として取り上げられている。施策の目指す姿として、「地域で助けあい、支えあいができる環境が整っています」（同 p 56）と述べられている。自主防災組織の結成や地域福祉の担い手となるNPOが誕生している事実を指摘している。しかし、民生委員児童委員及び主任児童委員など担い手確保や社会福祉協議会の活動活発化と自立運営の促進が課題として指摘されている。そのため、地域福祉の担い手団体間のネットワーク確立、地縁で行うサービスとテーマで行うサービスの連携を促進することや、その需要と供給の調整も強化していく必要

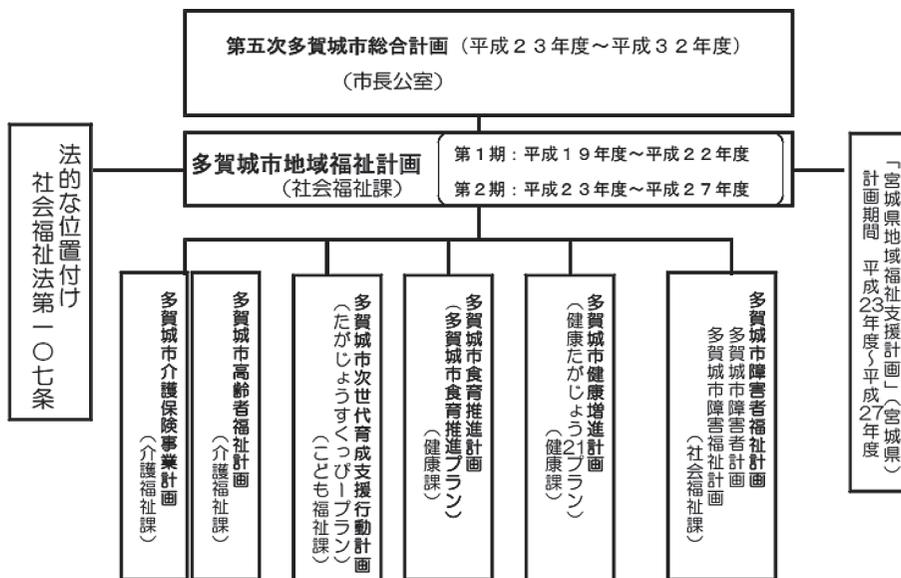


図2 多賀城市地域福祉計画の位置づけ

出所：『多賀城市地域福祉計画（第2期）』より。

があること等が指摘されている。基本事業としては、地域福祉意識の醸成と担い手支援、多様な地域福祉活動の推進が取り上げられている。

復興計画は、第五次多賀城市総合計画を上位計画とし、同計画の基本計画を補完する位置付けとなっている。この中に、「11 復興計画事業概要一覧」(同 p50)に「『個』と『つながり』のそれぞれの視点による健康増進と福祉の推進」の項目がある。この中で、地域福祉に関係する項目をみると、「地域や社会で孤立することがないように、つながりや支えあいを重視して、健康調査、訪問指導、相談、健康教育などの取組を推進」していくとある。具体的には、「仮設住宅巡回訪問指導事業」による、孤独死や自殺を阻止する為、専任保健師等による定期的訪問や、「被災者・支援者等の心のケア事業」、災害時における要援護者の避難所確保の為、要援護者の特性に合わせた施設の整備（県外も含む）等が取り組みに上がっている。地域福祉の視点からは、被災者の「自殺」や「孤立」を防ぐ為の社会的な仕組みづくりが重要なテーマとなってきたといえる。

以上の事から、東日本大震災前に策定された総合計画は、専ら「ネットワーク形成や連携」等、既にある民の力の相乗効果を高めるため、行政が支援・推進していくという考え方が主だった。しかし復興計画では、これまでとは一変した生活・生産活動と、その後、復興期において予想される様々な困難に向き合う施策が必要になってきている。当然、行政、NPO、ボランティア等の地域福祉関係者もこれに向き合う必要がでてきている。

(2) 対象事業の選択

地域福祉計画は総合計画（2011～2020年度）のうち、2011年～2015年までの5年間を計画期間としている。また、本計画の課題を探るために20歳以上の市民2000人（無作為抽出）を対象にアンケート調査（2010年12月27日～2011年1月14日）を行っている。基本理

表2 多賀城市の地域福祉計画の施策体系と本稿で取り上げる事業

基本目標	施策	事業
1 助け合い支え合えるまちをつくりまします	地域の助け合い支え合いで生活課題に取り組む	地域活動への参加促進
		地域での支え合い、助け合い、見守り合い
	市民一人ひとりが地域社会の一員としての意識を高める	地域福祉の理解や関心を高める
		地域文化の伝承、世代間交流の促進
地域を担う人づくりを進める	学校教育や生涯学習の中で福祉教育推進	
2 お互いの立場を認め合うまちをつくりまします	ノーマライゼーションの理念の浸透を図る	人権尊重の意識に満ちた社会を目指す
		権利擁護システムの充実
	いきいきとした生活づくり	男女共同参画による地域づくり
		生涯学習の推進による生きがいづくり
3 支え合いのネットワークがあるまちをつくりまします	地域社会を支えるネットワークをつくる	地域福祉推進体制の整備
		地域の活動や団体間の交流の促進
	自立した生活ができるまちづくり（保健・医療・福祉サービスの充実）	自立を支える働く場づくり
		健康づくり推進
		地域における子育て支援
		高齢者に対する支援
	サービスが利用しやすい仕組み、気軽に相談できる体制を作る	障害者に対する支援
		サービスの情報提供や利用支援
4 安心して安全快適に暮らせるまちをつくりまします	住みやすい地域環境をつくる	身近な場所での総合的な相談体制の整備
		道路や公園など公共施設の整備
	安心して暮らせる環境をつくる	交通利便性の向上、住環境の向上
		緊急時や災害時に支え合う地域づくり
	暮らしを支える環境をつくる	防犯、事故防止体制の充実
		情報・こころのバリアフリーを推進する
	ルールやマナーを守り環境美化に努める	

出所：『多賀城市地域福祉計画（第2期）』より柳井が作成。

注：網掛け部分が本稿における考察対象。

念は「ともに支え合い みんなが安心して暮らすまちづくり」とし、「市民一人ひとりが自ら住む地域に積極的に」関わる事を目指し、「積極的に地域の課題解決に参加」していくことを求めている（同報告書 p5）。その具体的目標として「1 助け合い支え合えるまちをつくります」「2 お互いの立場を認め合うまちをつくります」「3 支え合いのネットワークがあるまちをつくります」「4 安心して安全快適に暮らせるまちをつくります」を掲げている。

ここでは、表2のように本稿の目的に比較的合致している事業（網掛け部分）を対象に考察を進めていくこととする。尚、事業の選択は基本目標（1～4）のうち、2は啓発事業や男女共同参画事業のように、地域福祉よりも範囲がひろい事業であり、4はハード整備や、防災時の体制整備やマナー教育等が主になっているため、対象から外すこととした。また、1のうち、施策「市民一人ひとりが地域社会の一員としての意識を高める」に該当する事業も、理解・関心・伝承・教育等が主なので対象から外した。3の施策「自立した生活ができるまちづくり（保健・医療・福祉サービスの充実）」では雇用以外は健康づくりと社会弱者への支援となっているのでこれも外し、事業「自立を支える働く場づくり」のみを対象とした。よって、ここでは6事業を対象に検討を進めていくこととする。

### (3) 事業内容の概要

ここでは、対象となった事業計画をグループ化して説明する。予め断っておくが、各事業計画はグループの領域を跨ぐ場合もある。その場合は軽重を判断してグループ分けを行っている。また、各事業計画では、市民の取組み、地域の取組み、行政の取組みと3層の取組で説明されているので、本稿でもそのような視点からグループ化の説明を行う（表3）。

市民の取組みは、回覧板や掲示板等の情報や地域に関心を持ってもらう事（A1, A6, A8）、隣近所や転入者への声かけをして地域・地区の行事への参加を呼び掛けること（A2, A3, A4, A7）、地域コミュニティへの誘いが（A8）示されている。また、「地域の人材発掘や育成とそのサポート」では、自分自身の経験や能力・技術を地域で活かすように促す取組みや（A5）、「自立を支える働く場づくり」では、仕事を通した生きがいづくりを進め、地域や社会へ貢献することも示されている（A9）。

地域の取組みでは、対話や情報の共有と広報活動がある（B1, B2, B10, B11）。これは、対話の機会と場所の設置や、地域課題の住民との共有、社会福祉協議会との連携や情報発信等が該当する。各主体の参加と連携（B3～6, B8, B9）について、これは住民、新聞配達、郵便配達、宅配業者、社会福祉協議会、民生委員児童委員等の連携が該当する。その他、人材発掘（B7, B12）と、障がい者や高齢者の雇用促進（B13）がある。

行政の取組みでは、ホームページや・広報活動による支援がある（C1, C9, C11）。これ

表3 各事業の取組み内容

事業	市民の取組み	地域の取組み	行政の取組み
地域活動への参加促進	A1: 回覧板や掲示板の情報に関心を持つ	B1: 住民相互に対話できる機会と場所を設ける	C1: 広報多賀城や市のホームページを通して支援
	A2: 隣近所の声がけ、地区の行事に積極的に参加	B2: 地域課題を住民と共有	C2: 団体の情報提供や活動を支援課題解決のための学習機会を提供
	-	B3: 計画から事業実施に多くの住民参加を促す	C3: 自治会や町内会、住民との対話の機会支援
地域での支え合い、助け合い、見守り合い	A3: 地域ぐるみでのあいさつや声がけ、人との交流の輪を広げるように促す	B4: お互いに助け合い、小さな親切を積み上げる仕組みを作り	C5: 地域における安否確認体制と関係機関等との連絡体制を整備、緊急通報システムの利用促進
	A4: 転入者への声がけなどを行い、地域の行事への参加を促進するとしている。	B5: 福祉事業者のほか、新聞配達や郵便配達、宅配業者などの一般事業者も、孤立死などを防ぐ見守り活動に参加	C6: 孤立死などを防ぐため、関係機関に見守り活動参加への働きかけ、各関係機関とのネットワークや連絡体制を整備
	-	B6: 地域活動（市広報配布等）を通じて日常的な見守り活動を行う	-
地域の人材発掘や育成とそのサポート	A5: 自分自身の経験や能力・技術を地域で活かすように促す	B7: 地域の行事や活動を通して、地域の人材の発掘を行う	C7: 様々なニーズに対応した研修を開催し、地域福祉の担い手の育成に努める
地域福祉推進体制の整備	A6: 広報多賀城や回覧板には必ず目を通し、地域に関心を持つように促す	B8: 多賀城市の社会福祉協議会や行政と連携し、地域福祉やボランティアについて話し合いの場を設ける	C8: 社会福祉協議会が行う地域福祉活動との連携を図り、その支援を行う
	A7: 転入者への声がけなどを行い、地域の行事への参加を促す	B9: 民生委員児童委員が活動しやすいように支援	C9: 民生委員児童委員をPR
	-	B10: 社会福祉協議会のボランティア活動の支援を充実させ、同協議会をPRしていく	C10: 福祉施設間のネットワークや、市民・地域・行政による地域福祉ネットワーク会議を立ち上げる
地域の活動や団体間の交流の促進	A8: 隣近所に積極的に関わり、地域に関心を持つ	B11: 地域で活動しやすい場やきっかけをつくり、地域の活動や団体の情報発信・情報共有を行っていく	C11: 福祉活動等のノウハウを、広報多賀城や市ホームページなどで紹介し、他の地域にも広める
	-	B12: 地域の活動に参加したい人や、関心や興味が高い人たちを取り込む	-
自立を支える働く場づくり	A9: 仕事を通じた生きがいづくりを進め、地域や社会へ貢献	B13: 事業者や企業による、高齢者や障害者の雇用促進	C12: 地域職業相談室での情報提供や、就職支援講座の開催
	-	-	C13: 障害のある人の雇用・就労の確保のため、相談や情報提供、企業などへの雇用確保の働きかけ
	-	-	C14: 高齢者の経験と能力を活かし、働く生きがい対策としてシルバー人材センターの支援

出所: 『多賀城市地域福祉計画(第2期)』より柳井が作成。

注: 表中のA: 市民, B 地域, C: 行政の取組みを示す。同番号は整理番号。

は広報や市のホームページを通じた支援、民生委員児童委員をPR、事例紹介による団体や個人が持つ知識・情報・経験を全体で共有化していく取組み等が該当する。次いで、情報提供・学習・研修活動がある（C2, C4, C7）。広報よりは一步踏み込んで、学習機会の提供、様々なニーズに対応した研修会の開催等が該当している。各主体との対話や支援では4事業が該当している（C3, C8, C10, C14）。住民や自治会・町内会との対話、福祉協議会への支援、地域福祉ネットワーク会議の設立、シルバー人材センターの支援等がある。この他、東日本大震災発生時で重要になった緊急時の安否確認や、孤立死を防ぐ取組み（C5, C6）もある。また高齢者や障がい者雇用（C12, C13）もある。

参加型地域福祉を考えていく場合、これらの守備範囲とその取組みの程度が課題になってくると考える。そのため、次章ではオスロ市（ノルウェー国）の事例を検証する。

#### 4. オスロ市（ノルウェー国）の地域福祉に関する実態調査

##### (1) 当該施設調査の背景

地域福祉行政を展開するために行政は住民のニーズや地域の実情を迅速に把握しなければならず、そのためには住民の地域福祉への参加が不可欠である。2000年に改正された社会福祉法の第4条で、地域福祉の担い手の一番に「地域住民」があげられているものの、わが国では依然として住民は福祉サービスの受給者としての意識が根強い。東日本大震災被災地の復興においても住民が地域福祉に参加することによって、住民が抱える生活課題解決のための手段や方法策を合理的かつ効率的に進めることが不可欠であることから、地域福祉への住民参加が根付いているノルウェー、オスロ市でサントンスハウゲン高齢者センターとローカル・コミュニティセンター（旧ボランティア登録センター）を対象に、住民参加による地域福祉の現状の調査を実施した。ノルウェー国民のボランティア参加率は極めて高く、大藪（2006）によると、成人のボランティア参加率は52.0%であり、今回調査を実施したオスロ市のサントンスハウゲン高齢者センターとローカル・コミュニティセンターに限らず、住民参加がノルウェーにおける地域福祉サービスの下支えになっていることが推察できる。

##### (2) 高齢者センター

調査日：平成25年8月30日

調査対象：オスロ市サントンスハウゲン高齢者センター（St. Haugen Eldresnter）

調査方法：高齢者センター職員とセンター利用者への面接による聴き取り調査

### ① サンタンスハウゲン高齢者センターの概要

センターは、何らかの介護や援助が必要な高齢者が利用するのではなく、元気な高齢者を利用の対象とした事業を運営している。教区の教会が経営母体で自治体の業務を請け負う形態をとっていて、従業員は8名（5名がフルタイム、3名がパートタイム）が勤務している。センターは、オスロ市からの事業を受託して、介護予防事業、リハビリテーション事業、健康づくり、配食事業、栄養を提供して健康を促すためのレストラン事業も行っている。近隣住民同士の社会的なネットワークの場づくりとして開催する講座やセミナーは、近隣住民が健康を保ち、自宅で長く暮らし続けることを支援する目的で行われ、多くの市民がボランティアとして主体的に関わっている。センターには、フットケア、美容院、が併設され、近隣の住民も利用が可能であり、ソーシャル・ワーカーを配置して、訪問看護と協力して地域の生活課題を抱える住民の相談にも応じている。

また、ノルウェーでも独居老人の男性の自殺率が高く、高齢男性の交流を目的とするセミナーを週1回開催している。セミナーへの参加者は、訪問看護やヘルパー、ソーシャルワーカーが独居老人宅を訪問した際にリクルートしている。これらの事業もオスロ市からの受託事業であり、最低3年間の専門教育を受けた日本の社会福祉士に相当するソーシャル・ワーカーの有資格者が業務に従事している。

センターの年間の運営予算は400万NOK（調査時1NOK=13円）で、三分の二が自治体から拠出され、不足分は教会や市民の寄付、センター利用者が製作する手工芸品のバザーで賄っている。バザーはイースターやクリスマスに開催され、83歳から97歳のボランティアの作品に抽選券を付けるなどの工夫が施され、年2回の開催で8万NOKの収益をあげ、センターの重要な運営資金になっている。

職員は教会の職員扱いとされ、自治体から提供される運営費は職員の給与には使われずセンターの運営のみに使い、職員の給与は教会が支払う。当該センターでは教会からの寄付が運営に充てられるためセンターの利用は無料であるが、他の高齢者センターでは自治体からだけの受託金だけでの運営は難しく、会費制をとるところもある。

### ② 住民参加

センターの業務は近隣住民のボランティアに支えられているのが特徴であり、2015年度の第1四半期(4ヶ月)で64人のボランティアが登録して延べ3,918時間の仕事をボランティアが担っている。これは、7名の職員がフルタイムで働いた換算になり、ボランティアはセンター運営に欠くことのできない存在になっている。

2014年度は、74名がボランティアの登録をして、14,014時間の仕事に従事しているが、33名が80歳以上の高齢者であった。



写真1. 高齢者センター



写真2. 高齢者センター内作業スペース



写真3. パソコン講座スペース



写真4. レストランで働くボランティア

ボランティアとしての住民参加の背景には、年金受給者になっても社会に役に立ちたいという意識があり、健康寿命の延伸を兼ねて活動する高齢者訪が多く、基本的な福祉サービスは自治体が担い、足りないところを近隣住民が担うという考えが根付いた社会がノルウェーの地域福祉の特徴といえる。

聴き取り調査を行った日も、高齢者がボランティアとして働いていた。ボランティアの多くは近所の高齢者で受付もボランティアの高齢者が交代で関わっている。利用者にはセンターまでの送迎もしている、レストランは近隣の住民がホットミールを食べるために毎日利用している。自分で洗濯ができない高齢者が洗濯物を持ち込む事もできる。80 NOKで袋いっぱい詰め込んだ洗濯物を洗濯してくれる。送迎の運転もレストランの厨房も洗濯をするのももちろんボランティアたちである。配食サービスは近隣の外出ができない高齢者のために毎日35~40食を65 NOKで届けている。この価格ではボランティアがいなければ配食事業を継続することはできないばかりか、ボランティアは食事を届けるだけでなく、利用者の話し相手になって孤独感を解消する役割も担っている。

印象的だったのは、センターでは精神障がい者の社会復帰を支援するために、送迎のボラ



写真5. レストランの受付をするボランティア



写真6. 高齢者センター内, レストラン

ンティアの受入を行っている。社会復帰する際に自動車の運転を身に付けさせて社会復帰のステップにしてもらうことが目的で、若者がこのプログラムに積極的に参加していた。

サンタンスハウゲン高齢者センターの調査をとおして、高齢者は福祉サービスの受給者であるとする考えから、健康寿命の延伸、生きがいつくり、元気なうちは自らがサービス提供者として積極的に地域福祉活動に参加する意識がノルウェーの地域福祉の原動力になっていることが示唆された。

### (3) ローカル・コミュニティセンター（旧ボランティア登録センター）

調査日：平成25年8月30日

調査対象：オスロ市 Bjerke nærmiljøsentner ローカル・コミュニティセンター

調査方法：センター職員への面接による聞き取り調査

#### ① Bjerke nærmiljøsentner の概要

ローカルコミュニティセンターは、ボランティア登録センターとして設立され、オスロ市 Bjerke 地区のボランティアの依頼者と協力者のマッチングを主な業務としていたが、現在は日本のコミュニティセンター的な位置づけになっている。

センターはオスロ市が経営しており、専従の職員はわずかに1名で、近隣地域すべての世代の文化、スポーツ活動の支援、施設の貸し出しなどの他、知的、精神障がい者の作業所が併設され、週5日営業のカフェ、美容室、フットケアも開設されている。

センターの主な活動は、子どもたちの劇場、移民者への語学教室、ヨガ、データクラフト、音楽、ダンス教室、シニア映画館、スポーツジム、パソコン教室、移民者へのアルペンスキー、クロスカントリースキーの貸し出しなど多岐にわたり、これらの活動のすべてが近隣住民のグループにより運営されていることが特筆すべき点である。

例えば、市民グループが高齢者の体力づくりを目的とする活動を行なう場合、オスロ市が



写真7. センター外観



写真8. 高齢者のスポーツジム



写真9. 宿題ヘルプ活動とカフェ



写真10. 障がい者の作業スペース



写真11. センター内美容室



写真12. 移民者へのスキースの貸し出し

フィットネスマシーンなどを配備して、運営は市民グループが参加者から年間 250 NOK の会費を徴収して、自分たちでクラブ活動を運営する仕組みをとっている。同様に、移民者への語学教室や高齢者へのパソコン教室、女性のヨガ教室なども同様にすべての活動が市民グループにより運営されており、センターは活動スペースを近隣住民に提供するだけにすぎない。センターの1名の専任職員は、こうしたセンターの活用を近隣住民に広報する啓発活動

が主な役割になっている。

同様に、センターに入っている障がい者の作業所は、オスロ市がセンターの一部障がい者の支援グループに提供し、障がい者が従業員として働くカフェの運営と併せて市民グループが行っている。

St. Haugen Eldresnter（サンタンスハウゲン高齢者センター）と、Bjerke nærmiljøsentner（ローカル・コミュニティセンター）への聞き取り調査をとおして、ノルウェーの社会福祉は、ベーシック社会福祉の制度は国民のゆらぎない社会保障費の負担により充実していることに加えて、市民は福祉サービスの受給者としての市民ではなく、自らが主体的に地域の福祉づくりに参加して作り上げられている、「住民参加」によって成り立っていることがわかった。

## 5. 考 察

ここでは、多賀城市の復興計画の該当事業と2つの事例調査を比較検討する。まず、多賀城市の事業について、市民、地域、行政の取組み別にその守備範囲を整理すると表4のようになると思う。個別事業の守備範囲は当然複合領域を跨いで行われるものもあるが、ここでは事業目的の軽重を判断して整理した。

まず、市民の取組みは、回覧・掲示板といった媒体を中心に広報活動が行われ、転入者へのいざないや、住民相互の信頼醸成を目的とした活動、それに生きがいづくりが行われている。地域の取組みは、対話・情報共有・広報活動と連携、地域福祉の担い手発掘がある。行政の取組みでは、広報活動、各主体との対話・連携・支援、学習・研修機会の創出がある。

その他に、緊急時の安否確認や孤立死の防止（行政）、障がい者・高齢者雇用促進（地域・行政）等も特徴として指摘できる。

このような取組に対して、オスロ市の事例から指摘できる、「住民参加の実態」、「相互扶助の実態」、「施設運営」の視点からみた、多賀城市の福祉計画への評価は次の通りである。

まず、「住民参加の実態」について、オスロ市では基本的な福祉サービスは自治体が担い、

表4 市民・地域・行政別取組みの主な守備範囲

	いざない・住民相互の信頼醸成	生きがい	広報・情報	人材発掘	対話・連携	学習・研修
市民	○	○	○			
地域			○	○	○	
行政			○		○	○

注：柳井による整理

足りないところを近隣住民が担うという考え方（自発性）が根付いているため、サントンスハウゲン高齢者センターの事例のように、近隣ボランティアが施設運営の実務を担っていることが多い。多賀城市の福祉計画では、いざないや住民相互の信頼醸成に取り組みが集中している。むしろ、オスロ市のような「ボランティア参加の自発性」の醸成とその仕組みづくりをどのように行っていくかについて、もっと深く検討していく必要があるのではないだろうか。

「相互扶助の実態」について、オスロ市の事例では年金受給者になっても社会に役に立ちたいという意識があり、健康寿命の延伸を兼ねて活動する高齢者が多いことが指摘できる。つまり受益者が同時に与益者にもなっている。これは、利用者の話し相手になって孤独感を解消する役割も担っていることから一石二鳥の効果も見込める。多賀城の福祉計画では、受益者による与益者としての社会参加への仕組みについては記述がみられなかった。しかし、冒頭の地域福祉の定義でも述べたように、社会、経済、文化に限らず、あらゆる分野の活動に参加できる機会が得られるようにすることが地域福祉であるとするならば、健康な高齢者以外（例えば障がい者）にも、そのような機会を保障する必要があるのではと考える。

「施設運営」に関して、サントンスハウゲン高齢者センターでは、社交的なネットワークの場づくりと、そのための講座や運動、セミナー等を開催して、近隣住民が健康を保ち、自宅で長く暮らし続けるように支援している。そこには、近隣住民が自宅で長く生活できるように工夫が凝らされている。更に、同センターにはレストラン、フットケア、美容院も併設され、一般住民が立ち寄れる雰囲気作りもなされている。

ローカル・コミュニティセンターでは、オスロ市から人員および財政削減を受け、諸々の事業活動が徐々に廃止または縮小しているが、サントンスハウゲン高齢者センターでは、教会がオスロ市の業務を請け負うかたちで運営を行い、不足金は教会や市民の寄付、センター利用者が製作する手工芸品のバザーで賄っていた。また、職員は教会の職員扱いとされ、補助金からは独立した扱いとなっている。

多賀城市の総合計画では、社会福祉協議会の活動活発化と自立運営の促進が課題として指摘されていた。それを踏まえて、地域福祉施策では、福祉協議会などの連携・支援が打ち出されているが、民間組織という事もあって同協議会の運営内容まで踏み込めていない。その点からも補助金が人件費に消えないようにして、事業そのものの独立性と運営の健全性をどう担保していくかが今後も課題となっている。

オスロ市の事例調査を通じて、多賀城市における福祉計画には、住民が参加しやすい受け皿づくり（関連施設の整備も含む）、受益者（高齢者や障がい者）と与益者（それ以外の市民）の二分法的理解の排除、ボランティアなどが実際に働く場面の想定またはそれを組み込んだ

事業計画の策定、関係機関への運営費交付を行う際の事業採算性と固定費のコストダウンへの専門的支援等、考慮すべき対象と分野がまだあると考える。

人口減少と高齢化率が上昇傾向にある中で、しかも東日本大震災からの復興を使命とする多賀城市にとって、参加型地域福祉の推進は重要な施策の一つとなっている。その点でも、地域福祉施策の更なる進化が求められている。

本研究は省科学研究費補助金、挑戦的萌芽研究（平成24～26年度）、課題番号24652165（研究代表者：柳井雅也）の助成を受けて調査を行い、その成果を公表したものである。

### 注

- 1) 1, 2, 3, 5は柳井雅也、4は増子正で分担して執筆した。また、『第五次多賀城市総合計画』と『多賀城市震災復興計画』には柳井・増子が委員として、『多賀城市地域福祉計画（第2期）』では増子が委員として関わっている。論文では特定の立場や利害に関係なく、その後調査などから得られた知見を元に分析を行った。
- 2) 全国社会福祉協議会 HP (<http://www.shakyo.or.jp/seido/tiiki.html> 2013年12月11日確認)を参考。また、「社会福祉法」の第三条には福祉サービスの基本的理念として「福祉サービスは、個人の尊厳の保持を旨とし、その内容は、福祉サービスの利用者が心身ともに健やかに育成され、又はその有する能力に応じ自立した日常生活を営むことができるように支援するものとして、良質かつ適切なものでなければならない」。また、第4条の地域福祉の推進では、「地域住民、社会福祉を目的とする事業を営む者及び社会福祉に関する活動を行う者は、相互に協力し、福祉サービスを必要とする地域住民が地域社会を構成する一員として日常生活を営み、社会、経済、文化その他あらゆる分野の活動に参加する機会が与えられるように、地域福祉の推進に努めなければならない。」と規定している。
- 3) 実際は、住民票を残したまま現地を離れて生活をする人もいたりして、在住人口の正確な把握は困難である。
- 4) 多賀城市資料による各市町村の高齢者数および高齢化率は2013年12月現時点で、2010年データまでしか確認できていない。また、多賀城市（2011年12月末）の人口データは、多賀城市役所 HP: <http://www.city.tagajo.miyagi.jp/> より確認（2013年12月9日）。
- 5) 「商品・設備等被災」には、全壊・半壊・床上浸水、床下浸水の被災数が一部含まれている。

### 参考文献

- 大藪元康（2006）：「ノルウェーにおける社会福祉サービス供給体制のあり方」『中部学院大学紀要』第7号、pp 48。
- 多賀城市（2011）：『第五次多賀城市総合計画（2011～2020年度）』。
- 多賀城市（2011）：『多賀城市震災復興計画』。
- 多賀城市（2013）：『多賀城市地域福祉計画（第2期）』。

[Article]

## A Reading of *The Waste Land*

KIKUCHI Hiroshi

### 5. “What the Thunder Said”

Seeing from the total perspective of *The Waste Land*, the stage has already shifted to the destruction of cities to the wandering to the desert land. This amounts to George Steiner’s understanding of the *Iliad*: “When a city is destroyed, man is compelled to wander the earth or dwell in the open fields in partial return to the manner of a beast”.<sup>1</sup> At the same time, this shift concurs with that from the time of oblivion to the time of thunder in Kristeva’s “time of abjection” (*Powers of Horror*, 9). The time of abjection, according to Kristeva, is double because the time of veiled infinity (of death ?) and the moment when revelation bursts forth are brought together (Parenthesis is mine). It is the moment when a flash of lightning thrusts into infinitely jettisoned time.

Now, the title of this section gives it a framework within which a series of fragmentary scenes runs. The framework is indebted to at least two stories from Greek myth and from the Bible. First, at Olympia Zeus was worshipped under the surname of Thunderbolt. He wielded the thunder and lightning as well as the rain (Frazer, 184). It goes without saying that water or rain is an essential of life. Secondly, the role of God in the Old Testament is similarly related: “On the morning of the third day there were thunders and lightnings, and a thick cloud upon the mountain, and a very loud trumpet blast, so that all the people who were in the camp trembled. Then Moses brought the people out of the camp to meet; and they took their stand at the foot of the mountain. And Mount Sinai was wrapped in smoke, because the Lord descended upon it in fire; ...” (Exodus 19: 16) and “...when he made a decree for the rain,/and a way for the lightning of the thunder;/then he saw it and declared it; he established it, and searched it out” (Job, 28: 26-8), and the like. But there has occurred a deep change in our understanding of myth, i.e. myth has already lost its power. Therefore, the landscape here depicted by Eliot is thoroughly demythologized, and the mood is withered and exhausted, as can be seen in the phrase: “Of thunder of spring over distant mountains” and “But dry sterile thunder without rain”. In this climate, Conrad also created “the Jupiter-like Kurtz” (Knowles, 126).

Now, as a prerequisite to reading “What the Thunder said”, I would like to have recourse to Charles Taylor’s study of the development of modernity which he calls secular. Taylor’s powerful motors in his speculation are two concepts of “porous” self and “buffered” self. Each self is molded in the earlier enchanted world and in the modern disenchanting/disengaged world. In the enchanted world, religion (or “transcendence”), God or Gods, was “everywhere”, was interwoven with everything else. The enchanted world is the place in which the line between personal agency and impersonal force was not at all clearly drawn; it was fuzzy.

On the other hand, in the disenchanting world, when we function within various spheres of activity, economic, political, cultural and so on, we don’t need to make reference to God and any religious beliefs. In the pre-modern world before 1,500, defined by Taylor, meanings are not only in minds, but can reside in things, or in various kinds of extra-human but extra-cosmic subjects. The meaning exists already outside of us, prior to contact. Moreover, the meaning in things includes another power. These “charged” objects can affect not only us but other things in the world. They can affect cures, save ships from wreck, end hail and lightning, and so on. In other words, the porous self is vulnerable, to spirits, demons, cosmic forces (*A Secular Age*, 38).

By contrast, the buffered self abolishes “magical thinking, myth, fantasy and has confidence in our own powers of moral ordering. The only locus of thoughts, feelings, spiritual élan is what we call minds (30). Minds are bounded, so that these thoughts, feelings, etc., are situated “within” them. As thoughts and meanings are only in minds, there can be no “charged” objects. The buffered self takes out of the world the fears, anxieties, terrors which the porous self felt and gives its own autonomous order to its life, though those feelings hidden (repressed) in the mind amounts to the rich symbolism of which Freud later locates in the depths of the psyche (540). In a sense, this is a process of objectification, which gives the self a sense of power and control and is intensified by every victory of instrumental reason (548). Taylor calls it mind-centered disenchantment. According to Taylor, with time passing, the porous self has been replaced by the buffered self.

The rise of the buffered self has been accompanied by an interiorization; that is, not only by the Inner/outer distinction, but by the growth of various spiritual disciplines of self-exploration, the development of the modern novel, the rise of Romanticism, the ethic of authenticity (540). Privacy and intimacy gradually invade social space. So the buffered, disciplined self sees him/herself more and more as an individual. Of course, individualism is the normal fruit of human self-regard absent the illusory claims of God, the Chain of Being, or the sacred order of society (571). We moderns behave as individuals, because that’s what we naturally do when no longer held in by the old religions (571).

Moreover, the interiorization is reinforced by the immanent frame of spirituality sloughing off the transcendent. In other words, the world structures which are closed to transcendence is the “immanent frame” (557). This move not only causes our great emancipation from the old yokes of tradition but more or less characterizes our predicament in the modern West (549). The “subtraction” view of modernity, arising from the washing away of old horizons, leads to the rise of modern humanism, which is deeply connected with the death of God (572). Taylor contends, “The logic of the subtraction story is something like this: once we slough off one concern with serving God, or attending to any other transcendent reality, what we’re left with is human good, and that is what modern societies are concerned with” (572). This buffered distance to the transcendence becomes part of the complex modern-European concept of “civilization” (301).

A secular age is one in which the eclipse of all goals beyond human flourishing become conceivable (“Introduction”, 19). In other words, the age is one in which we don’t need power transcending the immanent order and are in a self-sufficing humanism. But for Taylor, the eclipse of the transcendent is identical with the loss of meaning. Taylor says, “our age suffers from a threatened loss of meaning. This malaise is specific to buffered identity, ...” (303). Thus, the issue about meaning is a central preoccupation of our age. And what we can insist with certainty is that the loss of object is anterior to the loss of meaning. When the object has ceased to exist, the meaning is merely the hallucination of meaning.

Taylor, as if he were conscious of Freud, explains, “the dawning sense in modern times that we are in a meaningless universe, that our most cherished meanings find no endorsement in the cosmos, or in the will of God, has often been described as a traumatic loss, a second and definitive expulsion from paradise” (587).

But the move from the transcendent to the immanent is not a simple way. The move is strongly resisted by Taylor’s “immanent revolt”. A need for meaning, a desire for eternity, can press us against the boundaries of the human domain (723). But the locus of death takes on a new paradigm status (726). Death offers in some sense the privileged perspective, the paradigm gathering point for life. It is possible by the paradoxical idea Taylor called immanent transcending (726). And death also can offer a way to escape the confinement of this domain. According to Taylor, death can bring out the question of meaning in its most acute form (722). People go from the search for meaning, the deepening of our sense of life through our contact with nature and art, death as a denial of the significance of love, to death as an escape from the confines, to the paramount vantage point in which life shows its meaning (726).

Now, Freud already adumbrated the above discussion of Taylor. Freud identifies the progress of spirituality with the development of human culture. One of his beliefs is that in the history of the human species something happened similar to the events in the life of the individual (*MM*, 101). According to Freud, the progress in spirituality consists in deciding against the direct sense perception in favour of the so-called higher intellectual processes — that is to say, in favour of memories, reflection, and deduction (in Taylor “subtraction”) (150). In other words, progress in spirituality and subordination of the senses are deeply concerned with the self-confidence of a person. In the context, the belief in the “omnipotence of thought” is gradually replaced with our mental faculties which can exert on the outer world by changing it (145). With this, the matriarchal structure of society was replaced by patriarchal one (145), because maternity is proved by the senses whereas paternity is a surmise based on a deduction and a premiss.

But later or sooner, paternity also is forced to be replaced by the filial. This also happens in religion. The Mosaic religion had been a Father religion; Christianity became a Son religion. The old God, the father, took second place; Christ, the Son, stood in his stead...(*MM*, 111). Freud continues, “Originally a Father religion, Christianity became a Son religion. The fate of having to displace the Father it could not escape” (175). This argument of Freud of course is at once about the historical development of monotheism and about the process by which we are excluded from both the paternal and maternal as the price of acquiring our subjective freedom. This is the fate of every son, and beyond sexual distinction, of every individual. This view is endorsed by Žižek’s assertion that Greek religion, Jewish religion and Christianity form a triad of reflection (*SOI*, 230).

With this as a background, let’s read “What the Thunder said”. The first part begins in the Garden of Gethsemane, where Jesus was arrested and taken away to be crucified, and in the death of Christ through betrayal (Gish, 92).

After the torchlight red on sweaty faces  
 After the frosty silence in the gardens  
 After the agony in stony places  
 The shouting and the crying  
 Prison and palace and reverberation  
 Of thunder of spring over distant mountains  
 He who was living is now dead  
 We who were living are now dying

With a little patience

The scene also is multi-tiered. And as Brooker says, many images in this passage as well as in other passages, point in too many diverse directions. Brooker further explains, “the details of this verse paragraph...point to figures outside in myth and, at the same time, to figures inside the poem in a contemporary setting” (Brooker, 175). For example, this scene partly overlaps with the subject matter of a painting by Kurtz: “The background was somber — almost black. The movement of the woman was stately, and the effect of the torchlight on the face was sinister” (*HD*, 27-8). Another source, of course, is from John xviii which reports the arrest of Christ in the garden of Gethsemane: “So Judas, procuring a band of soldiers and some officers from the chief priests and the Pharisees, went there with lanterns and torches and weapons” (Southam, 136).

In this paragraph, time’s passing is of importance. Time is not a single line but is overridden. If time is unreal, a series of future and present and past is never self-evident. In fact, there are a variety of time-series in *The Waste Land*. Here it makes for a coexistence of past and present, revaluing both in complex, unsettling ways: “He who *was* living are *now* dying/We who *were* living are *now* dying” (Italics are mine).<sup>2</sup> According to Brooker’s explanation, the opening lines suggest that Christ’s suffering in Gethsemane, his betrayal and arrest, and his trial and Crucifixion are recent events. And furthermore, since the narrator seems to have lost hope, the lines suggest that the narrator is speaking after the Crucifixion but before the resurrection (174).

Moreover, the contrast of “He” and “We” may imply that of Christ and us, comparing Christ’s death and our death. For better or worse, we, even if living in prison or in palace, can die only with the burden of ourselves. In this paragraph, color and sound and touch are all painful and intense: torchlight, agony, frosty silence, shouting, crying (Gish, 93). The reader is suspended between ‘living’ and ‘dying’ (Reeves, 85). Brooker says, “perhaps this passage should be read as an indication that salvation through sacrifice of the hero is itself dead, no longer operative in the modern world” (174).

So here is the place for us to sum up the features of Eliot’s poetic language. So far the complaint has been often made that language has been deprived of “alterity”, flattened, and emptied. In short, the constitutive, revelatory power of language is totally sidelined and ignored, or even denied (Taylor’s *A Secular Age*, 758). This is the degradation of language to an instrument. A remote cause for this phenomenon Taylor seeks in modernity: “the collapse of a sense of the eternal brings on a void, a kind of crisis” (*SA.*, 722). In this regard, Eliot says that language in a healthy state presents the

object, is so close to the object that the two are identified” (*Essays*, 327). For him, “the language which is more important to us is that which is struggling to digest and express new objects, new groups of objects, new feelings, new aspects, ...” This, in a sense, is the demand for Steiner’s “otherness” as objects. Steiner claims that language should acquire the power to posit “otherness”: the ability to gainsay or “unsay” the world, to image and speak it otherwise”.<sup>3</sup>

Under the circumstances, Eliot’s poetic language, as Taylor says, is compelled to be a subtler one with a kind of suspension or indeterminacy of ontological commitments (757). The set of reference points is not fixed. Taylor says, “the language *can* be taken in more than one sense, ranging from the fullest ontological commitment to the transcendent to the most subjective, human-, even language-centred” (757). Moreover, Taylor goes on, “this indeterminacy can serve to find a way back to the God of Abraham” (757). This indeterminacy makes possible what A.W. Moore calls the *infinitude* of meaning, whether literally, metaphorically, analogically, ironically, hyperbolically, or whatever.<sup>4</sup> There the open-texturedness and versatility of meaning are created.

As Brooker points out, what is dramatized in the second paragraph beginning with the line “Here is no water but only rock” is arduous, desperate, painful climbing. And when we read the paragraph, we should notice the difference between it and one scene in Arnold’s “Empedocles on Etna”, another climbing story: — “Ah, boil up, ye vapours !/Leap and roar, thou sea of fire !” and “They (Apollo’s choir) bathe on this mountain,/In the spring by their road;/then on to Olympus,/Their endless abode”.<sup>5</sup> In the poem, Mt. Etna is still alive and boiling up, while the mountain in “What the Thunder said” is dead: “Dead mountain mouth of carious teeth that cannot spit/Here one can neither stand nor lie nor sit”. In “Empedocles on Etna”, there is the spring by the road, and Empedocles, not only “the banished citizen” but also “a wanderer from of old”, was able to take a rest on the way to the peak, and finally to become alone. Meanwhile in “What the Thunder said”, the landscape is more infertile: “here is no water”. But even Arnold’s Empedocles, who longed for something irrevocably lost, had already been infected by the alienation from nature: “Oh, that I could glow like this mountain !” It partly was the cost of his Socratism that is bent on the extermination of myth. For Eliot, it is more serious that not only the gods of Greek myth but Jahve as a volcano-god have already died (Freud’s *Moses and Monotheism*, 55).

Now, it is well known that, in the lines 322-94, three themes can be specified: the journey to Emmaus; the approach to the Chapel Perilous; the decay of Eastern Europe (Kermode, 105). And, the Garden of Gethsemane, then, who are sweaty faces ? If lines 322-28, as Kermode notes, allude to events from the betrayal of Christ to his death, are they the disciples ? They hesitate to pray with

Jesus, when he went into the garden to pray. In any case, we cannot identify who they are. But anyone (i.e. the people living in prison and palace) can never evade the agonies that are shouted and cried (i.e. a versification of various agonies). The world is full of agony. In the predicament, we scarcely get “a hint of possible renewal”: “reverberation/Of thunder of spring over distant mountains”. Things go back and forth.

In our secular times, the old myths and legends have been eroded: Adonis and Osiris and Orpheus were dead. Christ also is dead: “He who was living is now dead”. Gish says, “the death of Christ through betrayal, which, according to the Christian story, symbolically functions for the death of all” (92-3). The absolute finality of death prevails over everything without exception. As Reeves comments, we, in reading this passage, are suspended between ‘living’ and ‘dying’, between hopefulness and hopelessness. In such a situation, can we truly see the possibility that the restoration of Christ, like that of the pagan fertility gods, carries potential salvation for all? Unfortunately, in *The Waste Land*, the possibility is never revealed on a full scale. In the former chapter, the death of Adonis or Phlebas is determined.

Here is no water but only rock  
Rock and no water and the sandy road  
The road winding above among the mountains  
Which are mountains of rock without water  
If there were only water amongst the rock  
Amongst the rock one cannot stop or think  
Seat is dry and feet are in the sand  
If there were only water amongst the rock  
Dead mountain mouth of carious teeth that cannot spit  
Here one can neither stand nor lie nor sit  
There is not even silence in the mountains  
But dry sterile thunder without rain  
There is not even solitude in the mountains  
But red sullen faces sneer and snarl  
From doors of mudcracked houses  
If there were water  
And no rock

If there were rock  
 And also water  
 And water  
 A spring  
 A pool among the rock  
 If there were the sound of water only  
 Not the cicada  
 And dry grass singing  
 But sound of water over a rock  
 Where the hermit-thrush sings in the pine trees  
 Drip drop drip drop drop drop drop  
 But there is no water

What we have here is the place of wilderness. It is best expressed by the phrase of “a God-forsaken wilderness” in *Heart of Darkness* (Knowles, 15). “Rock without water” signifies the fertility of the land in the way of the lack of relation which objects and objects naturally have. Here space (rock) is only a container, indifferent to what fills it (water), which is expressed with the repetition of the word “amongst”. In other words, any correlation between “rock” and “water” cannot be established. Thus, this scene is an emblem of a dissociation of segments of “modern space” from what happens to be filling them (Taylor, 58). The dissociation affects the narrator’s sense and imagination. All things in this scene are like hallucinations breaking the connection between representation and reality. As for Bradley, for Eliot “the superficies are the world” (*Essays*, 156), but once cleft, the two can be separated to infinity.

What we can see here is the juxtaposition or collision of the opposites, reality and fantasy, as we see in Duchamp’s works (Brooker explains “What the Thunder Said” with the aid of cubism). For “this bizarre mixture of realism and fantasy subverting all rationality”, the literary way of juxtaposition is effective. Eliot claims, “words perpetually juxtaposed in new and sudden combinations, meanings perpetually *ingeschachtelt* into meanings, which evidences a very high development of the senses,…” (*Essays*, 209). When two heterogeneous things are combined by juxtaposition, new meanings are generated. And since radical juxtaposition (“the collage principle”), as Steiner says, is the representative device in modernism, this is a common method between painting and poetry (*After Babel*, 490). As for painting, collage juxtaposes “real” items with painted or dreamed images. By

undermining the difference between painting and other art genres, Duchamp does this.

Likewise, in this paragraph, the juxtaposition of what is and what can be so perplexes our ears as that of visceral and mechanic form in Duchamp's *Nude Descending a Staircase* does our eyes. Reeves points out that it is a new sound in English poetry—the lines do not move with suppleness; they toil stiffly on (86). Sontag asserts, "If hedonism means sustaining the old ways in which we have found pleasure in art..., then the new art is anti-hedonism" (*Against Interpretation*, 302). Seen from the perspective, Eliot's poetic diction here is anti-hedonism, as Duchamp's work is so. Next come the lines: "But red sullen faces sneer and snarl/from doors mudcracked houses/If there were water." This scene reminds us of the event that Christ ended his days amid the jeers and taunts of his enemies.

Taylor says, "wilderness reflected not just incompleteness but the Fall, not just a further agenda in God's plan, but an opposition to it" (336). In other words, wilderness is also the abode of dangerous forces; of beasts, of course, but also of the bestiality that they incarnate; hence the place of devils and malign spirits (336). This is well phrased by Conrad again: "I've seen the devil of violence, and the devil of greed, and devil of hot desire; but by all the stars these were strong, lusty, red-eyed devils that swayed and drove men — men, I tell you" (*HD*, 19-20). "Red-eyed" and "red sullen faces" are suitable for demons. We cannot bear the experience of horror. So we need to shut it out. We need to shut demons out, to some degree, for the sake of a minimum equilibrium (Taylor, 769). The primitive and shabby houses made of slime or clay would be the symbol of our rudimentary experience.

"Drip drop drip drop drop drop drop" means the endless fall into the dark abyss of time and space. In the long run, this is the horror of the effortless journey which leads to the empty land" in *Murder in the Cathedral*.

Numb the hand and dry the eyelid,  
Still the horror, but more horror  
Than when tearing in the belly.

Still the horror, but more horror  
Than when twisting in the fingers,  
Than when splitting in the skull.

More than footfall in the passage,  
More than shadow in the doorway,  
More than fury in the hall.

The agents of hell disappear, the human, they shrink and dissolve  
Into dust on the wind, forgotten, unmemorable; only is here  
The white flat face of Death, God's silent servant,  
And behind the face of Death the Judgement  
And behind the Judgement the Void, more horrid than active  
shapes of hell;  
Emptiness, absence, separation from God;  
The horror of the effortless journey, to the empty land  
Which is no land, only emptiness, absence, the Void,  
Where those who were men can no longer turn the mind  
To distraction, delusion, escape into dream, pretence,  
Where the soul is no longer deceived, for there are no objects, no tones,...(272).

To consider from the context of the above part, the cicada, dry grass, and the hermit thrush all allude to “the horror of the effortless journey, to the empty land”. But the journey to/across the ruined land is transmuted into the journey to Emmaus. Here also a double meaning works: the desert at a distance from cultivated soil at the same time is the place where one can find God (Taylor, 336).

The lines 331-58 called “water-dripping song” is a deformed hermit-thrush song.

Who is the third who walks always beside you ?  
When I count, there are only you and I together  
But when I look ahead up the white road  
There is always another one walking beside you  
Gliding wrapt in a brown mantle, hooded  
I do not know whether a man or a woman  
—— But who is that on the other side of you ?

This scene, as is well known, is built on the Emmaus journey in Luke 24: 3-31. And it is made

delusive, by connecting with the account of one of the Antarctic expeditions. The third person who appeared there is portrayed during the scene as one who nobody knows. The image of “another one” will serve Žižek’s idea that Christ is “the man without properties” (*The Puppet and the Dwarf*, 80). The narrator says, “I do not know whether a man or a woman”. If we further explain this line by means of Žižek’s account, it would be as follows, “Christ is not ‘sublime’ in the sense of an ‘object elevated to the dignity of a Thing’, he is not a stand-in for the impossible Thing-God; he is, rather, ‘the Thing itself’, or, more accurately, ‘the thing itself’ is nothing but the rupture/gap which makes Christ not fully human” (80). Therefore, the image of Christ here cannot have any positive content.

Žižek goes on to argue, “If, then, as Lacan put it, Gods are of the Real, the Christian Trinity also has to be read through the lenses of this Trinity of the Real: God the father is the “real Real” of the violent primordial Thing; God the Son is the “imaginary Real” of pure *Schein*, the “almost nothing” which the sublime shines through his miserable body; the Holy Ghost is he “the symbolic Real” of the community of believers” (*On Belief*, 82-3). For Lacan, *das Ding* is that which he calls the beyond-of-the-signified, that is, the primordial lost object/Void (VII, 65). This Void is the Void of/as the impossible/real Thing. Then, God, as the real Real, is the being that opens up the space for free people he created in HIS OWN lack/void/gap (Žižek, 146).

On this point, Alain Badiou agrees with Žižek, “Jesus is resurrected; nothing else matters, so that Jesus becomes like an anonymous variable, a ‘someone’ devoid of predicative traits, entirely absorbed by his resurrection!”<sup>6</sup> Here Jesus Christ would be anonymous just as God in the Old Testament is shown as ‘moving among’ the Israelites but as can never be encountered ‘face to face’. For Badiou, the pure event is reducible to this: Jesus died on the cross and resurrected. And this event is “grace” (*khalis*) (63). Without grace, man would be merely an abstraction. For Žižek also, the Event is a pure-empty sign, and we have to work to generate its meaning. But the encounter with the Real as impossible, as it is, is therefore always missed (*PD*, 160). To make it possible is not through a moment of Bradley’s “Absolute” as a philosophical truth but through Jesus Christ as the pure event (Badiou, 48). Then the variable, as we shall later touch on, becomes Eliot’s “objective correlative” or Newman’s “object correlative”, a mode of which is “to bind together all points of view in one” (*Knowledge and Experience*, 163). Together with this, the divided subject and as its symptom the “dissociation of sensibility” could be restored in those entirety, because the actual identity of idea and existence is realized there.

Along this line, Žižek says, “*When I, a human being, experience myself as cut off from God, at that very moment of the utmost abjection, I am absolutely close to God, since I find myself in the position*

*of the abandoned Christ* (Italics are Žižek's)" (*On Belief*, 146). Moreover, Kristeva doesn't forget to add that Christ alone is a body without sin (120). She remarks, "The heterogeneity of Christ, Son of Man and God, resorbs and cleanses the demoniacal. Such heterogeneity does not cease revealing the moral and symbolic existence of infamy; nevertheless, as it is communicated to the sinner by means of his very being, it saves him from the abject" (122).

What is that sound high in the air  
 Murmur of maternal lamentation  
 Who are those hooded hordes swarming  
 Over endless plains, stumbling in cracked earth  
 Ringed by the flat horizon only  
 What is the city over the mountains  
 Cracks and reforms and bursts in the violet air  
 Falling towers  
 Jerusalem Athens Alexandria  
 Vienna London  
 Unreal

For Lacan, *das Ding* is "the beyond-of-the-signified" and at the same time the mother as the pre-historic Other that it is impossible to forget (VII, 87-8). Lacan argues, "What we find in the incest law is located as such at the level of the unconscious in relation to *das Ding*, the Thing. The desire for the mother cannot be satisfied because it is the end, the terminal point, the abolition of the whole world of demand, which is the one that at its deepest level structures man's consciousness" (82). As the *impossible maternal* (italic are mine) Real Thing is prohibited by the symbolic Law, we can never return there. This, as I said before, is known as the law of the prohibition of incest.

The lines "What is the sound high in the air/murmur of maternal lamentation" to the utmost eludes our grasp, is at a distance from us. Would not the lines suggest that the prehistoric or preconscious stage or being laments the history of Europe? In any case, the prehistoric is out of our reach. And if "those hooded hordes" are women, perhaps nomadic and forlorn, their numberless laments are murmured here. But their laments can never be healed, just as Coriolanus' death did not soothe the grief of mothers whose sons were killed by him. And the narrator can never feel intimacy with and is estranged from this landscape. Our sight is confused. Thus, the lines carry some of the narrator's

ambivalent feelings toward the maternal. In addition, Brooker's search for the unification of Bradley's "immediate experience" and J. Piaget's "infancy" would be impossible without the presumption of the prehistoric stage (206–22).

The phrase, "Over endless plains, stumbling in cracked earth/Ringed by the flat horizon only", signifies that there are cracks ("rupture" in Žižek's terminology) within the circumference of our knowledge and action. Space is not flat but multi-dimensional and unsolid. It is "endless" and at the same time "ringed", i.e. circumscribed. Perhaps the narrator would feel the world as "a limited whole" in that "space is a relation between terms, which can never be found" (*Appearance and Reality*, 32). Brooker says, "Forward, backward, sideways, upward, downward — all spatial directions fail,..." (185). But time, Brooker goes on, still remains a persistent dimension of reference in the sounds of clocks and singing voices (185). And these all also are conveyed from a distance. Moreover, the effect of the impasse the lines give is heightened by the next lines, "What is the city over the mountains/Cracks and reforms and bursts in the violet air". Not only the city but everything, as was incorporated in Tiresias, is in liminal hour (in the violet air) between destruction and creation, death and life. Gish comments, "The desert land merges with the mountains and cities of Europe in a scene of general destruction and lamentation. London is the last in a series of cities doomed to be destroyed, and the closure on "Unreal" brings back the city of 'The Burial of the Dead'" (95).

A woman drew her long black hair out tight  
And fiddled whisper music on those strings  
And bats with baby faces in the violet light  
Whistled, and beat their wings  
And crawled head downward down a blackened wall  
And upside down in air were towers  
Tolling reminiscent bells, that kept the hours  
And voices singing out of empty cisterns and  
exhausted wells.

According to Southam, "the hair" is both a symbol of fertility and an object of sacrifice to the fertility god (139). To push it further, this idea may lead to Frazer's idea that to have a part of something (hair) in one's (a woman's) power is to have the whole. But "her long black hair" already loses its vitality and even wears an ominous hue. Kermode makes a comment on the image, "this phantasma-

gorical interlude owes something to Surrealism and to the painter Hieronymus Bosch (106). Here also, into “a woman” many figures are compressed: the hyacinth girl, the typist, and a woman form an overlapping picture of “the cubistic woman” in Brooker’s terms (182).

Needless to say, they are variants of Tiresias who composes a one-many relation in *The Waste Land*. In this relation, Tiresias as an imaginary object acquires reality, so that it, like Becky Sharp in *Vanity Fair*, can be “the identical reference of several points of view” (*Knowledge and Experience*, 126). In other words, Tiresias, as Kermode’s explanatory notes show, is “the point of view from which the exemplars of waste-land degeneracy are seen to meet” (103). Mediated by Tiresias, points of view become interchangeable between the characters, so that the subjective-objective gap can be straddled. Here looms up a possibility that isolated souls can communicate with each other, though in the complicity of degeneracy.

No point of view can be self-sufficient. That is, every point of view could be otherwise. Eliot says, “for the life of a soul does not consist in the contemplation of one consistent world but in the painful task unifying (to a greater or less extent) jarring and incompatible ones, and passing, when possible, from two or more discordant viewpoints to a higher which shall somehow include and transmute them” (148). Then, Tiresias is a dummy dimly prefiguring the higher. In the terms of the double function of “objective correlative”, Tiresias lives on the plane of appearance concealing reality, whereas Christ does on the plane of reality as the negation of appearance. In Ronen’s phrase, the Real cannot be articulated except through the displacements imposed by the symptom (*Representing the Real*, 119).

Now, Kermode goes on, “It (the interlude) continues the theme of apocalyptic terror and looks forward to the horrors that test the knight at the Chapel Perilous” (parentheses are mine). From Kermode’s above argument, we cannot know which work of Bosch sheds on this scene. But among his works bound up with the sense of horror, *Death and the Miser* can be most considered. In the work, a woman with long black hair sits up on the death bed. And from behind the door, Death stares at her. Therefore, the effect the painting exerts on this scene is opposed to that of the fertility symbol. Death overshadows the whole of the scene. The surreal episodes still continue, but faint hopes for salvation are woven into them: “Tolling reminiscent bells, that kept the hours” and “the grass is singing/Over the tumbled graves”.

Next, if “fiddle” also alludes to the poet, “bats with baby faces” may be the manifestations of a disfigured Icarus or poet, or Eliot himself. Here the motif of the necessary limitations of the human word is caricatured. G. Steiner says, “Being, in the nature of his craft, a reacher, the poet must

guard against becoming, in the Faustian term, an overreacher” (*Language and Silence*, 58). That is, the poet must know when to draw back lest he be consumed, Icarus-like, by the terrible nearness of a greater making, of a *Logos* incommensurable with his own. Steiner sees the same in a poet (Orpheus ?) who is racked on his own harp in the triptych of Hieronymus Bosch’s *The Garden of Earthly Delights*. The line “And upside down in air were towers”, corresponding with the line “London Bridge is falling down falling down falling down”, represents the fall of all human enterprises as we, including the poet, try to understand the world.

Moreover, the image of “towers” implicitly foreshows the under-cited phrase from Thomas Kyd’s *Spanish Tragedy*. For Eliot, Thomas Kyd was by no means a despicable versifier but an innovator of language (*Essays*, 122). The central theme of *Spanish Tragedy* is essentially revenge. An additional theme is language. We can see Hieronimos’ view of it in his speech. After Hieronimos, knight marshal of Spain, wrote a play within a play, through which the actual revenge takes place, he says, “Why so, now shall I see the fall of Babilon,/Wrought by the heavens in this confusion”.<sup>7</sup> In the play, each one of the actors must act his part in unknown languages, “sundry languages”, so that they cannot understand each other in confusion. His contrivance was to raise the same confusion that causes the fall of Babylon in the Bible. In the process, he tries to unfold what is true of his son’s, Horatio’s, death. Through a chain of revenges in the conflict between Spain and Portugal, Hieronimo passionately pursues what justice is, but he ironically committed himself to a series of revenges.

Seen from this context, the “towers” of “What the Thunder said” have layers of meaning. They can refer to all the followings: first, “Downe by the dale that flowes with purple gore,/a firie Tower, there sits a judge” (King of Spain), which Hieronimo saw in his madness (83). In the scene, he begins to distrust justice itself, and his tragic end is already announced. Secondly the towers which, when the Tower card in The Tarot pack is set at the wrong position for fortune telling, would be struck by lightning, and finally that of Babel: “Therefore is the name of it called Babel; because the Lord did there confound the language of all the earth: and from thence did the Lord scatter them abroad upon the face of all the earth” (Genesis, 11-9).

And another undertone for “down” resounds from the scene that Jsabella, Hieronimo’s wife, with a weapon, cuts down the Arbour standing in the garden where her son was killed: “Downe with these branches and these loathsome bowes,/Of this vnfortunate and fatall pine./Downe with them Jsabella, rent them vp,/And burne the roots from whence the rest sprung” (116). In the end Jsabella is urged by subversive drive to stab herself. Thus, in *The Spanish Tragedy*, we come to hear many-times rep-

etitions of the sound “down”. In any case, the two scenes here stress that all the established languages, social institutions and facilities, and conventional ideas fall down and dry up.

In Richard Strauss’s opera *Salome*, according to Kermode, John the Baptist sings out of the cistern in which he is imprisoned. Further, Kermode, associating the lines 367-77 with the Russian Revolution, supposes that Eliot might have had in mind a prophecy that one sign of the end would be the movement westward of eastern hordes (106). These matters Eliot draws in perspective, so that the landscape is at once contracted and magnified. Further, by his dazzling craftsmanship, many shadows are compressed into these scenes.

In this decayed hole among the mountains  
 In the faint moonlight, the grass is singing  
 Over the tumbled graves, about the chapel  
 There is the empty chapel, only the wind’s home.  
 It has no windows, and the door swings,  
 Dry bones can harm no one.  
 Only a cock stood on the rooftree  
 Co co rico co co rico  
 In a flash of lightning. Then a damp gust  
 Bringing rain

For one thing related to this bleak scene, Jessie Weston points out the close connection between the Perilous Chapel and Perilous Cemetery which is surrounded by the ghosts of knights slain in the forest and buried in unconsecrated ground (*From Ritual to Romance*, 178). In the Grail romances, journey to the Chapel Perilous, as Southam says, is an initiation ceremony. But in the empty chapel (“the draughty church” in *Burnt Norton*), there are no macabre furnishings of the mythical chapel, altar, candle, holy water, and also there doesn’t appear the Black Hand of the Devil to test the courage of the initiate, e.g. Perceval.

Forsaken “by horrors to deter the seeker” (Southam, 140), the empty chapel cannot threaten anybody who approaches it. It is what the line “Dry bones can harm no one” means. After all, the empty chapel is “only the wind home” and only husks without kernel. Behind the husk, there is no mystery, no hidden true content. This exactly corresponds with the awareness that the core of our subjectivity is a void filled in by appearances (Žižek, *PD*, 152). The Grail, once a living force, and

its romances are lost. About this scene, Brooker says, “Both good and evil, both comforting and terrifying presences have been swept away in favor of dry bones, history’s and myth’s only legacy” (186). This interpretation would be appropriate, but whether “the burial of the dead”, Brooker says, is complete, is unknown to me. It may still remain incomplete.

The lines “Only a cock stood on the roofree/Co co rico co co rico”, as have often been noted, can be traced to two sources. One is Peter’s denial of acquaintance with Christ in St. Matthew, 26: 75, “And Peter remembered the word of Jesus, which said unto him, Before the cock crow, thou shalt deny me thrice. And he went out, and wept bitterly”. Another is the scene that the ghost of Hamlet’s father disappears at the call of the cock as ‘trumpet of morn’ (Act 1, sc.1). In either story, cock’s crow signals dawn or the beginning of something: “In a flash of lightning. Then a damp gust/Bringing rain”. Thus, the first part of “What the Thunder Said” is closed with “the death” of modern Europe and the sign of restoration.

At the beginning of the second part, the eye of the narrator is directed to the oriental landscape “Ganga was sunken, and the limp leaves/Waited for rain, while the black clouds/gathered far distant, over Himavant”. Brooker says, “This new location, India, is also divided into distances and perspectives. The clouds are ‘far distant, over Himavant’, and the reader seems to be ‘placed’ in a position near the river in the silent jungle” (189). And the distance between the clouds and the narrator is equal to that between an authoritative moral voice and mankind.

Needless to say, Ganga is the Ganges, the sacred river of India, and Himavant is holy mountain in the Himalayas. The poem now moves outside of Western culture, to India and to the fable of the thunder god Prajapati (Brooker, 187). In *Brihadaranyaka Upanishad* 1.3.26 the following phrase can be seen:

Lead Us From the Unreal To the Real,  
Lead Us From Darkness To Light,  
Lead Us From Death to Immortality,  
Let There Be Peace Peace Peace.

The stream of this thought from the negative to the affirmative is no doubt reflected in the following passages.

Ganga was sunken, and the limp leaves

Waited for rain, while the black clouds  
 Gathered far distant, over Himavant.  
 The jungle crouched, humped in silence.  
 Then spoke the thunder  
 DA  
*Datta:* what have we given ?  
 My friend, blood shaking my heart  
 The awful daring of a moment's surrender  
 Which an age of prudence can never retract  
 By this, and this only, we have existed  
 Which is not to be found in our obituaries  
 Or in memories draped by the beneficent spider  
 Or under seals broken by the lean solicitor  
 In our empty rooms

For this part, Eliot, I think, would have chosen *the Brihad-Aranyaka Upanishad* from many *Upanishads* partly because it uses more psychological arguments and partly because it has something close to the Christian idea of “Trinity”.<sup>8</sup> A basic idea in the *Upanishad* is that this universe is a trinity and this is made of name, form, action(127). Those three are unified by *Atman* meaning the Spirit of life, that is, *Atman*, although one, is those three. According to Kermode's notes, “gods, demons, and men ask the Creator to speak to them; he replies ‘Da’ to each group, and each interprets it differently, using the three Sanskrit words employed in the following lines (402, 412, 419): ‘give’, ‘sympathize’, ‘control’”. These words are three disciplines for action, originally began with the pupils’ misunderstanding of their master. This style of thought may be reflected on the last part of “What the Thunder said”. The part is comprised of three items. We can see this in three-times repetitions of “DA” (the voice of the thunder), of “Shantih” (Peace), and of “falling down”. According to Juan Mascaró, the Sanskrit word *Upanishad*, *Upa-ni-shad*, would mean a sitting, an instruction, the sitting at the feet of a master. Mascaró says, “the whole Sermon on the Mount might be considered an *Upanishad*” (*The Upanishads*, 7). Therefore, with this in mind, we can also read this part.

“Ganga”, “the limp leaves” and “the jungle”, all these are just before dried up. Then “spoke the thunder”. But Brooker remarks, “The first and most important point about the thunder is that it does not say anything, and further, it does not mean anything” (189). Reeves goes further, “‘DA’ has

undergone much scrutiny, but the opposed responses it has inspired confirm the inscrutability” (90). In other words, “DA” is an empty signification. That is, it means that the transcendental irrepresentable Other, the God of Beyond in Judaism, no longer exists (Žižek, *On Belief*, 89). It is only by and for “The awful daring of a moment’s surrender” that we have existed, which an age of prudence never understands. Is this the moment of love or faith? Gish remarks that the account of a moment’s surrender is not specific. And Reeves here sees two opposed attitudes, straining at each other: diminution and intensification, enslavement and freedom, and damnation and redemption and says, “Hence ‘The awful daring of a moment’s surrender’ is inscrutably Janus-faced. ‘Awful’ is a word that looks both ways” (91). Our real life “is not to be found” anywhere, not even in our obituaries, in memories woven after death, in a will, of which seals are broken by the lean solicitor after the death of the owner.

DA

*Dayadhvam*: I have heard the key  
Turn in the door once and turn once only  
We think of the key, each in his prison  
Thinking of the key, each confirms a prison  
Only at nightfall, aethereal rumours  
Revive for a moment a broken Coriolanus

Da

*Damayata*: The boat responded  
Gaily, to the hand expert with sail and oar  
The sea was calm, your heart would have responded  
Gaily, when invited, beating obedient  
To controlling hands

About the image of key, Eliot’s note refers to Dante, *Inferno*, XXXIII. 46: “and below I heard the outlet of the horrible tower locked up: whereat I looked into the faces of my sons, without uttering a word”. The words are spoken by Count Ugolino, who, surrendering to starvation, devoured the corpses of his children when in captivity. This association with Ugolino evokes the existence of earlier figures in the poem: Marie surrendered to an irreversible descent in childhood and the hyacinth girl’s lover surrendered to a passionate consummation (Brooker, 191). “His prison” not only is the

doleful prison in which Ugolino was shut up but the metaphor of closed self. But a contradiction is manifested here: the more we want to liberate ourselves from the prison, the more we are trapped in it. Once we are enclosed in the self, we are doomed to go round in it. The purport is of a piece with Bradley's phrase, "my experience falls within my own circle, a circle closed on the outside". Hence, it is difficult for us to get out of it and to share true sympathy with others. What is worse, we are also inhibited to return to the primordial stage before the subject emerges through entering the symbolic order.

Moreover, as Eliot's note shows, the influence of Thomas Kyd's *The Spanish Tragedy* is again attested here. One key image of the drama is "prison" as the metaphor of our being excluded from the outer world and being enclosed in the body, as the opening of the tragedy shows: "When this eternall substance of my soule,/Did liue imprisoned in my wanton flesh:/ech in their function seruing others need,/I was a Courtier in the Spanish Court" (1). Simultaneously, our soul can be a prisoner not only in the body but in language, as we can see in the conversation between Bel-imperia and Balthazar: "Bal. Your prison then belike is your conceit/Bel. I by conceit my freedome is enthralled" (20). In the second half of the nineteenth century, it is generally said, there occurred the division between a literature essentially housed in language and one for which language has become a prison (Steiner, *After Babel*, 184-5). Hence we can regard that *The Spanish Tragedy*, for Eliot, is a story of incomplete metamorphoses, that of imperfect liberation from two yokes of revenge and language. Naturally, it follows that this scene with an allusion to the tragedy is characterized by Gish's "longing for some form of transformation" and it becomes part of a larger metamorphosis story. *The Waste Land* is the story of metamorphosis as is Bradley's *Appearance and Reality* (needless to say of Ovid's *Metamorphoses*), because both embrace the belief that any finite truth is self-transcendent. This is projected by the line "O Swallow Swallow".

The tragic effect of this scene is more heightened with the introduction of Coriolanus. In Eliot's mind, Coriolanus would be another Ugolino. They together were broken by the conspiracy due to a kind of misunderstanding. Their tragedies commonly have a leitmotif of the lack of communication. The story of Ugolino is based on a historical fact that in 1284, after the defeat of the Pisans by the Genoese at Meloria, Ugolino yielded certain castles to the Florentines and Lucchese. And the story tells that some people misconceived that Ugolino's main motive for the yield was treachery to Pisa. As the result of the (misconceived?) treachery, Ugolino and four of his sons and grandsons were imprisoned.

As for *Coriolanus*, though we cannot get any lesson from the drama, a leading thread is the matter

of words. Throughout *Coriolanus*, names are important: “Coriolanus?/He would not answer to; forbade all names;/He was a kind of nothing, titleless,/Till he had forged himself a name i’th’fire/Of burning Rome” (V.i.11).<sup>9</sup> But since his attempt to forge the name failed, Coriolanus remains nothing to the last. Of course, his war-oriented life as Mars, which is derived from ‘Martius’ of another name of Coriolanus, also comes to nothing. Paul Prescott gives this description of the question Shakespeare was deeply fascinated by: “the relationship between deed and word, reality and representation, identity and symbol, is acute in one of the most natural and universal of human activities: the giving of names” (Introduction, xl). *Coriolanus* is a quest for the question. Eliot also shows deep interest in it. Naming-objectifying, for him, is the first step to achieve a complete description of reality, though it may subject himself to Coriolanus’ ironical life.

Moreover, if politics, as Prescott argues, is impossible without language and if to dwell with others in a city requires a system of communication on which all can agree, misunderstanding gets Coriolanus into trouble, and rumors and ‘slippery turns’ help to deepen the misunderstanding and to transform friends into enemies (liii). Rumors really killed him, in other words, rumors killed his possibilities which might have been realized. But a broken Coriolanus, in turn, is revived for a moment with aethereal rumours. The theme is further transmitted to the next three lines, too: “The sea was calm, your heart would have responded/Gaily, when invited, bearing obedient/To controlling hands”. Gish says that the lines suggesting the management of a sailboat evoke a memory of what might have been in personal relationships, of other possibilities of human contact and love (99).

On the whole, Coriolanus is a displaced man not only because he is not to live well in the market of shifting value, of bartering, of shared transactions but because “he is fundamentally unhoused” (Prescot, liv), as we can see in the scene which the third serving man asked “Where dwell’st thou” and Coriolanus answered “Under the canopy” (IV. 5.39-40). Coriolanus is banished from Rome for which he fought, killed by the Volscians, enemy of Rome, and finally from the maternal: “Wife, mother, child, I know not” (V. 2.78). In short, he is a displaced man because he cannot be where he would have been. Ironically, Coriolanus destroys himself because he, for his mother’s entreaty, spared the revenge on his hateful Rome. The burning Rome Coriolanus really was not able to see, but instead we may see it on the right panel of the triptych of Bosch’s *The Garden of Earthly Delights*. After all, this scene turns out to reify both “the closing off of possibilities” and “the opening up of possibilities” which Moore poses as the fundamental features of his idea of “metaphysical finitude” (229). Anyhow Coriolanus also can be a failed substitute for the primal father.

And the question of incommensurability between us reappears in the final lines into which Hierony-

mo's "sundrye languages" effect prevails. Here the reader's smooth understanding falters, just as the principle of collage does. The "sundrye languages" effect amplifies each misunderstanding: "Each one of vs must act his parte,/In vnknowne languages,/That it may breede the more varietie" (114). A series of seemingly unrelated fragments acquires a new coherence. As, in *The Spanish Tragedy*, Hieronimo contrives that one part uses Latin and that other parts respectively use Greek, Italian, and French, so here are used Italian, French, Middle English, and Hindu. This, like the Surrealist principle, makes a confusion and serves the purposes of terror (Sontag, 271). This is a Babel-like confusion itself.

I sat upon the shore

Fishing, with the arid plain behind me

Shall I at least set my hands in order ?

London Bridge is falling down falling down falling

down

*Poi s'ascose nel foco che gli affina*

*Quando fiam ceu chelidon* — O swallow swallow

*Le Prince d'Aquitaine à la tour abolie*

These fragments I have shored against my ruins

Why then Ile fit you. Hieronymo's mad againe.

Datta. Dayadhvam. Damyata.

Shantih shantih shantih

The passage, beginning with "I sat upon the shore" and ending with "Shantih shantih shantih", as said above, is congested with several images, which makes a climactic ending. The line "I sat upon the shore/Fishing, with the arid plain behind me/Shall I at least set my hands in order ?", depends on the chapter on The Fisher King of Weston's *From Ritual to Romance*. The speaker can be the Fisher King. He vainly endeavors to restore the "significance of the fish as a divine life symbol, associated with Christ as well as more ancient deities connected with the origin and preservation of life" (Gish, 102). The chapter of *From Ritual to Romance* concludes that the Fisher King is the very heart and center of the whole mystery of the Grail legend. The Fish is a Divine Life symbol and at the same time of immemorial antiquity. In any case, Jessie Weston saw the Gospel narrative of the risen Christ in the legends of Adonis, Parcifal and Lancelot.

According to Reeves, the phrase "with the arid plain behind me" shifts grammatically from the ret-

respective to the prospective, from looking back to the fishing to looking forward to anticipation” (96). What we have here is the contrast between the futile present and the fertile past. And in the line, we can see what Eliot saw in Charles Whibley — “to fish up from the bottom of the past its forgotten and outmoded cranks and whimsies” (*Essays*, 503). The next image is an example for them. The nursery rhyme fragment — “London Bridge is falling down falling down falling down” — shows not only that London bridge is down but that the narrator sank so low that all means for his salvation were already short. Any attempt to describe a city, as Prescott points out, will always be a tale of many cities. So, Thebe, London, and burning Rome (only a product of Coriolanus’ imagination) are one. In any case, for the narrator, any turning point is needed.

Brooker’s comment is available here. Brooker argues, “Shore is thus a deliberate and striking repetition which makes a difference in the way the entire poem is read. As a noun, shore indicates the margin where land and sea meet, but as a verb, it denotes the effort to set things in order” (202). Moreover, Southam gropes for a couple sources of the image: the words of the prophet Isaiah to King Hezekiah “Thus saith the Lord, Set thine house in order: for thou shalt die; and not live (Isaiah xxxviii,1) and the words of Antigone toward Ismene who expresses her fears for Antigone’s life, “Don’t fear for me. Set your own life in order” (63). And the image of “shore”, I think, is deeply involved in the next allusion to Dante.

The line “*Poi s’ascose nel foco che gli affina*” (Then dived he back into that fire which refines them), we can know from Eliot’s own note, is derived from Dante, *Purgatorio*, XXVI.148. In the canto, Dante meets two poets, one of whom is Guido Guinicelli and another the Troubadour Arnaut Daniel who according to Guido passed all in verses of love and prose tales of romance. Their sin is hermaphrodite. But Eliot says, “in their suffering is hope because they wish to suffer (*Essays*, 256). They suffer more actively and more keenly. And the canto points to Dante’s sense of loss after Virgil has gone: “Dante, for that Virgil goeth away, weep not yet, weep not yet, for thou must weep for other sword.” (XXX). Eliot says of the scene, “These are high episodes, to which the reader initiated by the *Inferno* must first cling, until he reaches the shore of Lethe, and Matilda, and the first sight of Beatrice” (*Essays*, 256). In order to cross Lethe, we are once to “shore” or “to refine” ourselves: “God’s high decree would be broken, if Lethe were passed, and such viands were tasted, without some scot of penitence that may shed tears” (XXX, 142-5). At the time, Eliot selected more ordinary or materialistic words “I sat upon the shore/Fishing” than moralistic or religious one, “refine” or “repent”. Here an actual life and abstraction from actual life work together (*Essays*, 111).

The words “Why then Ile fit you, (say no more)” are spoken by Hieronimo when he was asked to

write a court entertainment. This double-edged agreement means both “I’ll give you what you want”, i.e. the parts they play, and “I’ll give you your due”, the dues they must give for their murder of Horatio. Moreover, we know the fact that Hieronimo was or tried to be a poet from his following words: “When I was yong I gaue my minde, /And plide my selfe to fruitless poetrie:/ Which though it profite the professor naught, /yet is it passing pleasing to the world” (109). In the mind of Eliot who recognized in *The Spanish Tragedy* more than the element of Seneca, the story of Philomela could be easily connected with the scene that Hieronimo bites off his own tongue when he, by the Spanish King, is forced to reveal the reason of his undeserved murders and who his confederate is (*Essays*, 82). In a sense, Hieronimo’s action was a result of the antinomy between what he can confide and what he should conceal. Therein Eliot sees the destiny of the poet who, sooner or later, cannot help facing “the inscrutable Reality” (*Appearance and Reality*, 488).

Eliot says in *The Metaphysical Poets*, “poets in our civilization, as it exists at present, must be *difficult*” (*Essays*, 289). The poet, Eliot continues, must become more and more comprehensive, more allusive, more indirect, in order to force, to dislocate if necessary, language into his meaning (289). For our language, unlike Aufidius’s expressive fit of defeated pride in *Coriolanus* (1.x), no longer articulates, or is relevant to, all major modes of action, thought, and sensibility. And this also indicates that if language is the form of life and the supreme act of community, the collapse of language is synchronous with that of community. Brooker says, “*The Waste Land* is, in a basic way, a lament for lost community” (210). Thus, the confusion the sundry languages produce is that of the twentieth-century world: “the world was filled with broken fragments of systems” (*Essays*, 138). Through such a phase, the poet encounters the impossible Real in which our symbolic universe, i.e., language, institutions, and laws, was shattered.

*The Waste Land* ends with three thunderous calls, “shantih shantih shantih”, which is a formal ending to an Upanishad. Eliot explained, “‘The peace which passeth understanding’ [Philippians 4: 7] is our equivalent to this word”. In addition, the repetition of the word reminds us of Menenius’ exclamation to all the people who thirst for Coriolanus’ blood: “Peace, peace, peace!” (III.1, 187). And I think that the words can be construed as a warning to the lunacy and barbarism of World War I. Further, the word ‘shantih’ means silence, just as we can see in the phrase “Words, after speech, reach/ Into the silence” (“Burnt Norton”). Reeves points out that the three ‘Shantih’s are an assuaging ritual of sound” (101). They, Reeves further grasps, yearn perhaps for what they do not possess, the meaning which is beyond them.

According to Taylor, poetry can be seen as an event, in the terminology of Badiou, encounter of the

Real. When the Real truly reveals, linguistic fluff is doomed to break. Then, what cannot be heard in the sound of thunder or in the fire, we can hear in the silence. That is, silence would open the new space for our experience and language: “We must be still and still moving/Into another intensity/For a further union, a deeper communion”. In the communion, the parent-child reunion, motif of Shakespeare’s last plays, also would be included. This already is the world of *Four Quartets*.

### Notes

1. George Steiner, *Language and Silence* (Faber and Faber, 1967), p. 200.
2. When *The Waste Land* was written, the idea of “the unreality of time” had already been presented by J.M.E. McTaggart on *Mind*, vol.17, 1908. In the article, McTaggart regards Bradley as one of the philosophers who deny the reality of time. Incidentally, though Eliot was much influenced by Bradley, we should not forget that he always sees Bradley through an analytical and mathematical lens of Bertrand Russell.
3. George Steiner, *After Babel: Aspects of language and translation* (Oxford University Press, 1992), p. 228.
4. A.W. Moore, *The Infinite* (Routledge, 2001), p. 183.
5. Matthew Arnold, *The Complete Poems*, ed. by Kenneth Allott (Longman, 1979), p. 204.
6. Alain Badiou, *Saint Paul: The Foundation of Universalism*, tr. by Ray Brassier (Stanford University Press, 2003), p. 63.
7. Thomas Kyd, *The Spanish Tragedy* (Kessinger Legacy Reprints, <http://www.kessinger.net9>, p. 115.
8. *The Upanishads*, tr. with an introduction by Juan Mascaró (Penguin Books, 1965), p. 127.
9. William Shakespeare, *Coriolanus* (Penguin Books, 2005), p. 112.

[Article]

# Non-Eulerian Inviscid Vortices

TAKAHASHI Koichi

**Abstract** : It is shown that taking the limit of vanishing viscosity in the Navier-Stokes equations is compatible with keeping the contribution from the shear stress term finite. All types of such non-Eulerian inviscid flow are found for the two-dimensional steady axisymmetric vortex.

**Keywords** : Navier-Stokes equations, non-Eulerian inviscid vortex

## 1. Introduction

The NS equations for incompressible flow are expressed as

$$\partial_i v + v \cdot \nabla v = \nu \nabla^2 v - \frac{\nabla \rho}{\rho} + f \quad (1.1)$$

with the obvious notations. The first term on the r.h.s. expresses the shear stress due to viscosity. The inviscid fluid is customarily supposed to be described by dropping this Laplacian term. The resultant first order differential equation is called the Euler equation and has been used to understand large scale meteorological phenomena in which the shear stress is negligible as compared to remaining terms in (1.1).

Another way to take the zero viscosity limit is to divide the both sides of (1.1) by  $\nu$  and then let  $\nu$  approach zero

$$\lim_{\nu \rightarrow 0} \frac{1}{\nu} \left( \partial_i v + v \cdot \nabla v + \frac{\nabla \rho}{\rho} - f \right) = \lim_{\nu \rightarrow 0} \nabla^2 v. \quad (1.2)$$

Here each component of the velocity field is assumed to be a function of  $\nu$ . If (1.2) leads to equations with non-trivial solutions, they will describe the inviscid flow that is controlled by the Laplacian term. We shall call such flows as the non-Eulerian inviscid flows (NEIFs).

(1.2) is the second order differential equation and is expected to lead to a new class of inviscid flow that the Euler equation does not cover. In this paper, one example of the NEIF is presented for a vortex motion of the incompressible fluid, which may be called non-Eulerian inviscid vortex (NEIV).

## 2. NS equations in cylindrical coordinate

For the later convenience, we here write down the NS equations in the cylindrical coordinate on the slowly rotating frame (rotation of the frame is not essential for our arguments) as

$$\partial_t v_r + v_r \partial_r v_r + \frac{v_\theta}{r} \partial_\theta v_r + v_z \partial_z v_r - \frac{v_\theta^2}{r} = \nu \left( \nabla^2 v_r - \frac{v_r}{r^2} - \frac{2}{r^2} \partial_\theta v_\theta \right) - \frac{1}{\rho} \partial_r p + f_r, \quad (2.1a)$$

$$\partial_t v_\theta + \frac{v_r}{r} \partial_r (r v_\theta) + \frac{v_\theta}{r} \partial_\theta v_\theta + v_z \partial_z v_\theta = \nu \left( \nabla^2 v_\theta - \frac{v_\theta}{r^2} + \frac{2}{r^2} \partial_\theta v_r \right) - \frac{1}{\rho r} \partial_\theta p + f_\theta, \quad (2.1b)$$

$$\partial_t v_z + v_r \partial_r v_z + \frac{v_\theta}{r} \partial_\theta v_z + v_z \partial_z v_z = \nu \nabla^2 v_z - \frac{1}{\rho} \partial_z p + f_z, \quad (2.1c)$$

$$f_r = 2\Omega_z v_\theta + \hat{f}_r, \quad f_\theta = -2\Omega_z v_r + \hat{f}_\theta, \quad f_z = \hat{f}_z. \quad (2.1d)$$

$\Omega = (0, 0, \Omega_z)$  is the angular frequency vector of the reference frame.  $\hat{f}$  with  $\hat{f}_\theta = 0$  is the external force other than the Coriolis force. The mass conservation is the another condition to be taken into account,

$$\partial_t \rho + \frac{1}{r} \partial_r (r \rho v_r) + \frac{1}{r} \partial_\theta (\rho v_\theta) + \partial_z (\rho v_z) = 0. \quad (2.2)$$

The system is in the Euclidian space with no boundary.

## 3. $\nu$ -expansion and zero viscosity limit in three dimension

Assume that the velocity field and the pressure are functions of  $\nu$  and are asymptotically expandable as series of  $\nu$  in the whole Euclidean space with no boundary :

$$X(r, t, \nu) = \sum_{n=0} \nu^n X_n(r, t), \quad r \in \mathbb{R}^3. \quad (3.1)$$

(If we consider the time-dependent flow and the regime where the acceleration valances the viscous force, the expansion in  $\nu^{1/2}$  will be more pertinent.) Note that, when the system is steady and has no  $\theta$ -dependence, the equations (2.1) and (2.2) remain invariant under the transformation  $\nu \rightarrow -\nu$ ,  $v_r \rightarrow -v_r$ ,  $v_\theta \rightarrow v_\theta$ ,  $v_z \rightarrow -v_z$ ,  $p \rightarrow p$ . In this case, therefore,  $v_r$  and  $v_z$  have odd powers of  $\nu$  in (3.1), while  $v_\theta$  and  $p$  have even powers.

Physically, it may be more appropriate to adopt, instead of  $\nu$ , such a dimensionless quantity as the inverse of the Reynolds number for the expansion. For the present purposes, the expression (3.1) suffices. We here do not ask an important mathematical question whether the expansion (3.1) always converges everywhere.

Inserting (3.1) to (2.1) and comparing the terms in both sides, we have equations for  $v_n(r, t)$ . We

here give the equations derived from  $\nu^0$ ,  $\nu^1$  and  $\nu^2$  terms.

(i).  $O(\nu^0)$  equations

These give nothing but the Euler equation :

$$\partial_t \mathbf{v}_0 + \mathbf{v}_0 \cdot \nabla \mathbf{v}_0 + \frac{\nabla p_0}{\rho} - \mathbf{f} = 0, \quad (3.2a)$$

$$\partial_t \rho + \nabla(\rho \mathbf{v}_0) = 0. \quad (3.2b)$$

We are interested in a field configuration for an incompressible and inviscid fluid that is static and rotationally invariant about the  $z$ -axis for all of  $\mathbf{v}_n$ . This means that the derivative terms with respect to  $t$  and  $\theta$  are dropped. Furthermore, the velocity field is supposed to have the  $\theta$  component only in the inviscid limit, i.e.,  $\mathbf{v}_0 = (0, v_{\theta 0}, 0)$  where  $v_{\theta 0}$  is a function of  $r$  only. In this case, we have noted that  $v_{rn}$  and  $v_{zn}$  are nonzero for odd  $n$ , and  $v_{\theta n}$  are nonzero for even  $n$ . These conditions reduce (3.2a) to

$$-\frac{v_{\theta 0}^2}{r} + \frac{1}{\rho} \partial_r p_0 - 2\Omega_z v_{\theta 0} - \hat{f}_r = 0, \quad (3.2c)$$

$$\frac{1}{\rho} \partial_z p_0 - \hat{f}_z = 0. \quad (3.2d)$$

The mass conservation (3.2b) yields a trivial equation  $0 = 0$ .  $O(\nu^1)$  and  $O(\nu^2)$  equations are similarly derived.

(ii)  $O(\nu^1)$  equations

$$\frac{v_{r1}}{r} \partial_r (r v_{\theta 0}) = \nabla^2 v_{\theta 0} - \frac{v_{\theta 0}}{r^2} - 2\Omega_z v_{r1}, \quad (3.3a)$$

$$\frac{1}{r} \partial_r (r \rho v_{r1}) + \partial_z (\rho v_{z1}) = 0. \quad (3.3b)$$

(iii)  $O(\nu^2)$  equations

$$v_{r1} \partial_r v_{r1} - 2 \frac{v_{\theta 0} v_{\theta 2}}{r} + \frac{\partial_r p_2}{\rho} = \nabla^2 v_{r1} - \frac{v_{r1}}{r^2} + 2\Omega_z v_{\theta 2}, \quad (3.4a)$$

$$v_{r1} \partial_r v_{z1} + v_{z1} \partial_z v_{z1} + \frac{\partial_z p_2}{\rho} = \nabla^2 v_{z1}. \quad (3.4b)$$

There are six equations for unknown six functions. The dynamics implied by (1.2) requires that  $\mathbf{v}_0$  and  $\mathbf{v}_1$  should make a balance. (3.4a) is used to determine  $v_{\theta 2}$  from  $v_{\theta 0}$ ,  $v_{r1}$ ,  $v_{z1}$  and  $p_2$ . Therefore, the equations relevant for forming NEIF are (3.2c), (3.2d), (3.3a), (3.3b) and (3.4b).

Let us seek solutions in which  $v_{rn}$  and  $v_{\theta n}$  do not depend on  $z$ . Then, from (3.4a),  $p_2$  must be a sum of a function of  $r$  and a function of  $z$ . On the other hand, (3.4b) implies that the  $z$ -dependent part of  $p_2$ , if any, is also a function of  $r$ . The simplest way to reconcile these situations will be to assume that  $\partial_z p_2$  is a constant multiplied by a  $z$ -dependent factor common to the remaining terms in (3.4b),

$$\frac{\partial_z p_2}{\rho} = -h(z), \tag{3.5}$$

where  $h(z)$  is a function of  $z$  to be determined later. In the inviscid limit,  $v_{r1}$  and  $v_{z1}$  become irrelevant and the flow is described only by  $v_{\theta 0}$ .

#### 4. Vortex solution

Now, the equations (3.2c), (3.2d), (3.3a), (3.3b) and (3.4b) are viewed to form themselves in three groups. (3.2c) and (3.2d) are used to determine the  $r$  and  $z$  dependences of  $p$ , respectively, when  $v_{\theta 0}$  is known. (3.3a) is utilized to solve for  $v_{\theta 0}$  when  $v_{r1}$  and  $v_{z1}$  are known. (3.3b) and (3.4b) can be used to determine  $v_{r1}$  and  $v_{z1}$ .

Consider first (3.3a), which is rewritten as

$$v_{\theta 0}'' + \left(\frac{1}{r} - v_{r1}\right)v_{\theta 0}' - \left(\frac{1}{r^2} + \frac{v_{r1}}{r}\right)v_{\theta 0} = 2\Omega_z v_{r1}. \tag{4.1}$$

The prime denotes the derivative with respect to  $r$ . It is notable that, even in the absence of boundary, the inviscid flow  $v_{\theta 0}$  is affected from the viscous component  $v_{r1}$ . The two independent solutions for the homogeneous equation for  $v_{\theta 0}$  are  $1/r$  and  $r^{-1} \int_0^r dr e^{\int_0^r dr' v_{r1}(r')}$ . The particular solution is  $-\Omega_z r$  that expresses the inertial ‘motion’ of the fluid at rest relative to the rotating frame. The general regular solution is given by

$$v_{\theta 0} = \frac{c}{r} \int_0^r dr e^{\int_0^r dr' v_{r1}(r')} - \Omega_z r. \tag{4.2}$$

In order for  $v_{\theta 0}$  given by (4.2) to be finite at infinity,  $v_{r1}(\infty)$  must be negative. The second term on the r.h.s. of (4.2) is not essential for our arguments and is disregarded hereafter.

Next consider (3.3b) and (3.4b). Since  $v_{\theta 0}$  is assumed to be a function of  $r$  only,  $v_{r1}$  and  $\partial_z v_{z1}$  are functions of  $r$  only. The flow is necessarily of the three dimensions. The continuity (3.3b) suggests that

$$v_{z1} = -\frac{z}{r}(rv_{r1})'. \tag{4.3}$$

Thus,  $h(z)$  in (3.5) is proportional to  $z$ , i.e.,  $h(z) = c_2 z$ . Substituting (4.3) into (3.4b), together with (3.5), yields

$$\frac{1}{r} \left( r \left( \frac{(rv_{r1})'}{r} \right)' \right)' - v_{r1} \left( \frac{(rv_{r1})'}{r} \right)' + \left( \frac{(rv_{r1})'}{r} \right)^2 = c_2. \tag{4.4}$$

Near  $r \sim 0$ , the solutions of (4.4) for  $c_2 \neq 0$  behave as  $v_{r1} \propto r$ . Thus far two solutions are known

$$v_{r1,B} = -kr, \quad (4.5a)$$

$$v_{r1,S} = -kr + 6(1 - \exp(-kr^2/2))/r. \quad (4.5b)$$

The former and the latter are the Burgers vortex (Burgers 1948) and the Sullivan vortex (Sullivan 1984), respectively.

An insight into the possible global behaviours of the solution of (4.4) is gained by rewriting it in terms of a new variable  $x$  such that

$$x = -\frac{v_{z1}}{z} = \frac{(rv_{r1})'}{r}, \quad (4.6a)$$

or

$$v_{r1} = \frac{1}{r} \int_0^r x r dr \quad (4.6b)$$

as

$$x'' = -x^2 + c_2 + \left(v_{r1} - \frac{1}{r}\right)x'. \quad (4.7)$$

If we reinterpret  $r$  as the ‘time’ variable and  $x$  as the ‘coordinate’ of a point particle, then this equation expresses the classical one-dimensional motion of the particle with a unit mass in the potential  $U(x) = x^3/3 - c_2x$  under the effect of some non-conservative force given by the last term on the r.h.s. of (4.7). An example of the form of the potential  $U$  is depicted in Fig. 1 for  $c_2=1$ .

Multiply the both sides of (4.7) by  $x'$  and rewrite the resultant equation to obtain

$$\frac{d}{dr} \left( \frac{1}{2} x'^2 + U(x) \right) = \left( v_{r1} - \frac{1}{r} \right) x'^2. \quad (4.8)$$

This equation means that the temporal variation rate of the particle’s ‘total energy’ is governed by the non-conservative force involved on l.h.s. If the l.h.s. of (4.6) is zero, then the energy is conserved. This is achieved by resting the particle at the one of the extrema of the potential. Discarding the positive value by the reason already mentioned, the acceptable solution is

$$x = -1 \text{ or } v_{r1} = -\frac{r}{2}. \quad (4.9)$$

This is shown as the point A in Fig. 1, which is nothing but the Burgers vortex solution with  $k=1/2$  with the ‘energy’ equal to  $2/3$ . We require any physical solution to asymptotically approach the point A.

The particle at rest generally begins to roll down the potential slope. The behaviour of  $x(r)$  and the corresponding increase of the speed of the real flow near  $r = 0$  will be written as

$$x(r) \approx x(0) + a_2 r^2, \quad (4.10a)$$

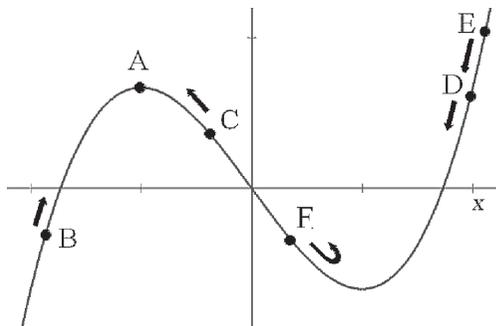


Fig. 1 Potential  $U = x^3/3 - c_2x$  with  $c_2=1$ . The maximum and minimum points are  $x=-1$  and  $1$ , respectively. This graph shows why  $c_2 > 0$  is necessary for physical solutions to exist. For alphabetical letters and arrows, see the text.

$$v_{r1}(r) \approx \frac{x(0)}{2}r + \frac{a_2}{4}r^3, \tag{4.10b}$$

where  $x(0)$  and  $a_2$  are given by the initial conditions. The particle loses the initial energy due to the dissipative term  $-x^2/r$ . Even in the case  $v_{r1}$  temporarily acquires positive values, on approaching the point A, the functional form of  $v_{r1}$  should approach  $-r/2$ , thereby the non-conservative force eventually turns totally dissipative. By appropriately choosing the initial position, the particle will approach A at  $r = \infty$ . One of such motions corresponds to the Sullivan’s vortex, for which  $x_{\text{Sullivan}}(0) = 2$  and  $a_2 = -3/2$ , and is designated by D in Fig. 1. Its initial energy is  $2/3$ , being equal to the final state’s energy.

When the particle’s initial position is B in Fig. 1, then it can climb up the slope if the acceleration  $x''(0)$  has a positive sign at B. By appropriately choosing the acceleration at B, the particle can be in the stationary state A at  $r = \infty$ . The similar thing holds for C, E and F : if the particle has an appropriate negative acceleration at these points, then it can climb up the slope and get stationary at A.

Interestingly, the particle at the initial point C or F can have a positive initial acceleration, i.e.,  $x''(0) > 0$ , to reach the point A. It moves down and then up the slope beyond the minimum, stops at a certain point, turns the direction of motion and climbs down and then up toward the point A.

These peculiar characteristics of the points C and F are due to the existence of  $v_{r1}$  in the non-conservative force of our fictitious classical dynamics.

$v_{r1}$  is easily determined by directly solving (4.4).  $r = 0$  is a singularity of (4.4), so that the numerical integrations were started from  $r_0$  near  $r = 0$ . We set  $r_0 = 0.02$ . The results are shown in Fig. 2 for the six types of initial conditions mentioned above. Since  $c_2$  in (4.4) is fixed to unity, all solutions asymptotically approach  $\sim r/2$ . The profiles labeled A, B and C are almost indistinguishable each

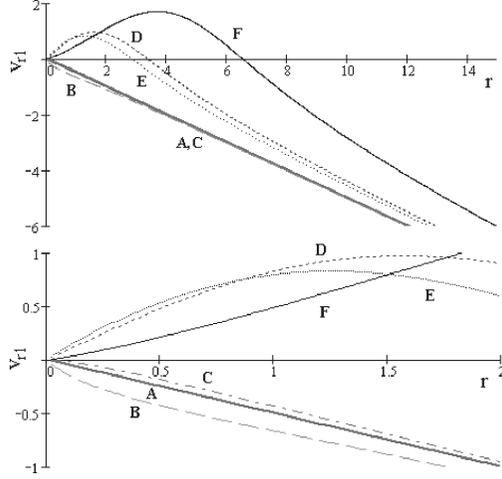


Fig. 2 Six types of the  $r$ -dependence of  $v_{z1}$ . The characters A~F correspond to those in Fig. 1. The initial conditions are A (thick solid curve) :  $x(r_0)=-1$ ,  $x'(r_0) = 0$  ; B (long-dashed curve) :  $x(r_0)=-2$ ,  $x'(r_0) = 14.339$  ; C (dash-dotted curve) :  $x(r_0)=-0.5$ ,  $x'(r_0) = -6.901$  ; D (short-dashed curve) :  $x(r_0)=2$ ,  $x'(r_0) = 0$  ; E (dotted curve) :  $x(r_0)=3$ ,  $x'(r_0) = -13.008$  ; F (thin solid curve) :  $x(r_0) = 0.4$ ,  $x'(r_0) = 7.723$ .  $r_0$  is taken to be 0.02. The enlarged one in  $0 < r < 2$  is shown in lower panel.

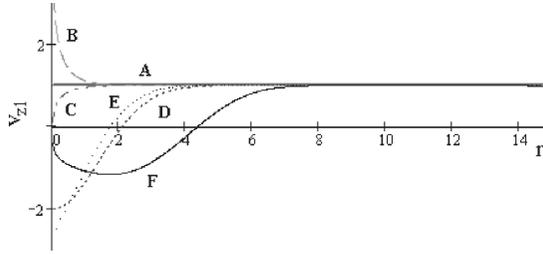


Fig. 3  $v_{z1}$  at  $z = 1$ . The line types and the meanings of the characters A~F are same as in Fig. 2.

other in large scales and exhibit inward flows in all space. Those labeled D, E and F exhibit the so called two-cell structure : the direction of the flow is outward near the symmetry axis and inward in outer region.

$v_{z1}$  is determined from (4.3). The six profiles corresponding to those in Fig. 2 are shown in Fig. 3. For all of the flows,  $v_{z1}(\infty) = 1$ . This figure shows that the flows A, B and C are upward. In the Burgers vortex A,  $\partial_r v_{z1} \equiv 0$ . On the other hand, on approaching the symmetry axis,  $v_{z1}$  looks to increase (decrease) for the flow B (C).  $v_{z1}$  changes the sign at some radius for the flows D, E and F, so that their two-cell structures are obvious.

$v_{\theta 0}$  determined by (4.2) with  $\Omega_z = 0$  are shown in Fig. 4 for the flows A, C, D, E and F. Far away from the maximum point,  $v_{\theta 0}$  decreases as  $1/r$ . Near the symmetry axis,  $v_{\theta 0}$  is proportional to  $r$  for

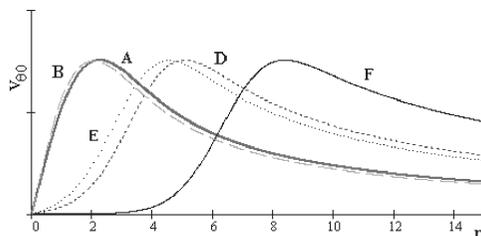


Fig. 4  $v_{\theta 0}$ . The line types and the characters A~F are of the same meanings as in Fig. 2. The normalization is arbitrary. The profile C almost coincides with A and is not shown here.

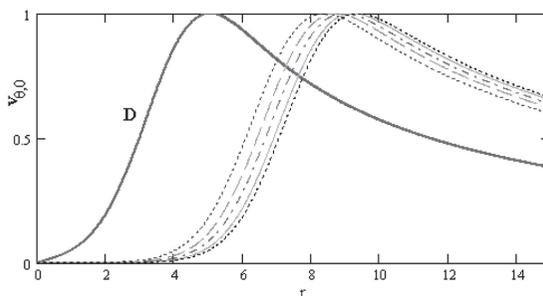


Fig. 5  $r_0$  dependences of  $v_{\theta 0}$  for the numerical solution of the eye-type. Left-most dotted curve :  $r_0=0.02$ , long-dashed curve : 0.01, dash-dotted curve : 0.005, thin solid curve : 0.002, right-most dotted curve : 0.001. The one marked by 'D' is the Sullivan solution. The numerical solution of eye-type shifts rightward for  $r_0 \rightarrow 0$ . All are normalized to one.

all these flows because  $x(r_0) \neq 0$ . However, the rates of the subsequent rise are different :  $\partial v_{\theta 0}$  increases relatively very rapidly in F. In this flow,  $v_{\theta 0}$  diminishes more rapidly than  $r^l$  (probably than any power of  $r$  in the limit  $r_0 \rightarrow 0$ ) near  $r = 0$ , thereby forming a clear eye and eye-wall.

By taking the limit  $r_0 \rightarrow 0$  numerically, we observe (but not shown here) that the solutions B and C approach A rapidly. Therefore, the solutions B~F and C are expected to converge to A, i.e., the Burgers solution. In the same limit, the solution E approaches D slowly. The flow E is anticipated to converge to D, the Sullivan solution. The two-cell structured solution F also seems to have  $r_0 \rightarrow 0$  limit, as is depicted in Fig. 5 for  $v_{\theta 0}$ . However, the direction of the convergence is such that the solution gets far apart from D, the Sullivan solution. Thus we conclude that the type F is the new solution.

The orbit C of the fictitious particle started from a point  $x(r_0)$  such that  $-1 < x(r_0) < 1$  with a negative acceleration. Importantly, if it were given an appropriately adjusted positive acceleration, the particle first moved down the slope in Fig. 1, then changed the direction and went up until it reached A. This orbit looks like that of F but is distinct since the initial position is different.

Similarly, the particle started from the point F with an appropriately tuned negative acceleration can

reach A at  $r = \infty$ . In the limit  $\eta_0 \rightarrow 0$ , such an orbit seems to coincide with the orbit A, the Burgers solution.

Thus we are left with three types of flows : the Burgers vortex, A, the Sullivan vortex, D, and, so as to say, the eye-type vortex, F. These are characterized by the value of  $x(0) = (rv_{r1})'/r|_{r=0}$  :  $x_A(0) = -1$ ,  $x_D(0) = 2$  and  $-1 < x_F(0) < 1$ , where the subscript specifies the flow-type. Probably, solutions with any other initial position will converge on one of these three types in the limit  $\eta_0 \rightarrow 0$ .

The radial direction of the flow of the eye-type vortices changes near the middle point of the eye-wall. In the outer and inner regions, the flow directs inward and outward, respectively. The vertical direction of the flow also changes from downward to upward with  $r$  at the inner foot of the eye-wall.

## 5. Summary and comments

We presented one example of the NEIV for a new two-dimensional vortex as the solution of the Navier-Stokes equation. The configuration of the velocity field is governed not only by the advection and the pressure gradient but also by the shear term that is absent in the Euler equation.

The velocity field is assumed to be expanded as an asymptotic series of  $\nu$ . Then, matching the coefficients of the same power of  $\nu$ , a set of differential equations for the expansion coefficients were derived. It is interesting that the 0th- and 1st-order coefficients form a closed set of equations when the zero-viscosity limit of the field leaves only the azimuthal component finite. Before the zero viscosity limit is taken, the flow is of a three dimensional and the singularity observed in the two dimensional flow is avoided (Takahashi 2013).

In the zero-viscosity limit, the radial and vertical components of the flow vanish. However, the first order coefficient of the radial and vertical components remains finite. In particular, the radial component is directly related to the profile of the final azimuthal component. Such a ‘Cheshire cat’ effect is possible in case the flow is of the multicomponent.

In gaining the perspective on the nature of the solutions, it was helpful to translate the fluid dynamical equation to the equation of motion of a point particle in a potential deduced from the NS equations and the continuity equation. This method will enjoy finding wide application for solving the NS equations.

In the new solution, the azimuthal flow is structured by an inner eye, an eye-wall and a decaying tail in outer region, which are reminiscent to those of typhoon. The scaling arguments indicate that smaller  $\nu$  corresponds to larger Reynolds number. Probably, taking the inviscid limit is a mathemati-

cally idealized procedure adaptable for describing the typhoon's growth and strengthening.

The  $\nu$ -expansion method may in principle be applicable for small but finite  $\nu$  (see, e.g., Sammartino and Caflisch 1998). In that case,  $\nu v_{r1}$  and  $\nu v_{z1}$  are the approximations of the radial and the vertical component of the flow that enable us to approximately reconstruct the three-dimensional flow. Whether the asymptotic expansion in  $\nu$  always converges remains as an open question.

### References

- Burgers J M 1948 A mathematical model illustrating the theory of turbulence *Adv. Appl. Mech.* **1** 171.
- Sammartino M and Caflisch R E 1998 Zero viscosity limit for analytic solutions of the Navier-Stokes equation on a half-space. II. Construction of the Navier-Stokes solution *Commun. Math. Phys.* **192** 463.
- Sullivan R D 1959 A two-cell vortex solution of the Navier-Stokes equations *J. Aerosp. Sci.* **26** 767.
- Takahashi K 2013 Vorticity equation, current conservation and the solution of the Navier-Stokes equation *Fac. Lib. Arts Rev. (Tohoku Gakuin Univ.)* **164** 65, [www.tohoku-gakuin.ac.jp/research/journal/bk2013/no01.htm](http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/research/journal/bk2013/no01.htm)

# 科学的文章の推敲・校正を支援する 教育システムの構築

松 本 章 代

## 1. はじめに

著者が所属する情報科学科では、1年次の必修科目「初年次教育」において日本語の「科学的文章」の書き方を学生に指導している。ここでいう「科学的文章」とは、科学的な事柄についての文章を意味するのではなく、「伝えるべき事柄を正しくわかりやすく読み手に伝える文章」のことである。このような文章を書く力は、理系の学生のみならず、すべての大学生にとって身に付けるべき能力である。

文章作成指導のもっとも有効な手段は、担当教員によるきめ細かい添削指導であると考えられる。しかしながら、大人数を対象とした授業において添削指導を行うとなると、教員の労力は膨大なものとなる。しかも、添削指導の際には、一度読み直せば気が付きそうな不注意によるミスや、ルールを知ってさえいれば防げる誤りが多く目につく。添削する立場としては、せめてこのようなミスは無い状態で提出してほしいと願うが、自分自身が書いた文章を客観的に見直すことは難しく不備・不具合に気が付きにくいものである。ルールを守った文章が書けるようになるのにも、完全に身に付くまである程度トレーニングが必要である。また、学生の多くは他人に読んでもらうための文章を書くという意識が希薄である、ということも問題の一因である。

そこで「自分自身が書いた文章を客観的に見直す手助けをする」「科学的文章のルールを身に付けさせる」ための機能を有し、「推敲・校正の必要性を理解させ、他者に提出する文章は十分に吟味する癖をつけること」を目的とした、教育システム「TWSS (Technical Writing Support System)」を数年前から構築している。さらに平成22年度からは、これを実際の授業で運用している。本稿では、実装したシステムの機能とその授業実践について報告する。まず2章で関連研究について述べ、3章で実装したシステムの概要を説明する。4章で「初年次教育」における取り組みについて紹介し、5章で成果をまとめる。

## 2. 関連研究

文章を自動添削し、評価をユーザにフィードバックする教育システムとしては、米国ETSが開発した「E-rater [1]」、石岡ら [2] による日本語小論文自動評価採点システム「Jess [3]」、日本語作文小論文検定協会による日本語の文章解析ソフト「森リン [4]」など、これまでも多数のソフトが開発されている。これら従来の文章添削システムは、文法の正しさ、語彙の豊富さ、文の長さ、漢字の量といった、表面的な指摘を行うものが主流である。これらは主に中高生の作文・小論文を対象としており、高等教育機関における科学技術論文の執筆指導を目的としたものではない。

一方、研究レベルでは技術文書を対象とした推敲支援ツールがいくつか開発されている。菅沼ら [5] は、マニュアルの執筆を想定し、読み手に誤解される文の検出を行っている。本システムが機械学習を用いて「わかりにくい文」を統計的に判断する [6] のに対し、菅沼らはヒューリスティックな理論に基づき判断を行う仕組みを提案している。また、稲積ら [7] は大学生の日本語文章力の育成を目的として、校正推敲支援や文章構造理解支援など5種類の支援ツールを開発している。これらのツールに備わっている、技術文書を書く上で順守すべきルールを指摘できる機能や、長文について係り受けの確認と修正を支援する機能は、我々が構築しているシステムの一部と類似している。ただし、本システムは品詞や主語・述語を色・形によって区別し、文章をより視覚的に意識させることができる。また、論理性の支援においては、稲積らのシステムがパラグラフライティングの観点から行われるのに対し、本システムは接続詞や接続助詞の見直しに重点を置いている。

## 3. システム構成

### 3.1 システム概要

TWSSは、「校正」を支援する「科学的文章のルールチェック機能」と、簡潔性・一義性の観点から「推敲」を支援する「わかりにくい文の指摘・可視化機能」、論理性の観点から「推敲」を支援する「全体の流れの可視化機能」の3つの機能から構成される。

なお、本システムは、ウェブアプリケーションである。インターネットにつながっていてウェブが閲覧できる環境なら、OSやブラウザに依存することなく利用可能である。ソフトウェアのインストールは（プラグインなども含め）一切不要である。

### 3.2 入力から出力までの流れ

TWSS を利用する際の流れは次のとおりである。システム画面を図 1 に示す。左側のテキストボックスは入力用、右側のテキストボックスは結果出力用となっている。

#### ① 科学的文章のルールチェック機能

- (1) 左のテキストボックスに文章を入力する。
- (2) 「基本ルールチェック」ボタンを押す。
- (3) 科学的文章を書くうえで順守すべきルールの違反チェックおよび意図が伝わりにくい文の検出が行われ、右のテキストボックスに結果が出力される。
  - ルール違反は該当する語が赤・橙字で表示される。(4) へ。
  - 意図が伝わりにくいと判定された文には「この文を可視化」ボタンが出現する。  
② へ。
- (4) 赤・橙字にカーソルを合わせると指摘内容がポップアップ表示される。赤字は要修正・橙字は要確認という意味である。
- (5) 左のテキストボックス内の入力文章を修正したら再び (2) へ。

#### ② わかりにくい文の指摘・可視化機能

- (1) 「この文を可視化」ボタンを押す。
- (2) 新しいタブが開き、その文を可視化した図および「意図が伝わりにくい」と判定された理由<sup>1</sup>が表示される。
- (3) 左のテキストボックス内の入力文章を修正したら再び (1) へ。

#### ③ 全体の流れの可視化機能

- (1) 「文書全体を可視化」ボタンを押す。
- (2) 新しいタブが開き、入力文書全体の流れを可視化した図が表示される。
- (3) 左のテキストボックス内の入力文章を修正したら再び (1) へ。

なお、①②③の順番で作業を進めなければならないわけではない。たとえばテキストボックスに文章を入力した後、「基本ルールチェック」ボタンを押さずに③に進むこともできるし、①で指摘された問題点が未解決の状態で②に進むことも可能である。

---

<sup>1</sup> 「主語と述語の距離が離れています。」「修飾句・節が多すぎます。」など。

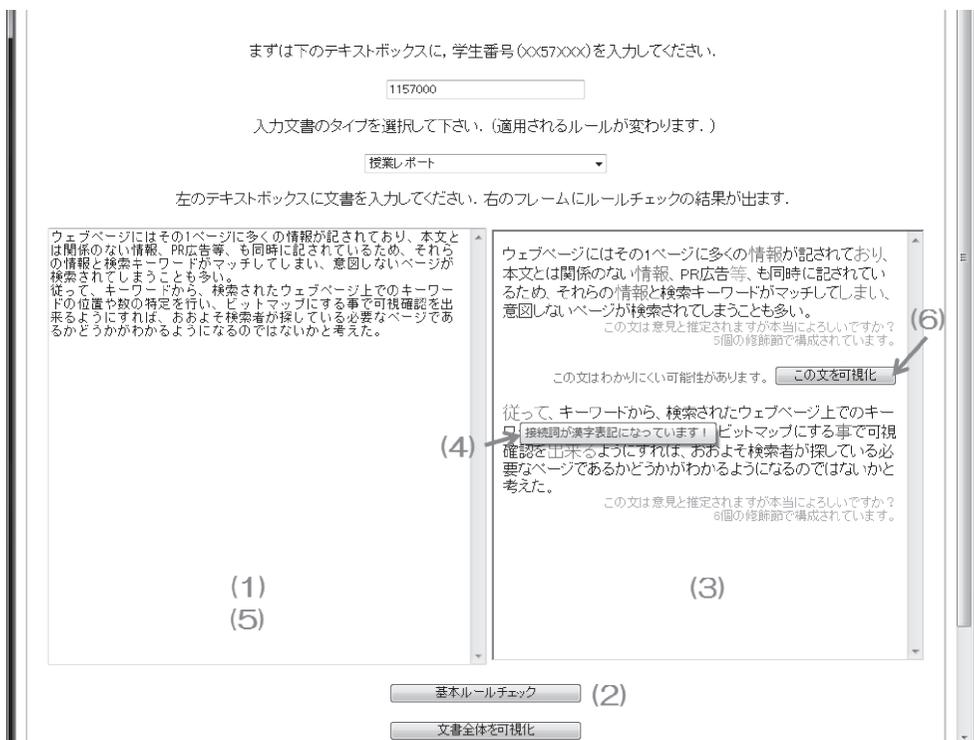


図 1. システム画面

### 3.3 3つの機能

#### ① 科学的文章のルールチェック機能

科学的文章には書き方のルールがある [8]。ただし、文書のタイプによって、そのルールは若干異なる。そこで TWSS では、文書のタイプに応じて、ルールに沿って書かれているかどうかをチェックする。そのため利用者は、あらかじめ「授業レポート」「科学技術論文」「その他（就職活動用エントリーシートなど）」から文書のタイプを選択しておく。チェックされるルールの種類は「科学技術論文」がもっとも多く（つまりチェックが厳しい）、「その他」はもっとも少ない。本システムでは文献 [8] [9] [10] を参考とし、様々なルールを採用している。チェックされる主なルール違反について「付録. チェック項目一覧」に示す。

続いて、わかりにくい文の判定について述べる。判定基準については、文を構成する単語数や主語の位置など、各文を形態素解析・構文解析した結果の情報に基づき、機械学習によって判別式を作成している。

## ② わかりにくい文の指摘・可視化機能

「わかりにくい」と判定された文は、図2のように文単位で可視化される。矢印はエッジといい、修飾—被修飾関係を表す。格助詞（「が」「を」「に」「で」など）・係（副）助詞（「は」など）によって動詞を修飾する関係は、特に重要とみなし、エッジを目立つ赤色にしている。また、接続助詞は論理的关系を決定づけるため、注目しやすいよう黄色にしている。なお、四角で囲まれた語は、主語と述語である。

この図から利用者が読み取るべきことと行うべき作業について、次に述べる。

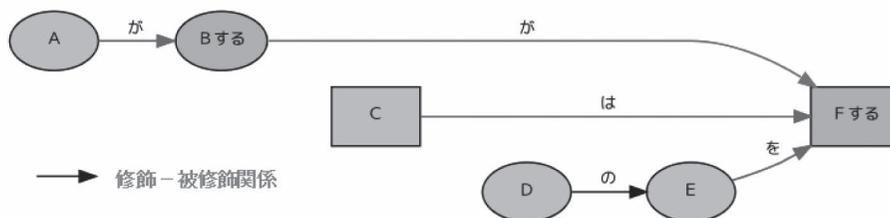


図2. 文の可視化

### (1) 語間の修飾—被修飾関係とその距離

利用者は、可視化された図を見て、語間の関係が正しいか（本システムの解釈と利用者の意図とが同じになっているか）否かを確認する。システムに誤った解釈をされるようであれば、複数の意味に解釈できる文になってしまっている可能性が高い。そのような場合は、利用者の意図と一致するよう書き変えるべきである。

また、長いエッジのある文章、すなわち長い修飾節を間に挟んだ文章は「逆茂木型 [11]」と呼ばれ、読みにくい文の典型として知られている。文節を入れ替えて短いエッジにできないかどうか、あるいは文を切るといった対応を検討すべきである。

図3は「金色の雨が五月の明るい太陽の下で輝く若葉に降りそそぐ。」（出典：文献 [9]）を本システムにより可視化した図である。しかしながらこの図の係り受け関係は誤っている。これは利用者の意図どおりに構文解析が行われなかったことを意味する。もしもこの文が意図どおりに解釈された場合（図4）は、「雨」と「降りそそぐ」が非常に長いエッジで結ばれることになる。そこで文を「五月の明るい太陽の下で輝く若葉に金色の雨が降りそそぐ。」と修正すると、エッジの長さが総合的に短くなる（図5）。

### (2) 一文を構成する句・節の数

1文を構成する句・節の数が多いほど文の構成は複雑になり、わかりにくさの要因となる。しかし、普段文章を書くときには句や節を意識することはなく、判断が難しい。そこで、こ

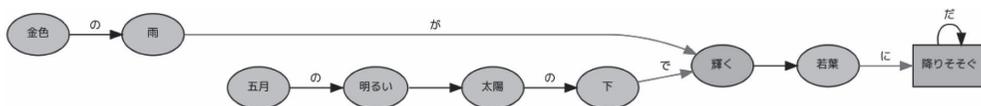


図 3. 「金色の雨が五月の明るい太陽の下で輝く若葉に降りそそいだ」を可視化

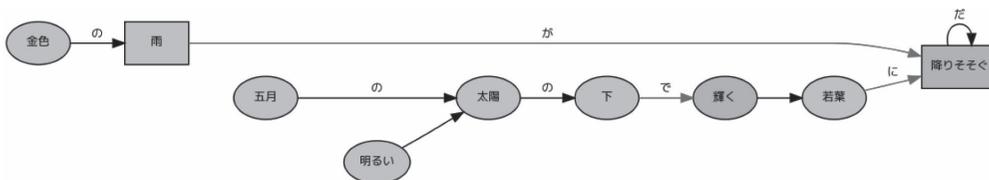


図 4. 図 3 が正しく解釈された場合

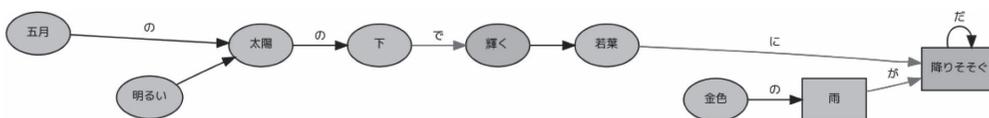


図 5. 「五月の明るい太陽の下で輝く若葉に金色の雨が降りそそいだ」を可視化

の図では動詞を水色で表現している。大雑把に言って、句や節の多い文章は文中の動詞が多い。利用者は、水色の語が多いと感じた場合には文を分割する。

### (3) 主語と述語の関係

文章を書くうえで、主語と述語の関係を意識することは非常に重要である。そこで、利用者は以下の 4 点についてチェックを行い、必要に応じて文章を修正する。

- 主語があるか
 

日本語は主語を省略することができる。しかし、主語の省略は文章をわかりにくくする要因になる。特に、直前の文と主語が変わる場合には、主語は省略しない方がよい。
- 主語に対し述語の表現は適切か
 

主語と述語がねじれていないか確認する。
- 主語や述語は意図した語が選ばれ関係づけられているか
 

意図どおりでなければ、(1)と同様に、図が正しくなるように文章の構成を修正する。
- 主語と述語の距離が離れすぎていないか
 

離れすぎている場合は、(1)と同様に、エッジが短くなるように修正する。

③ 全体の流れの可視化機能

文書の論理性が損なわれる要因には

- 述べる順序が不自然
- 接続詞の省略
- 文の欠落（論理の飛躍）
- 接続詞の不適切な使用

などがあげられる。

本システムでは、「余計な修飾表現は無い方が、話の流れに集中し易く、文と文の関係を見直す作業の支援につながる」という我々の仮説に基づき、文書全体のあらすじを可視化することにより、論理展開のチェックを支援する。

文書全体を可視化した例を図6に示す。利用者は、システムに表示された図を見て、筋がとおっているかどうかの確認を行う。特に、黄色で示された接続詞・接続助詞に着目する。論理の飛躍はないか、文の順序は適切か、接続詞の不足はないか、に注意しながらチェックしていく。

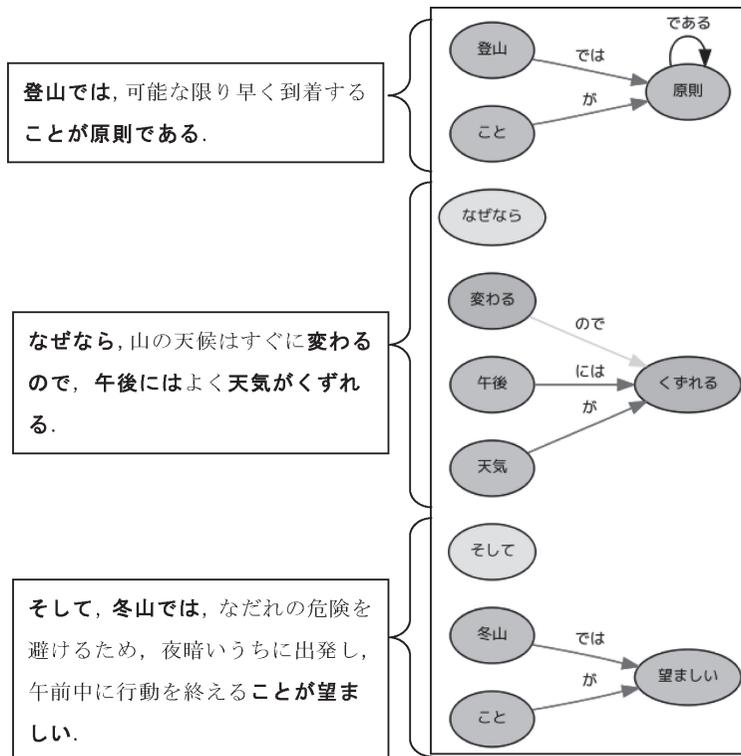


図6. 全体の可視化の例

#### 4. 授業実践

本システムは、情報科学科1年次必修科目「初年次教育」において実際に導入されている。2013年度における本システムを利用した授業について述べる。

##### 4.1 2013年度の取り組み

全15回の授業のうち、本システムの実習を伴う授業は2回分（第6回・第12回）である。簡潔性・一義性・論理性については、その前（第3回～5回）の授業においてあらかじめそれぞれ講義を実施している。

第6回は「推敲と校正」と題し、推敲と校正の違いについて説明した後、主に「推敲」についての実習を行う。学生は、簡潔性・一義性・論理性の観点から、本システムを利用して文章の修正問題を解く。

第12回は「科学技術系レポートの構成と基本ルール」という題で、主に「校正」の実習を行う。レポートの作成において守るべき基本ルール<sup>2</sup>を示した後、本システムを利用して文章の修正作業を行ってもらう。

また、この授業の最終レポートについても、提出前にTWSSを使用するよう指導している。

##### 4.2 学生に与えるべき注意

なお、本システムを学生に利用させるにあたり、与えるべき注意が2点ある。以下に示す。

- 本システムで表示された警告は、必ずよく検討すること。ただし、指示が明らかに不適切だと感じる場合は従わなくてかまわない。コンピュータによる判断には限界がある。
- 本システムで不具合が検出されなかったからといって「完璧な文」であるとは限らない。本システムでは、語の「意味」を考慮した判定を行うことはできない。また、構文のおかしさ（型が正しくない文）を検出できない。主語－目的語－述語の関係がチグハグである文ならば、可視化された図はヒントになる。しかし「文の型がおかしい」という警告メッセージが出力されるわけではないので、気がつくことが難しいケースもある。

---

<sup>2</sup> 本システムでは対応していないルール（「A4用紙・横書き」が原則、ルーズリーフ不可、ホチキスで左上をとめる、など）も含む

## 5. むすび

本論文では、開発した科学的文章を推敲・校正する教育システムの機能について紹介し、授業における取り組みを報告した。

現在、「全体の流れの可視化機能」に、論理的に問題のある個所を自動検出し指摘する機能を付加することを目指し、非論理的な接続表現の具体的な検出手法を検討している。また今後は、本システムが論理性的の推敲の手段として有効であることや、システムを実際の授業に導入した場合の効果について、検証していく予定である。

なお、本システムの URL は次のとおりである。どなたでも自由に利用いただいて構わない。

<http://mmt1.cs.tohoku-gakuin.ac.jp/twss/>

## 謝辞

本研究は JSPS 科研費（若手 B，課題番号 24700906）の助成を受けている。

## 参考文献

- [1] Attali, Y. and Burstein, J.: Automated essay scoring with e-rater v. 2, *Journal of Technology, Learning, and Assessment*, Vol. 4, No. 3 (2006).
- [2] 石岡恒憲, 亀田雅之: コンピュータによる小論文の自動採点システム Jess の試作, *計算機統計学*, Vol. 16, No. 1, pp.3-18 (2003).
- [3] Jess, <http://coca.rd.dnc.ac.jp/jess/>.
- [4] 森リン, <http://www.mori7.info/moririn/index.php>.
- [5] 菅沼 明, 小野貴博: 文章推敲支援における読み手に誤解される文の抽出, *情報処理学会研究報告*, 2007-DD-61, Vol. 2007, pp. 31-38 (2007).
- [6] 鈴木雅人, 松本章代, 田中大輔, 山田未央佳, 山田 翔, 北越大輔: 理工系学生を対象とした文章作成能力向上のための支援システム, *東京工業高等専門学校研究報告書*, No. 40 (1), pp. 59-62 (2009.1).
- [7] 稲積宏誠, 大野博之, 竹内純人, 大久保麻里子, 又平恵美子: ICT を活用した日本語文章力育成への取り組み, *情報処理学会研究報告*, Vol. 2011-CE-109, No. 9 (2011.3).
- [8] 中島利勝, 塚本真也: 知的な科学・技術文書の書き方, コロナ社 (1996).
- [9] 阿部圭一: 明文術—伝わる日本語の書きかた, NTT 出版 (2006).
- [10] 戸田山和久: 論文の教室—レポートから卒論まで, 日本放送出版協会 (2002).
- [11] 木下是雄: 理科系の作文技術, 中公新書 (1981).

付録. チェック項目一覧 (科学技術論文の場合)

- 1文中に同一単語が頻出している
- 助詞「の」が連続している (文がわかりにくくなる)
- 助詞「が」「を」「に」について1文中に同じものが複数存在する (文がわかりにくくなる)
- 1文中に同一助詞が頻出している
- 同じ文末表現が続いている
- 体言止めが使われている
- 連用形が多用されている (文がわかりにくくなる)<sup>3</sup>
- 接続助詞「が」が使われている (文がわかりにくくなる)<sup>4</sup>
- ら抜き表現が使われている
- 当て字が使われている (例: 容易い, 相応しい, など)
- 接続詞が漢字表記になっている (例: 従って, 然し, 故に, など)
- 形式名詞<sup>5</sup>が漢字表記になっている (例: 検索した所, 検討した上で, など)
- 補助動詞<sup>6</sup>が漢字表記になっている (例: 計算して見る, 減少して行く, など)
- 副詞には漢字で書くべきものとひらがなで書くべきものがある (例: 予め, 全て, 先ず, など)
- 1文中に修飾語 (形容詞・副詞) が使われすぎている
- 1文中に修飾節が2つ以上ある
- 口語的表現が使われている (例: きちんと, そんな, こんな, など)
- 「など」「たり (だり)」が使われている (複数例示されていないと文の意味があいまいになる)
- 意見かどうか (意見と推定される文に対して, 本当に「意見」でよいのか確認を促す)
- 常体で統一されていない ☆
- 読点が「,」ではなく「、」になっている ☆
- 一人称単数の主語が使われている ☆
- 常用漢字ではない ☆

☆印は入力文書のタイプが「科学技術論文」のときのみ適用される

<sup>34</sup> 連用形の多用や接続助詞「が」の使用を避けた方がよい理由については, 参考文献 [10] に詳しい.

<sup>5</sup> 本来の漢字の意味を持たない例のような名詞のこと

<sup>6</sup> 本来の漢字の意味を持たない例のような動詞のこと

## 【研究ノート】

# 戦略的人的資源管理論の現状と課題

小 林 裕

### 1. はじめに

組織には、ヒト、モノ、カネ、情報、知識など様々な資源があるが、なかでも「ヒト」という資源を扱うのが人的資源管理 (Human Resources Management : 以下 HRM) である。「資源」という言葉には、ヒトが組織内の重要な資産であるという認識が含まれている (Schuler & Jackson, 2007)。また、組織とヒトとの「関係」に焦点を当てれば、HRM は雇用関係 (Employee relationship) の管理である (Boxall & Purcell, 2003)。つまり、公式的な言い方をすれば、「企業と従業員 (すなわち人的資源) との関係のあり方に影響を与える経営の意思決定や行動のすべてを包括するもの」である (Beer et al., 1984)。

HRM という用語は、人事管理 (Personnel Management) に代わって、1980 年代から英語圏を中心に使われるようになった (Boxall & Purcell, 2003)。論文データベースを検索すると、人事管理は 1930 年代以降現在に至るまで一貫して使われているが、HRM は 1980 年代以降飛躍的に使用頻度が増大している。その頃から、市場競争の激化、経営過程の複雑化、エクセレントカンパニーの考え方など、労働者の効果的な管理を重要視する圧力が高まったためである (Guest, 1995)。

HRM が、伝統的な人事管理と異なる点が 3 つある (Guest, 1995)。一つは、ヒトの管理に人的資源の専門家だけでなく、ライン管理者も関与するようになったことである。第二に、HRM の政策や戦略が事業戦略に結びつけられていることである。その場しのぎの、問題対応的な活動から、予期的・戦略的に方向づけられた役割に重点が移行した。第三に、企業と従業員の関係についての価値観の違いである。伝統的な価値観が従業員の服従や統制を強調するのに対し、HRM は従業員のコミットメントと自律性を重視する。つまり、HRM は互恵的なコミットメントと高い信頼に基づく心理的契約に基づいている。さらに、4 つ目として、HRM の複数の施策間の調整が必要であるとの認識が伝統的な人事管理との違いであるという指摘もある (Schuler & Jackson, 2007)。

これら 4 つの視点を取り入れた概念的モデルを提示しているのが、ハーバード学派の

HRM 論である (Beer et al., 1984)。そこでは、従業員との関係に影響を与える経営の意思決定や行動のすべてに関わるものとして HRM が広く定義されている。また、いかなる HRM のシステムも企業の戦略プランを達成するために、統合化が図られている必要があるとして、HRM システムの 4 つの制度領域 (従業員のもたらす影響、ヒューマンリソースフロー、報償システム、職務システム) を横断的に統合するための 3 つの包括的アプローチ (官僚主義的、市場的、協調的) が提示されている。さらに、上記の 4 つの制度領域の 1 つである「従業員のもたらす影響」には、従業員のコミットメントを重視する価値観が表れているとともに、その領域が他の 3 つすべてに関わるとする点にこの学派の特徴が示されている。

このように、HRM は人事管理よりも広い視点を持ち、それに基づく施策の進歩や統合がもたらされてきたが、他方 HRM の研究は、依然として個々の人的資源活動に焦点が当てられ、統一的な理論が欠如していた (Ferris et al., 1995)。その研究は行動科学的アプローチによって特徴づけられ、その主要な分析レベルはマクロ (つまり組織レベル) というよりミクロ (つまり個人レベル) であった。特に、心理学の分野では、マクロレベルの内的および外的環境との関連性はほとんど無視されてきた (Jackson & Schuler, 1995)。HRM 研究を分析レベル (個人/集団または組織) と施策の数 (単一か複数か) で 4 つの下位領域に分類するとすれば (図 1: Wright & Wendy, 2002)、個人/集団レベルの単一の施策に集中していた。

HRM は、前述のとおりもともとマクロな戦略的視点を含んでいたが、それを明示し焦点化しているのが、戦略的人的資源管理 (Strategic Human Resources Management: 以下

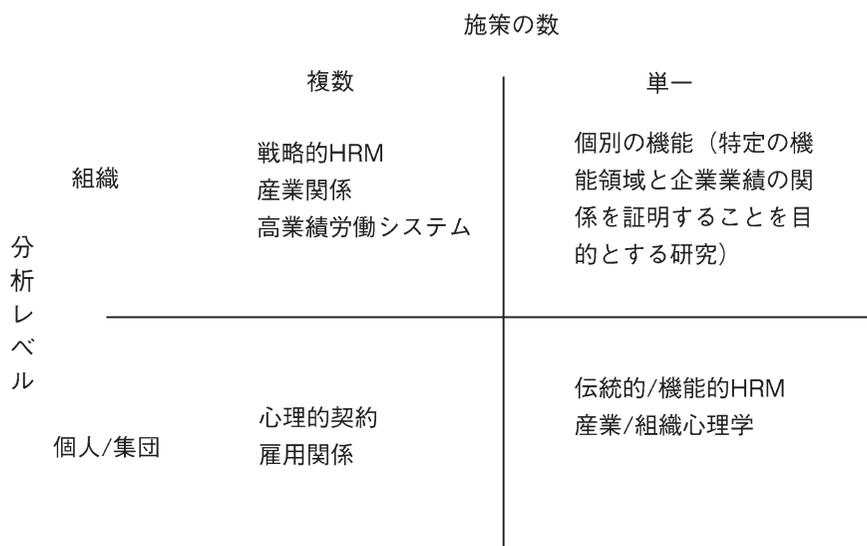


図 1. HRM 研究の分類 (Wright & Wendy, 2002)

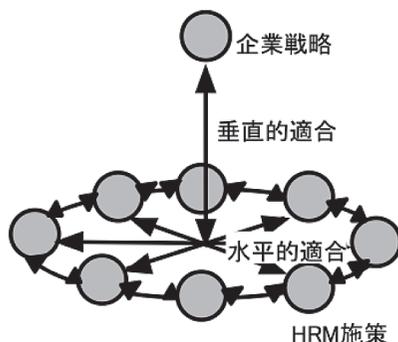


図2. SHRM論の考え方

SHRM)である。SHRMは、HRMと組織の要求との調整・連携が必要であるという認識に立ち (Schuler & Jackson, 2007), 組織の業績に対するHRM施策の重要性を証明したいという願望によって生まれた (Delery & Doty, 1996)。つまり、SHRMは、「組織の目標が達成できるよう計画的にパターン化された」HRM (Wright & McMahan, 1992) と言える。図1で言えば、マクロレベルの複数施策を扱うのがSHRMである。

SHRMの定義は、伝統的なHRMと2つの点で異なる (Wright & McMahan, 1992)。1つは、HRM施策を組織の戦略的経営過程に結びつけることであり、もう一つは、様々なHRM施策の間の協調や一貫性を重視することである (図2)。これらは、垂直的・水平的適合とも呼ばれる。そして、以上に加えて、HRM施策が企業レベルの業績に寄与するという考え方もSHRMの3点目の特徴と言えるだろう。つまり、企業の競争的な戦略の実施を助けるとともに、施策の間の相補性とシナジーを利用するHRMシステムが持続的競争優位の源泉になるという前提に立ち、適切に計画されたHRM施策が企業業績に直接的で経済的に有意な貢献をもたらすという立場である (Huselid, 1995)。

3点目の特徴については、学問的必然性や必要性から生まれたというより、実務的、さらに具体的に言えば、企業内でのHRMの部門や専門家の事情が背景にある。アメリカ企業の場合、HRMが組織に価値を付加していないという批判が長年の繰り返され、それに対してHRMの実務家が自分達の行っていることの価値を組織の他の部署に証明したいという願望は長い歴史を持っている (Wright et al., 2005)。

## 2. SHRM論の現状

前述のSHRMの定義から、学問的・科学的研究としてのSHRM論の課題は、「組織の目標が達成できるよう計画的にパターン化された」HRMとは何かという問いに理論的に答え、そのようなHRMが実際に企業業績を高めるかを実証的に検討することである。その課題を

さらに具体化すれば、(1) 目標達成に役立ち、戦略に適合した HRM とは何か、(2) HRM 施策をどのようにパターン化すれば相互に適合的か、という2つの問いに分けられる。つまり、垂直的適合と水平的適合の内容を明確化・詳細化することである。そして、これまでのところ、垂直的適合に焦点を当てる立場、水平的適合に焦点を当てる立場、どちらも重視しない立場の3つに大きく分類される。ただし、3種類の立場は決して相互に排他的ではなく、焦点を当てる程度の差があるにすぎない。その点に注意した上で、以下では、3つの立場を概観することにする。

### 1) 戦略と HRM の連携：垂直的適合

HRM 施策を組織の戦略的経営過程にどのように結びつけば企業業績に貢献するか、つまり企業の戦略の実施を助ける HRM 施策とは何か、を考える上で中心となるのが、戦略コンティンジェンシー理論である。そこでは、HRM 施策の企業業績への影響が戦略によって異なるという考え方に立ち、組織の戦略と HRM 施策の「適合 (fit)」や「組み合わせ (matching)」のモデルが数多く生まれた (Welbourne & Andrews, 1996)。戦略が先に決定され、その実施のための手段が HRM であるという点で、上位の戦略に対して下位の HRM をいかに垂直的に適合させるかが問題になる (図2 参照)。

垂直的適合のモデルのなかで、戦略と HRM の連結の根拠を従業員の役割行動に求めるのが、役割行動パースペクティブである (Schuler & Jackson, 1987; Jackson & Schuler, 1995; Snell, 1992; Wright & McMahan, 1992)。そこでは、戦略の実施にとって必要な役割行動が異なるので、その行動を引き出しコントロールする HRM 施策もそれに応じて異なるを考える (図3)。人的資源には、組織を構成する個人の持つ知識・技能・能力 (KSAs) と従業員の行動という2つの側面があるが、個人の特性は従業員の行動を通じて利用されない限り企業に価値をもたらさない (Wright et al., 1994)。その点から、役割行動パースペクティブでは、企業の戦略と業績の関係を媒介するものとして従業員の技能よりもその行動に焦点をあてて

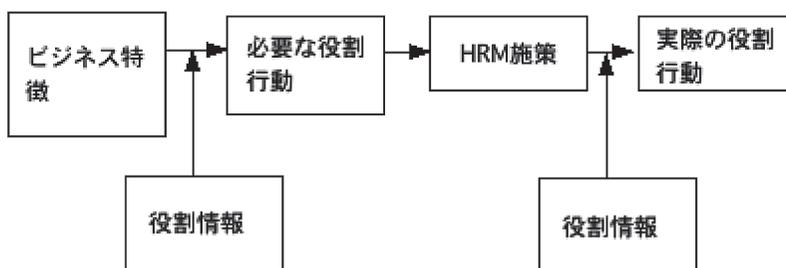


図3. 役割行動パースペクティブ (Wright and McMahan, 1992)

いる (Shuler & Jackson, 1987)。

行動パースペクティブに基づく戦略と HRM 施策の適合関係のモデルとしては、Miles & Snow (1984) のそれが代表的である。そこでは、事業戦略のタイプが保守型、投機型、分析型に分類され、それぞれに応じて人的資源部門の戦略的課題が、蓄積 (building)、確保 (acquiring)、配分 (allocating) になる、とされている。また、Schuler & Jackson (1987) は、革新、品質改善、コスト削減、という 3 つの競争戦略に適合的な役割行動のプロフィール (繰り返しの・予測的・創造的・革新的、短期的視点-長期的視点など 12 の次元) を提示した。

行動パースペクティブについては、内在的・外在的批判がありうる。内在的な批判としては、HRM 施策の「内的適合」をもたらす方法が不明確であること、記述的理論か規範的理論かの区別が曖昧であること、という 2 つの問題が指摘されている (Snell, 1992)。つまり、個々の施策をどのように組み合わせれば相互に適合的であるかが明確でない、そして、戦略と施策の垂直的適合の合理性は理解されても、役割行動がそれらを媒介しているという証明がない、ということである。外在的な批判としては、従業員の行動が HRM 施策と企業業績を媒介することがわかったとしても、行動を媒介しない直接的効果もありうるという指摘がある (守島, 1996; Fey et al., 2000)。例えば、雇用削減が企業の労務コストを減らし、短期的には利益率を向上させる場合である。

ただ、行動パースペクティブの理論的なモデルに基づいてはいないものの、戦略と HRM 施策の適合関係を実証的に検討した研究がいくつか見られる。例えば、Arthur (1992) は、アメリカの小製鉄所 (minimill) を単位とした調査の結果、事業戦略と雇用関係のクラスター (タイプ) の間に「戦略的選択」を示す関係を報告している。また、Youndt et al. (1996) は、製造工場の調査の結果、人的資本向上志向の HRM システムが質的な製造戦略と結びついた時オペレーション上の業績を高めるという適合関係を見いだした。ただし、Huselid (1995) の調査では、企業レベルの業績に対する「高業績労働施策 (high-performance work practices)」と競争戦略の交互作用は確認されなかった。

## 2) HRM 施策間の連携：水平的適合

HRM 施策を相互に適合させることの有効性や必要性は、システムズアプローチという名前で古くから指摘されている。例えば、参加的経営論 (Likert, 1961; 1967) では、管理システムのあらゆる側面は相互に作用しあうものなので、それらを同時にかつ一貫したやり方で変革すると一つだけ変化させる時とは全く異なる結果を生み出すとされている。

また、参加的経営論の流れを汲むハイ・インボルブメントモデル (Lawler, 1986; Lawler et al., 1995) でも、参加的プログラムの有効性は、報酬・権限・知識・情報の 4 つを同じ方

向（つまり従業員側）に一貫して移行させるかどうかで異なり、4つの乗算的な関係で計算される、つまり4つがそろえば相乗効果を発揮する一方、どれか一つでも0の場合すべて0になる、とされる。実証データでも、ハイ・インボルブメント施策群の企業業績への効果が確認され（Lawler et al., 1995；Bae & Lawler, 2000；小林, 2001）, 「コミットメント極大化」クラスタのHRMシステムが工場のオペレーションレベルの業績を高めることも実証されている（Arthur, 1994）。

さらに、ハイ・インボルブメントモデルやハイ・コミットメントモデル（Wood & Menezes, 1998）を包含する「高業績労働システム（high-performance work system：HPWSs）」（Appelbaum et al. (eds.), 2000）にも、HRM施策が「束ねられた（bundled）」時に有効性が高まるという主張が見られる（Boxall & Purcell, 2003）。また、「高業績労働施策」（Huselid, 1995）、革新的HRM施策群（MacDuffie, 1995；Ichniowski et al., 1997）、「王道な（high-road）」HRM施策群（Michie & Sheehan-Quinn, 2001）なども相互補完的なシステムとしてのHRM施策群が、企業レベルの業績と関連することを実証データに基づいて明らかにしたが、革新的HRM施策の個々の業績向上効果を認めながら施策間の相補性の効果を否定している研究もある（Delaney & Huselid, 1996）。

施策間の連携の必要性を主張する考え方のなかでも、特に施策間の相互補完性や非線形的なシナジー効果・高次交互作用効果を強調するのが、形態（configurational）アプローチである（Delery & Doty, 1996）。そこでは、全体論的な視点に立って、最大限の有効性をもたらす内的に一貫した施策群の形態または独特のパターンまたは、雇用システムを見いだそうとする。例えば、Delery & Doty（1996）は、市場タイプと内部タイプという2種類の雇用システムの理念型を提示した上で、理念的な市場タイプに近い組織の業績が高いことを実証的に明らかにし、形態的適合アプローチを支持する結果を見いだしている。

### 3) 戦略としてのHRM：普遍的アプローチ

戦略とHRMの垂直的適合では、戦略に合わせてHRM施策が決定される、つまり戦略の実行を助けるのが施策の役割とされるが、逆にHRM自身が戦略になる、またはHRMが戦略の形成に貢献しようという考え方もある（Allen & Wright, 2007）。このように、組織全体の業績に関連する施策は戦略的HRM施策と呼ばれる（Delery & Doty, 1996）。それらの施策の効果は、文脈や他の施策との特定の関係が前提条件とされず、個々の施策をより多く使えば使うほど業績が高まると考えられている。コンティンジェンシーアプローチや形態アプローチと対比して、普遍的アプローチ、「ベスト・プラクティス」アプローチなどと呼ばれる。また、前述の「高業績労働施策」も「ベスト・プラクティス」アプローチに含まれるとする

見方もある (Delery & Doty, 1996)。

戦略的 HRM 施策つまりベスト・プラクティスのリストは、いくつか提案されている。例えば、Delery & Doty (1996) は、それまでの理論的研究で共通して戦略的と見なしうる 7 つの施策 (内部キャリア機会、公的訓練システム、評価測度、プロフィットシェアリング、雇用保障、発言の仕組み、職務規定) を確認した。また、Pfeffer (1998) は、人材重視戦略という名前で、企業業績を高める 7 つの条件 (雇用保障、徹底した採用、自己管理チームと権限の委譲、高い成功報酬、幅広い社員教育、待遇の平等化、業績情報の共有) を提案している。また、O'Reilly & Pfeffer (2000) も、企業の価値観を体現するための 6 つの「テコ」(強烈的な個性の企業文化、適材の雇用、社員への投資、広範囲に及ぶ情報の共有、チームを基礎とするシステム、報酬と評価) を相互の一貫性と整合性を前提としながら列挙している。

### 3. 戦略的 HRM 論の課題

#### 1) HRM 施策から企業業績への因果関係の検証

これまでの研究で、HRM 施策と企業業績の間には有意な相関関係があること実証されているが、因果関係とその方向は明らかになっていない。例えば、Wright ら (2005) は、複数の HRM 施策と企業業績 (Firm Performance: FP) の関係を検討した実証的研究 (以下、「HRM-FP」研究) が 1990 年代以降増加したことを指摘し、その種の文献 68 件のレビューを行った結果、(1) すべての研究が HRM 施策と業績の有意な関係を報告している、(2) ほとんどが因果的結論を論理的に引き出すことができないような研究デザインを用いている、(3) 逆の因果順序を検証したものは極めてまれである、と述べている。また、Wright ら (2005) は、自分達の行った 1 企業 45 事業単位のデータに基づいて HRM 施策と業績に有意な相関関係があっても因果関係が見られないことを検証している。

HRM 施策から業績への因果関係がなくても相関関係が成り立ちうるいくつかの可能性がある (Wright & Gardner, 2003; Wright et al., 2005)。一つは、施策が業績に影響するのではなく、業績が施策に影響するという「逆の因果関係」仮説である。例えば、企業が収益を高めると HRM 施策に投資する場合である。これは、施策への投資が業績を高めるという信念に基づいて行われることもあるが、単に増加した富の従業員の取り分が賃金や訓練や参加の機会を通じて再分配されることもある。逆に言えば、企業業績の急激な低下への反応として HRM システムが変化する場合がある (Argyris, 1957; Morishima, 1995)。

第二の可能な説明は、相関関係が何らかの真の関係から生じるのではなく、組織調査の回答者の暗黙の理論から生じるという「暗黙の理論」仮説である。業績を知っているとそれに

応じて施策への評価が異なるかもしれない。高業績の組織はその原因を経営の方針や決定の質に求めやすく、そのため低業績組織の回答者よりもより好意的に経営施策を記述することが考えられ、このことは高業績企業を選び出してからその企業の施策が「正しく行われている」ことを確認する研究者にも当てはまる (Gerhart, 1999)。この仮説は他の分野でも確認されているので (Wright & Gardner, 2003), 「HRM-FP」研究でも一定の説明力を持っているかもしれない。

もう一つの可能性は、第三の変数が両方の変数に影響しているという「表面的」関係仮説である。例えば、優れたリーダーシップや組織文化などの組織的要因が第三の変数になりうる。また、上記の「暗黙の理論」仮説は回答者自身の要因が第三の変数になりうることを示している。独立変数と従属変数を同一時点で同じ人間から自己報告させる場合、とりわけ両変数とも評価が関わっている時システムティックな測定誤差が起こるが (Gerhart, 1999), その原因は回答者の感情状態が両方の評価に影響しているからかもしれない。いずれにしても、これらの仮説のどれが当てはまるかは、横断的研究ではなく、縦断的な研究デザインを必要としている。

広い意味での「HRM-FP」の因果関係の検証には、HRM 施策と戦略との垂直的適合や施策間の水平的適合の実証も含まれる。これらについてはいくつかのモデルが提案されているが、どれが有効か一致した見方があるわけではない (Wright & Gardner, 2003)。また、垂直的適合の効果については一貫した支持があるわけではない (Wright & Sherman, 1999; Allen & Wright, 2007)。どのような適合関係が企業業績を高めるかについて、今後経験的検証がさらに蓄積される必要がある。その際、3) で詳述する分析レベルや測定といった方法論的な問題が、経験的研究の結果の非一貫性をもたらしている可能性がある (Wright & Sherman, 1999; Panayotopoulou et al., 2003), その問題も同時にクリアする必要がある。

## 2) HRM 施策が企業業績に影響するメカニズムの明確化

SHRM 論では、HRM 施策が企業の成果に影響する具体的メカニズムについて合意が存在しない (Wright & Gardner, 2003)。具体的メカニズムとは、HRM 施策と企業業績の間の「ブラック・ボックス」で何が起きているかということであるが、両者の媒介変数となるものは何か、媒介変数として小さいボックスを何個含める必要があるか、等についての合意はない (Wright & Gardner, 2003)。上記の SHRM 論の主要な二つの見方、つまり戦略的 (コンティンジェンシー) パースペクティブもシステムズ (形態的) パースペクティブも HRM 施策が企業レベルでの望ましい成果をもたらしうることを示しているものの、そのような成果が生まれる過程について述べていない (Bowen & Ostroff, 2004)。

そこで、「ブラック・ボックス」問題の解明には、新たな理論的アプローチが必要となるが、そのためには、既存の理論を再検討するだけでなく、幅広く理論的な可能性を他の学問分野に求めるのがよいであろう。その点では、SHRM 論の分野は、社会学、経済学、経営学、心理学などの学問分野から様々な理論の援用・応用がなされている（Wright & McMahan, 1992; McMahan et al., 1999）。例えば、Wright & McMahan（1992）は、HRM 施策の戦略的・非戦略的決定因の両方を理解するのに有益な6つの理論的モデル（行動的視点、サイバネティックモデル、エージェンシー/取引コストモデル、資源ベースの企業観、権力/資源依存モデル、制度理論）を挙げ、それぞれの理論が、戦略、HRM 施策、人的資本プール、人的資源の行動のどの関係に焦点を当てるかを示している（図4）。

資源ベースの企業観は、戦略、HRM 施策、人的資本プールの関係に主に焦点をあて、行動アプローチは戦略、HRM 施策、人的資源の行動がどのように相互関係を行っているかに主に関係し、サイバネティックおよびエージェンシー/取引コストモデルは戦略、HRM 施策、‘人的資本プール’と人的資源の行動の間関係を検討しようと試み、資源依存および制度理論は政治的および制度的要因がHRM 施策に及ぼす影響を検討する。

他方、これら様々な学問分野からの理論的応用は、HRM 施策の決定因や成果を明確化する上で一定の価値があるものの、HRM の企業業績への影響メカニズムやプロセスを明確化する上で限定された価値しかない（Wright & Gardner, 2003）という批判がある。

### 3) 分析レベルと測定方法をめぐる合意形成

「HRM-FP」研究における方法論的問題の1つは、適切な分析レベルについて合意が存在しないことである（Wright & Gardner, 2003）。「HRM-FP」研究における分析レベルには、企業、事業単位、工場などがある。「HRM-FP」の関係を検討した29件の研究をレビューした

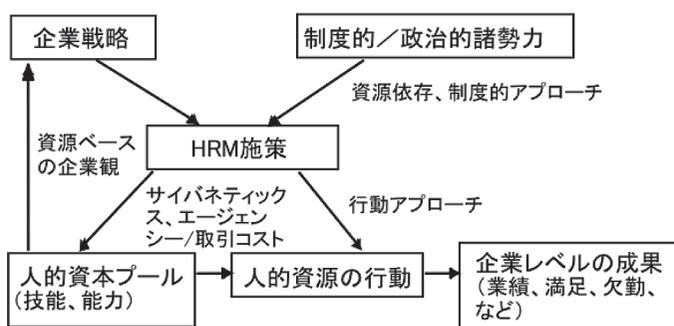


図4. SHRM 研究の理論的枠組 (Wright and McMahan, 1992)

Roger & Wright (1998)によると、それらの研究に含まれる個々の「HRM-FP」の関係80件のうち、最も多かったのが企業レベル(56)、ついで工場レベル(19)、最も少なかったのが事業単位レベル(5)だったが、必ずしも企業レベルが適切であるとは限らない。この問題を検討したWright & Gardner (2003)は、各レベルにはそれぞれ利点と欠点があり、別々の問いに答えるようになっているので、各研究者が特定の研究課題に応じて、慎重に分析レベルを選ぶ必要がある、と指摘している。

分析レベルに関してはもうひとつ別の問題がある。それは、上記2)の影響プロセスに関わることで、企業・事業単位・工場などのレベルのHRM施策が業績に及ぼすマクロレベルの影響プロセスには、暗黙にマイクロレベルの個人特性が仮定されているとすると(Bowen & Ostroff, 2004)、分析も複数レベルにまたがることになる。つまり、企業のHRMはまず個人の特性や行動に影響し、次いで個人特性や行動が企業業績に影響する、というプロセスを想定すると、マクロ・マイクロ両方のレベルが影響に関わっているので、分析も両レベルを含む必要がある。これは単に、データの測定や分析という方法論的問題にとどまらず、どのようなプロセスを想定するかという理論的な問題にも関わっている。

「HRM-FP」研究における3つ目の方法論的問題は、HRM施策や企業業績の測定方法についての合意が存在しないことである(Wright & Gardner, 2003)。これは、HRM施策や企業業績という概念の操作化に一貫性がないということであり(Wright & Sherman, 1999)、さらに言い換えれば、構成概念的妥当性、つまり「構成概念(ある変数の概念的定義)とそれを測定・処理する操作的手続きの一致」(Rogers & Wright, 1998)の問題でもある。概念的妥当性が測定論的問題と理論的問題の接点であるとすれば、HRM施策や企業業績の測定方法の問題は、方法に限定されない理論的問題でもある(Bacharach, 1989)。特に、業績概念の定義と測定の問題は、「HRM-FP」研究のこれまでの成果を疑問視させ、正当性を阻害している(Rogers & Wright, 1998)。

実は、企業業績に対する学問的関心はSHRM論が初めてではない。組織業績研究は1960～1970年代に盛んに行われた。それが1970年代中ごろ以降急速に衰えたのは、上記のような業績概念と測度をめぐる問題が原因であった(Meyer & Gupta, 1994)。SHRM論はまさにこの「業績問題」に直面している。そして、SHRM論が過去の業績研究と同じ運命をたどらないためにも、業績概念をめぐる問題の解決が必要である。

#### 引用文献

Allen, M.R. and Wright, P. (2007). Strategic management and HRM. In P. Boxall, J. Purcell, and P.

- Wright. (eds.) *The Oxford handbook of human resource management*. Oxford : Oxford U.P., pp. 88-107.
- Appelbaum, E.B., Bailey, T. and Berg, P. (eds.) (2000). *Manufacturing advantage : Why high-performance works systems pay off*. Ithaca, N.Y. : Cornell U.P.
- Argyris, C. (1957). *Personality and organization* New York : Harper & Row. (アーギリス, C. 伊吹山太郎・中山実 (訳) (1970). 組織とパーソナリティー 日本能率協会)
- Arthur, J.B. (1992). The link between business strategy and industrial relations systems in American steelmills. *Industrial and Labor Relation Review*, 45, 488-506.
- Arthur, J.B. (1994). Effects of human resource systems to manufacturing performance and turnover *Academy of Management Journal*, 37, 670-687.
- Bacharach, S.B. (1989). Organizational theories : Some criteria for evaluation. *Academy of management review*, 14-4, 496-515.
- Bae, J. and Lawler, J.J. (2000). Organizational and HRM strategies in Korea : Impact on firm performance in an emerging economy. *Academy of Management Journal*, 43 (3), 502-517.
- Beer, M., Spector, B., Lawrence, P., Mills, D.Q. and Walton, R.E. (1984). *Managing human assets : The groundbreaking Harvard Business School program*. N.Y. : Free Press. (ビーア. M. 他 梅津祐良・水谷栄二 (訳) (1990). ハーバードで教える人材戦略 日本生産性本部)
- Bowen, D.E. and Ostroff, C. (2004). Understanding HRM-firm performance linkages : The role of the "strength" of the HRM system. *Academy of Management Review*, 29 (2), 203-221.
- Boxall, P. and Purcell, J. (2003). *Strategy and human resource management*. Basingstoke : Palgrave Macmillan.
- Delaney, J.T. and Huselid, M.A. (1996). The impact of human resource management practices on perceptions of organizational performance. *Academy of Management Journal*, 39 (4), 949-969.
- Delery, J.E. and Doty, D.H. (1996). Modes of theorizing in strategic human resource management : Tests of universalistic, contingency, and configurational performance predictions. *Academy of Management Journal*, 39, 802-835.
- Ferris, G.R., Barnum, D.T., Rosen, S.D., Holleran, L.P. and Dulebohn, J.H. (1995). Toward business-university partnerships in human resource management : integration of science and practice. In Ferris, G.R., Rosen, S.D. and Barnum, D.T., (eds.) *Handbook of human resources management*. UK : Blackwell, pp 1-13.
- Fey, C.F., Bjorkman, I. and Pavlovskaya, A. (2000). The effect of human resource management practices on firm performance in Russia. *International Journal of Human Resource Management*, 11, 1-18.
- Gerhart, B. (1999). Human resource management and firm performance : Measurement issues and their effect on causal and policy inferences. In P.M. Wright et al. (eds.), *Research in personnel and human resources management. suppl. 4: Research annual*, Greenwich, CT : JAI Press. pp. 31-51.
- Guest, D. (1995). Human resource management. In Nicholson, N. (ed.), *The Blackwell encyclopedic dictionary of organizational behavior*, Cambridge, Mas. : Blackwell Pub., pp. 216-218.
- Huselid, M.A. (1995). The impact of human resource management practices on turnover, productivity, and corporate financial performance. *Academy of Management Journal*, 38, 635-672.
- Ichniowski, C., Shaw, K. and Prensushi, G. (1997). The effects of Human Resource Management practices on productivity : A study of steel finishing lines. *American Economic Review*, 87, 291-313.
- Jackson, S.E. and Schuler, R.S. (1995). Understanding human resource management in the context of organizations and their environments. *Annual Review of Psychology*, 46, 237-264.
- 小林 裕 (2001). 人的資源管理システムにおける成果主義的報酬施策の役割—「ハイ・イン

- ボルブメント」モデルの実証的検討— 組織科学 34-3, 53-66.
- Lawler, E.E. III, Mohrman, S.A. and Ledford, G.E. Jr. (1995). *Creating high performance organizations : Practices and results of employee involvement and TQC in Fortune 1000 Companies*. San Francisco, CA. : Jossey-Bass.
- Lawler, E.E. III. (1986). *High-involvement management*. San Francisco, Cal. : Jossey-Bass.
- Likert, R. (1961). *New patterns of management*. New York : McGraw-Hill (リカート, R. 三隅二不二 (訳) (1964). 経営の行動科学 ダイアモンド社)
- Likert, R. (1967). *The human organization : Its management and value*. New York : McGraw-Hill (リカート, R. 三隅二不二 (訳) (1968). 組織の行動科学 ダイアモンド社)
- MacDuffie, J.P. (1995). Human resource bundles and manufacturing performance : Flexible production systems in the world auto industry. *Industrial and Labor Relations Review*, 48, 197-221.
- McMahan, G.C., Virick, M. and Wright, P. (1999). Alternative theoretical perspectives for strategic human resource management revisited : Progress, problem, and prospects. In Patrick M.W. et al. (eds.) *Research in personnel and human resources management, suppl. 4: Research Annual*, JAI. pp. 99-122.
- Michie, J. and Sheehan-Quinn, M. (2001). Labour market flexibility, human resource management and corporate performance. *British Journal of Management*, 12(4), 287-306.
- Miles, R. and Snow, C. (1984). Designing strategic human resource systems. *Organizational Dynamics*, 31, 36-52.
- Morishima, M. (1995). Embedding HRM in a social context. *British Journal of Industrial Relations*, 33, 617-640.
- Meyer, M.W. and Gupta, V. (1994) The performance paradox. *Research in Organizational Behavior*, 16, 309-369.
- 守島基博 (1996). 人的資源管理と産業・組織心理学 : 戦略的人的資源管理論のフロンティア 産業・組織心理学研究 10, 3-14.
- O'Reilly, C. and Pfeffer, J. (2000). *Hidden value : How great companies achieve extraordinary results with ordinary people*. Boston, Mass. : Harvard University Press. (オライリー, C.・フェファール, J. 廣田里子・有賀裕子 (訳) (2002). 隠れた人材価値 : 高業績を続ける組織の秘密 翔泳社)
- Panayotopoulou, L., Bourantas, D. and Papalexandris, N. (2003). Strategic human resource management and its effects on firm performance *The International Journal of Human Resource Management*, 14(4), 680-699.
- Pfeffer, J. (1998). *The human equation : Building profits by putting people first*. Harvard Boston : Business School Press. (フェファール, J. 佐藤洋一 (監訳) (1998). 人材を生かす企業トッパン)
- Rogers, E.W. and Wright, P.M. (1998). Measuring organizational performance in strategic human resource management : Problems, prospects, and performance information markets. *Human Resource Management Review*, 8, 311-331.
- Schuler, R.S. and Jackson, S.E. (1987). Linking competitive strategies with human resource management practices. *The Academy of Management Executive*, 1-3, 207-219.
- Schuler, R.S. and Jackson, S.E. (2007). *Strategic human resource management*. 2nd ed. Malden, Mass. : Brackwell.
- Snell, S.A. 1992 Control theory in strategic human resource management : The mediating effect of administrative information. *Academy of Management Journal*, 35, 292-327.
- Welbourne, T.M. and Andrews, A.O. (1996). Predicting performance of initial public offerings : Should human resource management be in the equation ? *Academy of Management Journal*, 39, 891-919.
- Wood, S. and Menezes, L. (1998). High commitment management in the U.K. : Evidence from the

- workplace industrial relations survey, and employers' manpower and skill practices survey. *Human Relations*, 51, 485-515.
- Wright, P.M. and Gardner, T.M. (2003). The Human Resource-Firm Performance Relationship : Methodological and Theoretical Challenges. In D.W. Holman, D. Toby, C.W. Clegg, P. Sparrow, and A. Howard (eds.) *The new workplace : a guide to the human impact of modern working practices*. Chichester : Wiley. pp. 311-328.
- Wright, P.M. and McMahan, G.C. (1992). Theoretical perspectives for strategic human resource management. *Journal of Management*, 18, 295-320.
- Wright, P.M. and Sherman, W.S. (1999). Failing to find fit in strategic human resource management : Theoretical and empirical problems. In P.M. Wright et al. (eds.), *Research in personnel and human resources management suppl. 4: Research annual*. JAI. pp. 53-74.
- Wright, P.M. and Wendy, R.B. (2002). Desegregating HRM : A Review and Synthesis of Micro and Macro Human Resource Management Research. *Journal of Management*, 28(3), 247-276.
- Wright, P.M., Gardner, T.M., Moynihan, L.M. and Allen, M.R. (2005). The relationship between HR practices and firm performance : Examining causal order. *Personnel Psychology*, 58(2), 409-446.
- Wright, P.M., McMahan, G.C. and McWilliams, A. (1994). Human resources and sustained competitive advantage : Resource-based perspective. *International Journal of Human Resource Management*, 5, 301-326.
- Youndt, M.A., Snell, S.A., Dean, J.W., Jr. and Lepak, D.P. (1996). Human resource management, manufacturing strategy, and firm performance. *Academy of Management Journal*, 39, 836-866.

【翻 訳】

## 自然科学のようにならない社会学

—— アメリカ社会学の制度分析 —— (戦後部分)

ステフエン・ターナー, ジョナサン・ターナー 共著  
久 慈 利 武 訳

### 第3章 新しいオプティミズム：第二次世界大戦後のアメリカ社会学

【梗概】第二次世界大戦後のこの時期——1946年から1960年——は社会学の黄金期の舞台を用意した。その時期は新しい学問リーダー、新しい水準の研究資金給付、資金給付の新しい源泉、(1950年代半ばの需要の鋭い落ち込みのあとの)社会学への学生の関心の持ち直し、理論と方法と実践を調停しようとする努力の更新によって特徴づけられる過渡期であった。

ニューリーダーの簇生は専門職の人口統計上の結果である。つまり第一次世界大戦以前にPh.D トレーニングを受けた世代の死亡や退職につれて、大恐慌期のPh.Dの粗製濫造が埋めることができない空白を作り出した。そのうえアイヴィーリーグ大学が研究志向大学として自己主張し始めるにつれて、このポジションが作り出された。

アイヴィーリーグ大学のこの盛り返しの物質的基礎は私的財団による資金給付の新たな波であったが、財団事務官とアカデミクス選良の旧来のネットワークは、アカデミック研究の連邦政府による資金給付の劇的な増加に直面して、その比重を後退させた。公的資金とピア審査を含むこの移行の開始は1950年代にきわめて顕著になった。

計量的社会心理学と機能理論の登場はこの時期の大きな知的な達成であった。測定と計量統計分析の重視は数十年の間に構築され、代替アプローチを次第に周辺に追いやった。方法論論争の波及は大きくなかったため、この支配は少なくともしばらくは「無血」クーデタであるようにみえた。もっと驚くのは、機能理論と計量的方法を新たに重視した明らかな調停——ハーヴァード大学でのParsons-Stouffer、コロンビア大学でのMerton-Lazarsfeldによって大いに促進された調停——である。しかしながら、理論と実践の関係にかすかな不協和音も見られた。だがこれらの問題は1960年代、1970年代まで破裂することはなかった。実際パーソンズのような理論家は、社会学が医学部や経営学部で影響力を広げるのに理論と調査というツールを利用することに賛意を示した。

組織的には、社会学は成長し始めた。授与される学位の数は初めは乱高下したものの、教員職創出に重要な資源を提供するようになり、1960年代に近づくにつれて上昇に転じた。ASAは、社会学をもっと大きな、もっと強力な、もっと結集した専門職組織にすることに對する不平の渦巻く中で劇的に会員を増やした。しかしながら、次章で述べるように、そのような野心は続く10年間の資源の大量流入によって圧倒された。つまり急激な成長と分化は知的な統合と組織の結集を不可能なものにした。理論、方法、実践、批判間の潜在的な緊張点は各々が新たな資源を集めるにつれて、再び表面化し、新しい下位領域、雑誌、個別分野学会の登場は続く数十年に把握できないほどに加速した。

## 序論

戦後の状況はこの時期に特有のアカデミック人口統計とある種のリサーチ所産への特有の需要過剰によって大いに影響を受けた。人口統計の観点から見ると、大恐慌の開始から戦争の終結までの15年は再生産過程を実質的にカットオフした。ジョブは希少で、シカゴのような社会学科でも、最良で最も素晴らしいジョブはアカデミックなポジションよりも政府のそれであった。だが例外が興味深い。サミュエル・スタウファー、デヴィッド・リースマン、アーノルド・ローズ、ウィリアム・セウェル、ポール・ラザースフェルド、タルコット・パーソンズ、ハーバート・ブルマー、ロバート・マートンはいずれもこの時期に活躍した社会学者になった。戦争終結までに、彼らの前世代のリーダーが退職を迎えるか間近であった。

ギデングスは第一次世界大戦前の10年間(彼はそのとき40代後半から50代前半であった)にPh.Dの教師として沢山の弟子を育てた。スチュアート・チェイピン、ウィリアム・オグバーン、ジョン・ギリン、フランク・ハミルトン・ハンキンズ、ハワード・オーダムら弟子達はPh.Dの上昇が止み、アカデミックジョブが減少する時期に彼らのキャリアを築き上げた。1930年代には、多くの教員が給与のカットを余儀なくされ、手に入るポジションはほとんどなかった。1930年と1945年の間はASSの会員はほぼ半分まで低下した。戦後の復員兵援護法がこの趨勢を劇的に変えたとき、上記のリーダー達は名誉教授か退職間近であった。

社会学の入学者が増えるにつれて、新たな人口統計的な資源が手にはいるようになったが、その機会に反応する能力は低減していた。結果として、幾つかの尋常でないリクルートパターンが観察された。戦後は社会学の急成長の始まりを印したから、このリクルートパターンは社会学に有意な結果をもたらすことになった。

コロンビアとハーヴァードのような大学は1940年代に前記の教員を入れ替え、社会学の

既成の学問ヒエラルキーを超えることによって拡張を図った。例えばコロンビア大学では、チャドックのポジションはロバート・マートンとポール・ラザースフェルドで分割された。マートンは32歳で正教授になり、ロバート・マキーバー<sup>1</sup>によって後押しされた。ラザースフェルドはこのときは社会学者ではなかったが、社会学の学問の系譜と離れた人物、ロバート・リンドによって後押しされた。マートンのハーヴァード出身の背景は彼をギデングスの弟子たちによって作り出された基準に照らしてアウトサイダーにしたが、マキーバーはその基準に根本から敵対していた。ハーヴァードでは、生物学者でビルフレド・パレートの信奉者で、キャンパス・ブローカーとして絶大な影響力を持ったヘンダーソンの役割によって状況が異常であった。ヘンダーソンは社会学の任命権を握り、ボストンの社会エリートであるジョージ・ホームズが社会学のポジションに指名された\*。ホームズはヘンダーソンのパレート・サークルとの関わりとウェスタン・エリクトリック社研究に参加したことを除いて既存の社会学の伝統に染まっていなかった。1931年に社会学部のメンバーになり、戦争開始時にはまだ助教授であったタルコット・パーソンズは、ハーヴァードの偏狭な環境を利用し、ハーヴァードの貴族階級に不評であったソローキンを出し抜いて新しい学科、社会関係学科を創設した。

あのシカゴ大学ですら、自らを再生産するのに苦労していた。レオ・グッドマンは、社会学を教えることを期待されて統計学者として招聘された。その著『孤独な群衆（1950）』で有名なデヴィッド・リスマンは学部専従カレッジにリクルートされ、コミュニティ・ファミリー研究センターに関わり、カンザスシティのコミュニティ研究に従事した。アカデミック・ポジションを獲得したヨーロッパ人の中には、ハンス・ガースとアルフレッド・シュッツがいた。

上記のものが最良の大学に補充されたことによって引き起こされたひとつの問題は、社会学の理論的、方法論的伝統の脆弱さであった。社会学の最初の学位が贈られて50年も経つのに、素人が社会学の中心ポジションにつくなんてことがどうして起こりえたのか。この質問はみかけよりはるかに複雑であり、他の問題を考慮することによってのみ答えることができるものである。主要な社会学科の大半は中西部ないしは南部にあったという事実がひとつの中心的理由である。戦間期及び程度は下がるがその後も、アイヴィーリーグ大学の教員は、

<sup>1</sup> マキーバー自身はギデングスが退職後コロンビアのチェアマンに就任した非社会学者であった。彼はコロンビア大学出身者で、彼がプロジェクトの多くの評価を行ったニューヨーク慈善事業家の厚い信頼を受けていた。彼はソローキン、エルウッドのような方法論に異議を唱える者と心を通わしていたが、親密な仲ではなかった。彼の『社会的因果性（1942）』は従来の社会学方法論の背後にある科学哲学、特にギデングスとその弟子のピアソン主義に批判的な文献である。

\*（訳注）ホームズの採用は1946年でヘンダーソンは1941年に死去しており、著者達の記述は明らかに間違っている。Nichols（2006）によるとマートンを推すパーソンズが仲の悪いソローキン、ツインマーマンのタッグに押し切られたのが真相である。

社会的に適切なアカデミック制度を少なくともくぐり抜けた経験のない中西部人、西部人、南部人には実質的には通じなかったのである。上記の制度のスノビズムは特定の形態を取った。非公式な割当制によって依然規制されていた外国人やユダヤ人は、州立大の卒業生よりも上記の大学の地位に熱心なリーダー達にとっては脅威にならなかった<sup>2</sup>。結果として彼らは他のリージョンの内部出身者より得をしたのである。

リサーチの観点では、資金給付の戦後の拡張は社会学者の供給と大きなチーム運用の研究者の需要にラグを作り出した。この時期に周辺から社会学の中央に上昇した人物のほとんどすべては有意義な資金給付を受けたりサーチに基づいてそれを行った。資金給付の雰囲気の本質は変化のストーリーの主要部分である。尋常でない需要状況の結果は、衝撃的なもので、これまで築かれてきたアカデミックな伝統、特に1930年代の社会学を依然支配していた改革精神を破壊するものであった。

#### 財団と新しいアカデミック・ヒエラルキー

戦後直後の財団と社会学的専門職のもちつもたれつとの関係は、1930年代初期に存在したそれと全く似ていない。社会学そのものの状況と全く別に、上記の新しい関係はアメリカのアカデミック・ヒエラルキーにおける大学の格付けに重要な影響を及ぼした。変化の両過程は戦前にルーツを持つが、変化がいつ始まったか正確に日付を記すことはできない。コロンビアとハーヴァードは戦後期の財団による新しい資金給付の主要な受益者であった。ハーヴァードは全国の政治エリートとボストンの名門出身者のカレッジから、アカデミックな大学で最良の院生を競う野心的な総合大学に変貌した。

アイヴィーリーグの変貌は今日でもまだ完了していない複雑なストーリーである。19世紀末までにジョンズホプキンス、コロンビア、シカゴ大学で確立された大学院支配のモデルが、学部生の養成を主要な使命と見なしていたアイヴィーリーグの諸大学によってもゆっくりと採用されつつあった。そのうえ彼らは、教授はすでに裕福であるはず、裕福でない者も彼らの就任の威信をふさわしい裕福な花嫁との結婚で変換するはずという前提に立ってしばしば薄給であった。1920年代、1930年代のハーヴァードはまだ部分的にアカデミックな基準だけでなく社会的な基準によって支配されていた。つまり出版は尊敬されるには重要ではなく、戦間期の社会学の学術出版物の主要な乗り物は「二流の名誉」とみなされた。ハーヴァードを変貌させた変化のルーツは世紀の変わり目に学長を務めたチャールズ・エリオット(Charles Eliot)であった。資金給付は変化し、大学の財政部分にとって重要であった。1920

<sup>2</sup> マキーバー、ソローキンは外国人であったし、テオドール・アベルはポーランド人、マートンはユダヤ人ということが上記の教員が要求した都会イメージを培った。

年代まで、ハーヴァード大学はハーヴァードの校友と卒業生が代表するニューヨーク・クラブサークルから出る財団資金に大いに親密な関係を示していた。産業労働者の危険(industrial Hazards)に関するロックフェラー・グラントによって大いに資金給付を受けるようになった1930年代半ば以降のハーヴァードの変貌は、ハーヴァードの社会学に、究極的には社会学部門の全国的格付けに影響を及ぼし始めた。

州立大学には(戦前と戦後で)より大きな連続性が見られた。1930年代半ばのトップ5の社会学部門の2つは、中西部の州立大学、ウィスコンシン大学とミネソタ大学であった。ギデングスの弟子によって席卷されたミネソタは、大恐慌の削減に比較的影響を受けない農村社会学のリーダーシップなるものを産出していた。チェイピンの弟子の間では、T. リン・スミス(Lynn Smith)、チャールズ・ライブリー(Charles Lively)、B.O. ウィリアムズがおり、彼らはルイジアナ州立、フロリダ、オハイオ州立、ミズウリ、ジョージアの学部長を務め、統計が得意な社会学者を採用した。しかし戦後期の変化はこれらの学部(その幾つかは合衆国最大の州に属していた)を地区で重要な、あるいは第2、第3位のドクタープログラムに格下げした。戦後期、これらの学部は新制のPh. Dの多くを吸収拡張したが、相対的に見て威信の点では低下した。

別の資金給付を受け、大学全体とは別な関係を持つユニットに組織された農村社会学は、1936年に雑誌*Rural Sociology*を創刊して以後、社会学の他の部門から自ら分離した。1930年代の農村研究の支援の源泉は社会学の他の部門ほど迅速には拡張せず、今や時代遅れのパトネジ乗り物の観点から活動していた。つまり特別な訓練を受けた研究人員による大きなスタッフを必要としない小プロジェクト。その上政治的には常に弱体な農学部社会調査活動は戦後直後攻撃にさらされた。

1930年代に農業研究ステーション・システム下に存在したグラントシステム、より正確には研究支援はワールド・サイエンスでは馴染みのモデルであった。ステーションは実際は研究トピックを選択する大いなる自律性を持つ広く実用的な目的に奉仕する研究施設であった。そこには利用できる限られた資源(資金)とその配分を支配するサーヴィス倫理の制約があった。そこにはこれらの研究施設の資金源(部分的に連邦政府と州政府)という政治的制約もあった。この種の研究施設では社会学は補助的役割を担い、しばしば研究ステーションのねらいに非常に密接に結びつくことによって、そして彼らの資金給付の政治的現実を尊重することによって自分たちの価値を証明しなければならないと感じていた。上記の無形の制約は時折非常にシビアであった。自然科学では、この研究施設支配のモデルは大いに批判された。特に科学への戦後の資金給付がとる形態をめぐる交渉の期間中は。科学者によってなされた議論は、民間財団の実践の中で成長してきた研究提案システム(research proposal

system) は巨大な州の研究施設よりも研究者の創造性と学問の自由の保持に向いているというものであった。

もちろん財団との関係は制約のあるものだった、ただし多様なあまりルーチン化されない仕方だ。農村社会学者が彼らの研究のメリットに関して政治に過敏な農学部長、実験ステーションの所長を説得しなければならないところでは、グラントの種類は社会学者が財団事務官に研究を支援するよう説得することを要求した。だがこの厄介なタスクはさまざまな新しい環境によって緩和された。それは、パトロンと社会学者双方が価値を見いだす研究モデルから次第に生まれてきたものであった。時間がたつにつれて、似た精神を持った財団事務官と社会学者の共同体が生まれた。

アカデミックな社会科学において有力な勢力としての財団登場のストーリーは複雑であり、代替解釈を許すものである。我々が見てきたように、ロックフェラー財団と社会科学との初期の関係は、自分たちに期待されているものを謎解きしなければならなかった社会学者にとっては、押しつけがましく高圧的なものであった。ニューヨーク財団のような大きな財団職員として働いたことのある、社会学者の「端くれ」でもあるビアズレイ・ルムル (Bearsley Ruml) のような人物がロックフェラー仲介者の役割を果たすようになって、関係の性格はがらりと変わった。財団を相続した億万長者と直接つながっていた人物の死後まもなく、この種の仕事はそれ自身のヒエラルキーと、業績の種類、競争の強制を持つキャリアとなった。カーネギーのような小さな財団は、それが支援する仕事の斬新性を自慢し、そうするためにプロジェクトを束ね、プロジェクトを遂行できる候補者を集める能力を持つ人物を雇う必要があった。1920年代のシンプルマインドな目標では十分でなくなり、今では財団事務官の評判をとるのは組織化の成功であった。また評判を落とすものは、財団を公衆の当惑と批判にさらすことに給付資金を使うことであった。SSRC 社会科学<sup>リサーチ</sup>研究協議会のような組織や専門人の登場は、財団を歓迎せざる規制、批判、政治の吟味から守るという重要な目的に奉仕した。長年カーネギー・コーポレーションの代表であったフレデリック・ケッペル (Frederick Keppel) は彼らを「緩衝」と呼んだ。

財団事務官として成功するためには、達成されるものと達成する人物をかぎ分ける能力が要求される。社会調査の場合には、成功には SSRC の活動の周りに発展した「エスタブリッシュメント」との親密な個人的な関係が必要である。裁量、良き判断、健全な助言を手に入れる適切な範囲の個人接触が財団事務官の善良な仕事にとって肝心なものである。同じ特性は、ハーヴァードやコロンビアのような慈善寄付に依存した経営や大学にとっても重要である。結果として大学と慈善組織の間の人事交流がしばしば見られた。ロバート・リンドはそれぞれの組織で働いた経験を持つ。ロックフェラーの人間であるビアズレイ・ルムルはシカ

ゴ大学の学長になった。1940年代、上記の種類の交流は増大した。特にハーヴァード大学とニューヨーク財団の間で。大酒飲みで、財団やSSRCにも友人にも遠慮のない、学問とは大体において距離を置いているサミュエル・スタウファーのような社会学者が慈善コミュニティにとって主要な「インフォーマント」になった。上記の「ブローカー」の役割は新興のパトロネジ・システムにとって重要であった。1940年代の財団世界の競争の性格はかつての財団活動のゆったりしたペースに取って代わった。そのうえ社会科学のグラントを受ける候補者は比較可能な他の財団や政府、企業という代替的資金源を持つことになった。

上記の機関での個々の研究プロジェクトに資金を与える決定は高度にパーソナルであって、公式のピア審査のような系統的なメカニズムはこの機関によっては採用されず、結果として機関の新興ビュロクラートとアカデミックないしサーベイリサーチ研究所の請負人との間に強い個人的な絆が生まれることになった。この絆は今度は研究アイデアが発展するのを許し、彼らの研究資金が社会的研究者の吟味とビュロクラートの最小限の難癖では認められることを許すことになった。

プロジェクト・グラントのコンセプトは1930年代の産物である。つまり1920年代のロックフェラーの慣行が大学内のコミッテーターや研究所職員の裁量で分配される不特定の研究やビル建物のような資本の改善に比較的制約のないグラントを与えた。対照的に、プロジェクト・グラントの使用は財団の手に権力を戻し、財団のためにより多くのスタッフとより大きな卓越した技能や知識を要求することとなった。その方法は1930年代半ばにロックフェラー財団の実験生物学グラント・プログラムの長であったウォレン・ウィーバー（Warren Weaver）によって初めて用いられた。社会科学はそれに10年遅れて追随した。『アメリカンジレンマ（Myrdal 1962）』のアイデアは一部はプロジェクト・グラント、一部はコミッション（委託）であった。それはアカデミクスを使用した大学にベースをおかなかった。研究のディレクターで報告書の執筆者であったグンナー・ミュルダールはカーネギー・コーポレーションによって選ばれ、コーポレーションは大学に代わるサポートと管理監督業務の多くを与えた。

慈善共同体内にはプロジェクトシステムの効果に関してかなりの意見の不一致が見られた。1940年代の後半の経験のあとで、多額のお金がアカデミクスと財団事務官のごく小さな共同体に給付される危険性の存在が認識された。財団への新規参入者のなかで最大のフォード財団はそれを次のように観察した。

財団に対するプロジェクトを引き受ける大学教授は、財団事務官、大学の管理者、財団事務官がその助言に耳を傾ける専門的学会、研究カウンスルの仲間との連続的交渉の網の中に捕らえられている。要するに彼は一種のアカデミック政治に巻き込まれ、教育

研究調査の実施の代わりに、次年度のグラントのためのキャンペーンに多大な時間を費やしているのである (Ford Foundation 1949: 109-110)。

学者生活の性格はかくして劇的に変化する。専門職仲間の明示的で頻繁に確認されねばならない是認への依存が学者の競争の新しい条件となる。しばらくすると競争は貴重な接触を持つ仲介者と資金給付の代替源泉を持つが、自分自身の好意的待遇と引き替えに、他者のプロジェクトの審査を進んで交わす研究者の手を強化するのである。財団のねらいを遂行する個人の能力に関する情報と判断の交換にかなり基礎をおいた友好関係のネットワークが社会科学のエスタブリッシュメントのメンバーと財団事務官の間に生まれた。

戦後期に上記のつながりは戦時中に威信が高まった「基礎的」社会科学の支援で活躍した。1920年代と1930年代の研究資金の混合モデルからの進化はゆっくりではあったが、決して完成しなかったが、変化は劇的であった。研究のスポンサーの数は増え、その結果ロックフェラースタッフによる事実上の独占は消滅した<sup>3</sup>。上記の状態はほんの短い期間だけ、おそらく第二次世界大戦後の5年間だけ続いた。財団事務官と比較的若い野心的な社会学者達の共同体は、大きな共通の任務の共有感覚のゆえと、幾つかの財団が進んでこれらのビジョンに財政援助したので、この期間に成功の果実を得た。しかしながらこの時期には、権力はかなり中途半端に分配された。財団事務官は信頼を置く社会科学者の個人的助言に依存したけれども、彼らは非常に権力を持つ人物であり、グラントを受け取る者とグラントが与えられるべき条件に関して非常に個人的判断を下すことができた。ある有名な事例のなかで、財団事務官は H. スチュアート・ヒューズをハーヴァード大学ロシア研究センターの長として政治的に容認できないと声明を出した。タルコット・パーソンズもそのセンターの理事の一員であったハーヴァード大学の理事会はそれに従った。他の事例では、財団は管理者の任命の提案の受け入れに関して指導的な東部大学理事達による相談に静かに応じた。財団のリーダーシップは「小売り慈善事業」としてネガティブに特徴づけられるものに従事することには気が進まなかったが、研究プロジェクトの提案を査定する際、指導的社会学者とアカデミックの管理者との個人的なつながりに依拠せざるを得なかった。

このシステムは当初は大規模な私立大学にだけ恩恵を与えた。公立の大学は資金に与ることができず、試練に反応できるだけ十分に意思決定することができなかったが、自然科学の

<sup>3</sup> 戦後期の SSRC アピールのパーソンズの草稿への注釈の中で、サミュエル・クラスナー (1986: 5) は SSRC のアカデミック・リーダーが資金給付源泉の「多様性」に記している神秘的重要性に意見を述べている。ロックフェラーの分配係との彼らの体験に照らしてみると、これはほとんど驚くほどの内容ではなく、後続した多様性の解放効果は正しい。クラスナーが指摘するように、パーソンズはそのような多元的見解を保有していなかったことが指摘できよう。

グラント給付のパターンが十分に確立されたときになってようやく、彼らもそれができるようになった。シカゴ、ハーヴァード、コロンビアは最も競争のできる大学となった。社会学部門を持たないあるいはもっと慎ましい学部しか持たないアイヴィーリーグ大学のような似たアドバンテージを持つ他の大学は、旧来の学科にとって重要な競争相手となるかまたは社会調査を遂行する研究所を新たに創設した。従来の研究形態の登場は1950年代半ばまでにアドバンテージを食い尽くし、1960年代の経験的調査のめざましい簇生に舞台を譲った。しかしながら、このリサーチは、幾つかの重要な点で財団の「共同体」とは対照的な仕方です資金給付がなされた。ピア審査のシステムの下で連邦政府機関が次第に活躍するようになり、支配はアカデミックスの手に移ることになった。その上、政府資金給付源泉の多様化は、学問内のさまざまな学閥が資金給付ホームを見つけ出すことを可能にした。

### 過渡的な組織形態

起こった変化を理解するには、社会学における「パトロネジ乗り物」の簡単な歴史に触れる必要がある。1860年代以降、問題を研究し診断し、解決策を提案する委員会というアイデアが社会学者が関わる研究のための中心的パトロネジ乗り物であった。標準的形態は次の通りであった。公開討論で同定されたある「問題」が公的か私的な研究団体（some investigative authority or body）に付託された。戦時中に行われたアメリカのジレンマ研究はある意味でこの古いタイプのプロジェクトの最後のものではあった。その歴史は社会学者と財団の関係の変化に我々を釘付けにするために用いられる。プロジェクトは、ある基礎的社会問題の研究に、若きアーノルド・ローズ、エドワード・シルズ、どこにでも姿を現すスタウファーのような幾人かの社会学者を雇った。それは農村社会学者にとってタブーであった問題のひとつであった。それは合衆国農務省の社会調査を急がせ、社会科学が米国科学財団（NSF）に加わる障害として働いていた。アメリカのジレンマ研究はアカデミックスによってでなく、アカデミックスにそれを行ってほしいと思う財団事務官によって考えられたものであった。もちろんこのときまで財団事務官が意見を聴くことのできる著名な助言者のネットワークが存在した。この場合彼らは意見を聴かれたが、彼らが尋ねられたことによって決して縛られることはなかった。コーポレーションはロックフェラー財団ほどリッチではなく、発展の途上にあつた。年長の事務官の一部は寄付者の本来の意図に関して権威じみた発言をしたが、この数は次第に少なくなった。結果として目的をめぐる内部の対立は新しい事務官の大きなイニシアティブで解決することができた。この新しい事務官は自分自身の慈善的アジェンダを設定し始め、慈善的アジェンダに合致するスタッフを雇い、プロジェクトのためのアイデアとグラント申請者の長所に関して比較的没利害的助言を与える、信頼が置けるアカデ

ミックスと信頼の絆を作り出した。

研究の背後にあるアイデアは財団の管財人ニュートン・ベーカー (Newton Baker) であった。彼はクリーブランドの前市長であり、ウッドロー・ウィルソン政権下で戦争長官 (secretary of war) であった。ここに社会的つながりが例証的である。フレデリック・ケッペル (Frederick Keppel) はコロンビア大学の男子の学部であるコロンビアカレッジの学長を歴任し、戦争長官ベーカーの副官として仕えたことがあり、1923年以來カーネギー・コーポレーションの会長を歴任した。フレデリック・ケッペル二世は第二次世界大戦中、フレデリック・オズボーン将軍の副官として仕え、ハーヴァード大学の理事となった。このコーポレーションは伝統的に黒人のカレッジを支援してきていたが、ケッペルとベーカーはもっと劇的な何かをしたいと望んでおり、人種問題の包括的研究というベーカーのアイデアはケッペルの心を捕らえた。彼らはこの課題に取り組みそうなアメリカの学者を想像してみたが、「黒人も白人もアメリカ人はともにあまりに多くの偏見を持っており、客観的で新鮮な研究ができない (Southern 1987: 4)」と結論し、帝国主義的利害を持たないヨーロッパ出身の学者で、合衆国に暮らしたことがあり、1929-30年のロックフェラー・フェローシップの経歴の持ち主グンナー・ミュルダールに白羽の矢を立てた。ミュルダールは渋ったが、ミュルダールを先に合衆国に招聘したプログラムの代表であったピアズレイ・ルムルがスウェーデンのミュルダールの元を訪れ、受諾するように説得した。ミュルダールの要求した代価は高かったが、研究そのものには非常に気前よく研究資金を融資した。

ミュルダールの選抜に対してアメリカの学者の間には不満があった。というのは、ミュルダールの見解は基本的態度の相対的な不変性 (不易性) を強調し、これらの態度に直面しての「社会学」の跋扈を拒絶する人種関係の主流とは異なっていたからである。当時の態度研究者やハーバート・ブルマーの新しい社会心理学は「行為に対する伝統的な価値の影響の相対的な欠如を力説し、社会行動の規定因子は個人がその中に自分を見いだす集団環境の潜在的に操作可能な特徴である」と述べた。態度の融通性への信念は彼らの研究のひとつの公認のものであり、態度に関心を払うサーベイ調査は行為に対する可変的な態度のアイデアに依拠していた。かくしてミュルダールの著書は人種関係の伝統に対するあからさまな敵対にも拘わらず、潜在的に受容するオーディエンスを持った。そのうえミュルダールは個別のトピックに関してレポートするようにアメリカの年少の社会学者の多くに協力を求めた。彼は年長の社会学者とも同じ意図を持って待遇した。報告書は数十の社会学者から提出され、カーネギー・コーポレーションは彼らとそのアメリカ人「研究助手」に十分な謝礼を払った。

研究の執筆形態は過渡的なものであった。研究のスポンサーであるカーネギー・コーポレーションの主要なねらいである編集と「アメリカ人民衆の合理主義的平等主義的理想と黒人に

関わる態度の実際間のジレンマ」というテーマを追跡する分析研究の混合がそれである。研究には、南部の黒人の状況の歴史、経済学的分析、人口統計学的分析、制度的分析が含まれた。議論の要諦は態度に関するものであった。ミュルダールは1930年代に発達した人種態度の計量的文献に気づいていたし、質問紙データの価値を否定しなかった。しかしながら、本書の大半は実際に実在したものとしての南部の人種イデオロギーの理念構造の非公式な分析である。実際ミュルダールは差別（「態度の客観構造」）の概念に賛成して「態度」と「偏見」のタームの使用を回避した。ミュルダールが自由に理論的革新を行ったと感じ、さまざまな方法を用いたと感じた度合いは、アメリカユダヤコミッテエによってスポンサーされた反ユダヤ主義の同時代研究（『権威主義的性格（1950）』の題の下に出版された）にも等しく現れている。

射程範囲の広いソフトな方法の研究が次の数年間財団によって支援された。但しこれらの資金はある基準を満たす学者にのみ利用できるものであった。つまりそのプロジェクトはニューヨーク財団コミュニティと社交的つながりがあり、財団事務官指名の有能な個人リストに掲載されている人物によって指導されているプロジェクトに限定されていた。司法修習を受けた弁護士であり、かつては法学部の教授であったデヴィッド・リースマンはこのシステムの一人の主要な受益者であった。リースマンの『孤独な群衆（1950）』は、編集するねらいと非公式な印象主義的手法の混合であるカーネギー・プロジェクトのもう一つの成果であった。しかし財団事務官と指導的社会科学者の共同体は上記の著作の長所に関して意見が分かれた。SSRCによって支援された社会学者と行動科学者の多くはこの種の成果に積極的に敵対した。

1950年代に入って、ミュルダール、リースマンによってなされたタイプの財団支援のリサーチは重要性が低下し、サーベイリサーチと計量的に定位した社会心理学リサーチが重要性を増した。サーベイは多様な目的とパトロンに仕えることができる新しいタイプのパトロネジ乗り物であった。古典的なサーベイリサーチはコロンビア大学応用社会研究所（BASR）のラザースフェルドによって行われたそれであったが、彼のプロジェクトのパトロネジ構造は例外的なものであった。ラザースフェルドはロックフェラー・フェローとして合衆国にやってくる以前にオーストリアで沢山の心理学タイプのサーベイリサーチ研究を行っていた訓練を積んだ数学者であった。ロックフェラー・フェローは1930年代にヨーロッパの難民のアメリカでのアカデミックキャリアを開始するプログラムであった。彼が合衆国に留まる決意をしたとき、1920年代に非アカデミックな、主として心理学的研究形態として急速に発達していた市場調査（マーケットリサーチ）を行い続けた。ラジオ聴取パターンを研究するために1935年にプリンストン大学に大きなグラントが与えられたとき、ラザースフェルドはプ

プロジェクトの指導者として従事した。

ラザースフェルドは彼が研究資金を見つけることができたサーベイプロジェクトを実施するために BASR を創設した。彼は最初、一人の野心的な学長を持つニューアーク大学と提携を結んだ。1941 年に彼は研究所をコロンビア大学に移し、新しい取り決めを結んだ。その取り決めは斬新なもので、ラザースフェルドはのちに至る所で模倣された研究所の組織的側面を彼の最大の業績のひとつと見なした。プロジェクトそのものは 1940 年代 50 年代の研究の全盛期にかなり特有のものであった。プロジェクトの範例的な種類のもは、一部の企業の個別関心事に合わせた高度に実用的目的を持つサーベイであった。それはラザースフェルドが同時にアカデミックな研究プロジェクトが行えるように、物質的ヘルパーと有能なヘルパーをあてがうことができるほどの、十分な額の資金が追加された。これはある意味では斬新なアプローチであった。社会宗教研究所 (ISRR) のそれとよく似たこの仕事はアカデミック (社会学的) であると同時に、パトロンの実用的な目的にも奉仕するように設計された。ラザースフェルドは 2 つを分離した。パトロンのために報告書を生産し、アカデミックな聴衆のためには、著作を産出した。著作は典型的には研究所の所員であった参加者数人と共著の形をとった。彼の弟子は彼の指導下でデータ分析する博士論文を産出した。

この戦略はじきに消滅する高度に個別的な歴史条件の下でのみ可能であった。アカデミックな著作を著すのに必要な資金は実際には過剰価格をつけたサーベイプロジェクトをスポンサーに売り込むラザースフェルドの能力にかかっていた。非アカデミックな競争相手がラザースフェルドに支払わねばならなかった価格を切り下げできるまでサーベイリサーチビジネスが進歩するやいなや、この種のプロジェクトはもはや市場化できなくなった。そのうえそれがその最盛期の間、資金給付はラザースフェルドが契約を結びアイデアを売り込む能力と資金給付の企業源泉に彼が近いことに依存していた。CBS のフランク・スタントン (Frank Stanton) との彼の長いつきあいと広告ビジネスのリサーチサイドとの彼の密な結びつきが彼の成功にとって重要であった。ラザースフェルドの行ったのは企業リーダーとの昼食会のトークを交わすことであった。これは無限の機会が存在する活動であった。聴衆の一人が彼自身の会社で起こった似た問題で彼に意見を述べたときに、ラザースフェルドは彼との昼食を用意し、それを研究するためのリサーチプロジェクトに資金を出すように彼を説得に努めた。

ほとんど他者にはまねができないけれどもこの戦略は大いに成功を収めた。ラザースフェルドはリサーチ、アイデアの思いつき、組織、セールスマンシップというすべて他者にはまねできない才能を併せ持っていた (Sills 1987; Barton 1982)。いずれにせよ、他の社会学者も企業の仕事を行う機会を持っても、ラザースフェルドのように企業権力の中核近くに位置

した者はほとんどいない。しかしこの形で BASR システムは繁栄することはできなかった。例えば、それはかつて BASR のディレクターであったチャールズ・グロック (Charles Glock) の下のカリフォルニア大学で再生産された。しかしグロックのユニット、1950 年代、1960 年代に多くの州が設立したユニットは大体において商業ワークによってでなく、連邦政府のグラントによって支援された。ラザースフェルドは次第に商業ワークはあまりにトラブルが多すぎると決断し、ほとんどもっぱら連邦政府のグラントに切り替えた。1950 年代末までは、上記のユニットのすべておよびアカデミックな社会学部の個々の社会学者は連邦政府のグラントを求めて競い合った。

この時期に他に 2 つのサーベイリサーチ組織が設立された。戦争は士気に関する 3 つの政府関連のサーベイユニットの起源であった。それぞれはやや異なった方法スタイルを取り、方法に関して競い合うものと見なしていた。ひとつは合衆国軍隊の士気部門の調査ブランチ、サミュエル・スタウファーの指揮下で、ニューヨーク財団内部者フレデリック・オズボーンが監督であった。もう一つは戦時情報局のサーベイ部門で、世論調査員エルモ・ウィルソンに指揮されていた。第三のものは農務省プログラムサーベイで、心理学者でのちに指導的な組織思想家になったレニシス・リッカートに指揮された。士気は全国的な根本問題と理解された。第一次世界大戦はヨーロッパの戦争に参加するメリットに深い落胆を残した。合衆国を関与させたいという願望を共有するヨーロッパ中央のエリートとともに、ルーズベルト大統領は戦争に参加することへの民衆の支持確保と民衆の支持水準の査定に熱心であった。これは鋭い世代分裂に導いた。反帝国主義はアメリカ社会学の最も深く根ざした政治的伝統であった。年長世代の多くの社会学者、社会学者はアメリカの参戦に反対し、合衆国のために拡張された世界役割に不可避免的に後続するものと信じる保護国家となることを恐れた。チャールズ・エルウッドは徴兵反対者であったし、ジョージ・ランドバーク、ハリー・エルマー・バーンズ、チャールズ・ピアードは戦後の介入主義ムードと合衆国の介入主義世界役割の双方に声を出して批判した。W.F. オグバーン、エルスワース・ファリス、その他第一次世界大戦とその後の体験によって態度を形成した人々は上記の見解に共感を示した。

社会学の新しいエスタブリッシュメントは少しもそれを共有しなかった。スタウファーの軍隊での役割は有名だし、T. パーソンズは国際情勢を研究し始め、ヨーロッパの戦争に介入するインプリケーションを検討し始めたハーヴァード教員グループの初期のメンバーで、それへの優れた知的な貢献者として働いた (Buxton/Turner 1990)。パーソンズはサーベイ調査者同様、自己の仕事を士気の問題にくっつけようとした (Converse 1987: 160; Buxton 1985)。戦争の末年に新しい問題 (原爆投下の敵の士気に及ぼす影響) がサーベイ分析にかけられた。上記のプロジェクトの各々はその後長年にわたって参加者に重要なパーソナル

ネットワークを作り出した。上記のネットワークは社会心理学、人口統計学、統計学、「文化とパーソナリティ」の重なる領域に中心をおいていた。

戦時のサーベイ者が設立した私的なサーベイ組織にはミシガン大学の社会調査研究所 (ISR) も含まれていた。当時デンバーにあった全国世論調査センター (NORC) は戦時中ウィルソンの戦時情報局と契約しサーベイ調査を行ったが、1948年に活動を広げ、シカゴ大学と公式関係を形成してシカゴに移った (Converse 1987: 173-74)。スタウファーはハーヴァード大学に小さな社会関係実験室を設立したが、大規模データの収集には NORC のような他の組織を使用した。戦時努力の他のベテランはアカデミック部門に戻り、彼ら自身の部署で (ひとつの重要な事例では農業研究ステーションシステムで) 学際的なアイデアを追跡した。学部は大規模なサーベイを行う準備がなかったのでその始まりは小規模であった。しかしのちに述べる理由で、上記のものが 1960 年代に支配的となり現在の経験社会学の典型となる調査様式の始まりであった。

ウィリアム・セウエルがウィスコンシン大学でプロジェクトを始めた当時は、社会調査のための大学の研究資金はほとんどなかった。社会科学調査が研究のために大学内で利用できる資金給付の正当な受益者として扱われるようになったのは、大学内の数年にわたる内部政治の結果であった。連邦政府の資金は当初はほとんど皆無に等しかった。1944年の苦い選挙の間、政治的世論調査への議会の批判の結果、政府のサーベイ活動は閉鎖された (Converse 1987: 207-211.)。しかし 1940 年代後半からサーベイ活動と社会科学リサーチ一般は他の連邦政府機関 NIH (国立衛生研究所)、NIMH (国立精神衛生研究所) において復活した。社会科学は NSF から当初は排除されたが、次第にそこでも承認を勝ち得ていった。

そのキャリアが戦時マネーの巨大な注入によって膨らんだサーベイ調査者は、学問としての社会学の個別戦略の提唱者であった彼らはその最も有力な解説者となり、3つの基本要素を具体化する一連のプログラムテキストで彼らの構想を定式化した。社会学を科学に転換するという課題のための特に喫緊のアドボカシー、社会学改革の推進、社会学のための新しい目標の描写。これらのプログラムテキストの主たるねらいは、フィールドのはるかなる理論的目標でなく、研究者の身近な目標達成のための実際的条件と方法、特に測定技法改善のためのプログラムに置かれた。社会学の理論的目標の主題にはほとんど意見の一致がなかったのに、これには沢山の同意が見られた。方法論プログラムと社会学の制度改革は上記の戦略の中心でも著述の中でも分離しがたいものであった。各々は複雑な変貌を伴った。

### その 1：測定の戦略的中心性

この時代の社会調査参加者の興奮の大半は、戦時の努力がそれ以前の時代とのラディカル

な分断をなしたという彼らの感覚を反映している。特にラザースフェルドはこの考えを助長し、ある重要な意味で彼は間違っていなかった。つまり 1940 年代にラザースフェルドによって遂行された類の調査は従来型社会学のものではなく、むしろその理論を「民俗心理学 (folk psychology)」に、オグバーン世代によって気に入られた相関、回帰技法よりも応用心理学から借用した統計技法や、投票行動リサーチ、市場リサーチから借用した質問紙法に依拠した一種の個人主義的分析であった。人がこの仕事をアカデミックなタームで特徴づけたいなら、「社会学に（あるいは人口統計学に）精通した応用心理学」と呼称するのがふさわしいだろう。社会学的要素は質問紙における標準的人口統計情報と階級の代理尺度の使用である。それは、オグバーンと彼の仲間が行動指標を最良して一般的に毛嫌いだした考えである、態度、発話の分析に関心を払うものだった。ラザースフェルド自身の場合は、一種の市場調査からスタートした。それは、誰かが何かをしたのはなぜかを尋ねる質問のためにウィーンで開発した「理由分析」であった。合衆国での彼の初期の研究はこのタイプのものであったが、1940 年代までに力点は態度測定に移り、彼はのちにサンプリング、態度測定等の過剰な重視だったと振り返っている (PFLW<sup>4</sup>: 71)。

この過剰な重視は、社会学史において、スタウファーがゾーンダイクの方法を応用しようとしたり、チェイピンがオルポートのアイデアに順応しようと必死になった先例を持つ。1940 年代までチェイピンの弟子、ルイス・ガットマン、スタウファー、リッカートからなる集団内で強い競争力学が発達していた。新しいアイデアが上記の研究者を雇っていた潤沢な資金のある大規模な戦時サーベイリサーチ・ユニットによって即座に実施に移され、実践は急速に変わった。これらの変化が来たるべきブレーク・スルーを予兆し、社会学を科学にする途が測定の改良を通じてであったと結論したのは当然であった。

RAND コーポレーションからスタウファーへの主要な戦後グラントの源泉であった測定への集中は、彼の公衆向けのプログラム声明、彼のグラント主への申請と報告にとって中心的なものであった。上記のさまざまな声明の基本テーゼは医学の発達というお気に入りのアナロジーに含まれている。

医学の歴史の研究が寒暖計や顕微鏡の用具の発明にかかっていたように、新しい社会調査は一部の人が申し訳なさそうに便利な用具と呼ぶものにかかっているし、益々そうなるだろう。質問紙ないし態度テストは便利な用具である (Stouffer, Reply to Bridgeman 1948, SAS: 6)。

<sup>4</sup> コロンビア大学オーラル・ヒストリー・オフィスのアーカイブス、ラザースフェルドより

スタウファーは便利な用具の起源は社会学でなく市場調査にあることを進んで認めたが、この用具の社会学に個別目的のための使用と改良は社会学の目下最善の戦略であると信じていた。

クライアントの要求によってでなく、技術開発の内的要請によってもたらされたものとラザースフェルドがのちに主張したこの「重視」は沢山の影響をもたらした。非理論的実験的伝統に基づく社会心理学的思考の注入は、社会学的問題の凝集性を浸食するのを助けた。さらにクライアントのニーズは多くのリサーチの方向を指図した<sup>5</sup>。方法自体の精密化はそのユーザーに社会学的传统に、きつと理論に根ざさないアドホックな仮説を用いることを要求し鼓舞した。

スタウファーは良き社会学の一種のパラダイムとしてのロバート・パークの社会的エリアのアイデアの影響下でクリフォード・ショーとヘンリー・マッケイによって行われた非行の成果について考え続けた事実にも拘わらず、彼の仕事はこの変化を反映していた（Stouffer 1950: 359）。ラザースフェルドは、「社会学的問題」は何かというこの暗黙の感覚を共有しなかったし、社会学を厳密なものにするという目標への彼の忠誠心はこの伝統に彼を縛り付けなかった。じつはラザースフェルドにとって、究極的には彼が訓練した社会調査者の多くにとって、経験的作業の領分は、それ自身のルールと理論的学問としての社会学のいかなる個別のビジョンにも左右されない戦略を持つ独自の領分であった。ラザースフェルド自身は主題の極端な複雑性の故に、理論社会学がリーズナブルな目標であるとは信じなかった。せいぜい一種の心理学が自分が行ったサーベイ分析に基づいて構築されるかも知れないと考えていた。自分の仕事の非社会学的性格の任務を自分に背負させたハーバート・ブルマーのような批判者は、ラザースフェルドには理解不能であろう。というのはラザースフェルドは諸個人についての質問紙研究を経験研究の出発地点として役立つ一種の社会調査とみなしていたからである。

## その2：学問改革の必要性

大規模なサーベイとのつながりで発達した技法は何よりもテクニシャンを必要とした。技法に長けた社会学者の訓練が社会学を改良する努力の中でこのコミュニティの戦略上の焦点

<sup>5</sup> BASR その他のアカデミックな色彩を持つサーベイリサーチ・ユニットがクライアントの要求と折り合うという問題に失敗したのは、このリサーチ参加者によっても強く感じられた。財団事務官とアカデミックスが社会学のためのアジェンダ、さまざまな問題と方法の重要性で一致していた比較的少数のケースでは、対立はさほどシビアではなかった。かくしてこの時期の製品とグラントはのちの研究がたとえもっと資金給付が潤沢であっても到達するのが容易でない業績の絶頂であった。というのは彼らは学問の広がりの中で内部に生じたイシューに関心のあるアカデミックな聴衆、限られた意味しか持たないトピックに関心のあるアカデミックな聴衆と次第に区分された聴衆を相手にしなければならなくなったからである。

となった。社会科学リサーチ<sup>カウシ</sup>協議会（SSRC）は社会科学に惹きつけられた学生が理系や工学の学生に比べて才能が乏しいという知覚に反応して、社会科学者の教育と補充に関する報告書を委託した。SSRC 事務官エルドリッジ・シブレー（Eldridge Siveley）による報告書は、社会科学に惹かれる最良の学生の比率はリーズナブルだが、理系に比べると社会科学学生の人数の多いことが学生数に対する教員数の芳しくない比率を作り出している<sup>と指摘した</sup>。そのうえ社会科学の学生の大多数は大学院レベルでさえ、研究者よりも実務家を志向している（Young 1948 : 326）。これらの学生は簡単には転身させられないので、適切な訓練が施されるべき真の研究志向学生からは分離されるべきことが認識された。残念なことに最良の大学においてさえ、研究トレーニングが十分に与えられていないことを報告書は指摘した。SSRC は 1950 年代を通じて方法論のトレーニング資料を準備し、社会科学系の学部学生への数学訓練の増加を促し、計量法の上級訓練の機会を提供する委員会を創設することによってこの欠陥を修復しようとした。さらに社会科学の専門学会の会員の大多数がリサーチの資格を持たない人々から構成されているというおなじみの議論形態を取る、リサーチ基準のつり上げに対する頑迷な固執もみられた。これは、「阻止されなければ、社会行動のリサーチ知識市場の過度の拡張が不可避免的に社会関係問題への科学的アプローチへの信頼を揺るがすに違いない」という恐怖心を培った（Young 1948 : 325）。

無資格研究者の問題は方法の進化の結果であった。ソーシャル・サーベイ運動の時代には、必須のテクニカルなスキルは最小限のものであったので、多くの前途有望な「社会学者」がジョブをしながら学習し、実質的な貢献をしてきた。ラザースフェルドとスタウファーが尽きることなく強調したのは、「今必要とされているのはテクニカルなトレーニングを積んだスペシャリストである」ということだった。結果として教科要件の構築、特に統計学がより一般的となった。1950 年代末でさえ多くの著名な学部は最小限の統計学要件しかみだしていなかった。

不平の上記のリストはさまざまな方向に広げられた。ISRR にいる計量家は早期に気づいたように、新しいスタイルの社会学者は、民衆が自分たちの業績を理解していないし、尊敬していないことにしばしば気づかされた。通常の解決策は自然科学にうまく役立ったので、社会科学に役立つことのできる普及者を呼び集めることであった。普及活動は通常の調査者には向かないことが判明した。というのは調査者が普及のための天賦の才を持たないなら、「彼らは自分の本来の仕事に自己限定し、お互いに内輪に通じる調査報告書を書く方がベターであるから」（Young 1948 : 333-334）。社会学者が社会調査の有望性を外部者、疑いを持つ者に説明するとき、社会学者の語彙の中で中心的に使用される社会工学のアイデアは、次第に厄介者になっていった。というのは、都市プランナーの領域の実務家の養成が次第に広まっ

ており、学生にテクニカルな調査の新しいモデルを教える必要性が感じられてきていたから。もちろん最後にいつでも存在するパトロンの期待、クライアントの期待の問題も存在した。戦後は、特に方法論の基礎調査への資金給付のめざましい拡張をみたが、その大半である大規模サーベイリサーチ組織への資金給付は社会学が認知する目標と容易に調停できないクライアントのニーズと結びついていた。

### 社会科学の認知する目標についてのプログラムモデル

1940年代と1950年代初めは根本的な方法論争点に関して比較的寛大な時期であった。社会学リサーチ学会（SRA）を導いたシカゴ大学の「事例研究」実践家とコロンビア大学計量家の間の妥協は、ルイス・ワースの死後1950年代半ばまでのシカゴ大学社会学部の「ソフトな」方法を探る人々の追放まで続いた。妥協の公式な基礎のひとつの帰結として、社会学がひとつの「自然科学」であるという合意は、「争点が哲学用語で述べられない」ということであった。リースマンのようなソフトな調査者は、コンフリクトを、社会学の性格をめぐる基本的争点としてよりもスタイルとパーソナリティの観点からみた。そのトピックは社会学の分野で公式のトレーニングを受けていない彼にとっては、ほとんど傑出性を持たないものであった。シカゴ学派とラザースフェルド、マートンの追随者は方法論の争点のタブー視にしたがった。同じ趣旨で我々がすでに見てきたように、スタウファーその他の側にも、1930年代にジョージ・ランドバーク、チャールズ・エルウッドが定式化した方法論の争点に公然と関わることへの拒絶がみられた。方法論争のこの抑圧は十分に結びついた者の間では慣例となり、エリート学科内では特に学問上の価値として制度化されるようになった。マキーバーの『社会的因果性（1942）』の後、上記の学部から方法論論争、哲学論争が到来することはほとんどなかった。ソローキンの著作（1937）は例外であった。戦後期にこの種の著述に取って代わったのは、別の種類のテキスト、プログラム理論の声明であった。

1940年代後半の日付の上記の争点へのパーソンズの定式化はそのビックリするほどの攻撃性の故に特にショッキングである。

社会科学は今はやりのものである。問題は社会科学を作るのではなく作り発展させることである。社会生活の科学的研究は可能かどうかをまだ議論している者ははるかかなたに時代に取り残されている。それはここであり、その事実が議論を終わらせる（〔1948〕1986：107）。

ラッセルセージ財団の長として著したドナルド・ヤング（Donald Young）は同じ指摘を行っ

た。つまり社会科学者の観点からはこれは興味の失せた問題(dead issue)である(1948: 334)。にもかかわらずこれらは単なる暗黙の主張ではない。事実科学的地位に対する社会科学の要求の正当性は絶えず攻撃にさらされるか、さび付いた疑念にさらされてきた。NSFの創設をリードしてきた自然科学者達によるプログラム声明に耳を傾けることは、多くの自然科学者が社会科学が科学を装うことを拒絶し、自分たちと仲間になることを拒絶していることをはっきり教える。

社会科学者とそのイシューを論争することを好まなかったスタウファーでさえ物理学者ペルシー・ブリッジマン(科学哲学として「操作主義」の創始者でハーヴァードの光と騒がれた)が1948年の大学院のフォーラム集会で院生達にスタウファーと論争するよう促されたときに、それを論争しなければならないという義務を感じた。ブリッジマンの貢献は、社会科学における数学の有意義な利用は有意義に分析し描写する能力を要求することに気づいたことであった。彼は続けて

有意義な描写は、寄せ集まり、それをめぐってあなたが理論を構築できるシチュエーションの特徴をピックアップする能力である。有意義な描写と理論は手を携える。あなたは他方なしには一方を持ち得ない。それらは互いに成長する(SAS<sup>6</sup>: 6)。

これは、測定の前進の擁護と、社会学の医学型発展モデルで応じたスタウファーか、当時「行為の一般理論」に結びついた共同プロジェクト<sup>7</sup>に参画していたパーソンズのいずれかにとっては、歓迎すべきメッセージではなかった。

この時期に書かれた様々のプログラム声明は様々な点で互いに異なっていた。スタウファーの定式は最も影響力を持ったものではないにせよ、SSRCと財団の周辺のコミュニティの支配的な計量的セグメントの抱く従来の見解の最良の結晶であった。社会科学の目的はまたもや医学との比喻の観点から捉えられた。

ニュートンのあと一世紀の間、疾病の学生は、引力の医学理論に当たる疾病の偉大な原理の探求に惑わされてきた。フィラデルフィアのベンジャミン・ラッシュ博士(Dr. Benjamin Rush)は、自分は一世紀半前に、自分の発作理論において偉大な原理を思いついたと思った。もちろん我々は今は人類の苦痛の多くを征服したのは、ひとつ

<sup>6</sup> ハーヴァード大学アーカイブス(スタウファー・ペーパー)より

<sup>7</sup> カーネギー・コーポレーションによって惜しみなく資金援助されたプロジェクトで、このコーポレーションは社会関係学科の研究プログラムに多額の無制約のグラントを与えてきた。

の壮大な概念図式でなく多くの限定された一般化であることを知っている。細菌理論はある疾病に有用で、欠損理論は他の疾病に有用で、心身相関理論はさらに別な疾病に有用であった。いつの日かこれらの理論の総合が見いだされるかも知れないが、パスツールのアイデアはその総合の不在の中でのリサーチと生者の救いに役立ってきた (Reply to Bridgeman 1948, SAS : 6)。

スタウファーは理論的な社会科学の発想を放棄しなかった。実は彼はそれを論理実証主義者に負う用語法で定式化した。当時論理実証主義者はアメリカの諸大学で自分たちの存在を感じさせており、経験主義社会学者の初期の一般化プログラムの、方法論的著述を支配していた理論に対するピアソン流の懐疑とは一線を画した、これからの時代の社会科学のモデルを提案した。ハーヴァード大学総長ジェームズ・ブライアント・コナン充てに彼は書いた。

我々は社会科学の中に、それから実際の状況で何が起こるかを予測しうる、操作的に定式化され、経験的に検証される理論群が発生しうると信じている。我々は社会科学を事実の収集でもなく、常識的アイデアと本来的に検証できない仮説の混合とも、リサーチの便利な用具のコレクションとも見なしていない (Stouffer, Letter to Conant October 25, 1947, SAS)。

「実際の状況」を強調することはある特定の仕方では和らげられる。社会の領域での統計的方法の成功の多くは、「実際問題への科学理論でなく常識の洗練された適用を伴う」 (Stouffer, Letter to Conant October 25, 1947, SAS)。スタウファーはもっとなにかを期待し、アメリカ兵士に関する戦時データの戦後の分析——例えば「相対的剥奪」に関する彼の直感に反する結果——でもっと何かを達成できるのではないかと信じていた。

上記の定式は彼を同僚のタルコット・パーソンズから区別した。パーソンズのプログラム声明は概念的統合の必要に焦点を置いていた。パーソンズは SSRC から、社会科学全体のため、社会科学の展望を説明し、社会科学が公的支援を要求するのを正当化するためのプログラム声明を執筆するように委託されていた。それを委託していた委員会から受諾されず決して利用されなかったこの書類の草稿は、パーソンズはこの時期に他に多くのことを書いていたが、新しいジャンルの好例であった。事実 1943 年から 1953 年の彼が非常に生産的だった時期のパーソンズの仕事全体は、包括的な理論戦略の輪郭を述べ、その戦略の潜在的な豊饒性を証明する予備的な分析を提示する試みからなっていた。これらの著述の一部は出版されたが、他は出版されなかったものの、にもかかわらず社会関係学科、社会関係実験室 —

— パーソンズが彼のアイデアを進めるために設置した管理構造 — の設置に影響力を持った。他の声明はパーソンズの理論的意図の指摘としての価値を超えて意味を持った。それらは、社会科学の特定のビジョンの観点から行為し、彼のビジョンによって引き起こされた有価値の新しい基準を受け入れる有力なオーディエンス（ハーヴァード・ヒエラルキーと研究資金源）に影響力を行使することを真剣に試みた。

パーソンズはのちに1948年のASS大会で紹介されたマートンの「中範囲理論」に集約されるプログラムを自分のそれに対する比較的有益なライバルと特徴づけ、「回顧」の中で、それは「経験的なものと理論的なものを統合するのに不可欠な非常に建設的な動き」であるように思えた」と指摘した(1968: ix)。もちろんマートンはこの声明でパーソンズを直接にないし批判的に扱っていない。パーソンズの公準への哲学的な襲撃に近い。むしろそのプログラム・ジャンル内に留まっている。だが声明の意図された結果は方法論論争のそれに近い。それは調査と理論の現行の試みの認知上の妥当性の代替的評価基準を提供するのに役立った。しかしながら、これらはエリート調査者の共同体、大文字の社会学におけるコンセンサスではなかった。例えばラザースフェルドは経験的な調査と理論とは2つの別個の学問と見なした。人口統計学に志向した方法論者の多くは何らかの形の理論に何の関連も見いださなかった。

### その1：サーベイパラダイム：リサーチプロジェクト新モデルとその帰結

ある意味で新しいサーベイの計量的洗練の水準、特にラザースフェルドが市場リサーチから輸入した戦略と質問紙に基づく心理的指標の構築は、複製可能な活動であった。実際無限に複製された。サンプリング理論の技法の発達の結果、経費のかからない小規模なサーベイや既存のデータ群の分析を行うことが可能になった。次のステップは有意検定実施の導入であった。十分に奇妙なことに、社会学でのこの最初の事例は1947年のASR掲載のマートンの論文<sup>8</sup>であった。この実践はゆっくりであるが受容されていった。スタウファーの『アメリカ兵士(1949)』にはそのような検定は見られない。サンプリング検討がその使用を正当化していた1950年代を通じてのBASRの出版物も一般的にはそれを避けていた。その研究所の研究員達はその検定に異議を唱えていた(Lipset/ Trow/Coleman 1962)。

にもかかわらず、その実践はラザースフェルドとスタウファーを取り巻くサークルの外にいる計量を志向する社会学者の間に瞬く間に広がった。有意検定を採用した人々は、社会学以外の分野（農業統計、心理学、主要な州立大学の幾つかにおいてこの時期に設立された統

<sup>8</sup> R. Merton 1947 “Selected Problems of Field Work in the Planned Community.” ASR 12: 304-312.

計学科)の統計学者との局所的つながりに影響を受けた。人が結果の「有意水準」を容易く計算できることは、少数のサンプルから「有意な」結果を産出することを一層容易にした。予測力の限界の表現として、知見の周りの「信頼区間 confidence interval」を考える代わりに、差という信頼できる知見の強さは、一種の別個の事実、つまり他の母集団、状況に反復できる結果を持つ検定となった。非常に素早く学習されたのは、「有意な」結果が少数のサンプルで容易に産出されうることと、アノミーのような「変数」の「尺度」を用いた新しい「仮説」が容易にでっち上げられることであった。多くの場合、リサーチは興味のある結果と標準的人口統計のカテゴリー化の間に有意な関連を見いだすことに役立つものの、これらの尺度は社会学の理論的伝統と希薄なつながりしか持たなかった。

このモデルの下でなされた典型的な研究は次の体裁をとった博士論文か雑誌論文であった。まず問題の背後にある理論のレビュー(通常は多少とも密接に関連した若干の問題の中で過去のひとりのマスターの関心に若干の注釈をする。あるいはその主題の過去の研究に時折言及する)。次に「仮説」の定式化とサンプル、調査設計、「概念」を操作化する測定法の議論。さらに有意判定をもたらした統計法を付帯した、通常は表で示された知見の提示。最後に知見のリサーチ可能な幾つか含意を述べた結論。

「仮説」は斬新な形をとった。1930年代の統計理論で論争を呼んだ革新は、「是認」というアイデアであった。有意の尺度がある種類の推論の是認可能性の尺度と見なされ得た。典型的にはそのリサーチが検定することを意図され、それが拒絶されると差を持つ仮説の受容を是認する、差を持たないないしは無関連の「帰無」仮説の形をとった。この説明の難点は「実質的」意義と「統計的」意義の関連を混同するかもしくは混同を奨励する点である。この混同の基礎は1934年にスタウファーによって定式化されたアイデア「当該の推論は経験的に存在する母集団全体に対してよりも架空の「母集団」に対してなされたものである」によってしかれた。

この新しい調査フォーマットの普及はめざましかった。この種の膨大な数の計量的研究が生み出され、数年のうちに、「知見」の数、新しい「尺度」、トピックは、特定の種類の保健サービスの消費のような集計パターンが職業上の地位のような「社会的」変数と有意な関連があるという証明を通じて社会学によって移植された。1965年までに、2,500を下らない「尺度」が社会学の文献の中で考案され報告されている。さまざまな方法、サンプル、仮説を査定する技法の陥穽をめぐって膨大な方法論フォークロアが生み出されてきている。

この新しい「標準的社会学」とラザースフェルドとスタウファーの影響下で遂行され大規模サーベイとの歴史的関連は謎である。戦時中スタウファーによって行われた調査への参加者の多くは中西部の者か社会学者として中西部の大学に復帰した者達であった。例えばアー

ノルド・ローズは中西部の有力大学のひとつであるミネソタ大学で経歴を費やした。そこは中西部のよりレベルの下の大学に多くの卒業生を送り出した。ラザースフェルドの教え子はそんなに広くは分布しなかった。1950年代にBASR, ISR, NORCで大規模サーベイの仕事に雇われた社会学者の一部は上記その他のエリート大学の社会学部に就任を獲得したが、たいていの場合彼らはこの時期に数で圧倒していた中西部の大きな学部への就任ではなかった。その上BASRと研究資金グラントによって確立されたリサーチモデルは上記の学部のアカデミックライフの条件に容易に適応しないものであった。博士論文に関わる少数の院生が助手の助けを借りて行う小規模な計量的調査が上記の学部の規範であり、数値的にはプロフェッション全体を支配していた。

この成果で直接ラザースフェルドとスタウファーによって触発されたものはほとんどなかった。「理由分析」はラザースフェルド自身の弟子によってのみ使われた。ラザースフェルドの独自の尺度アイデアである「潜在構造分析」もまたほとんど利用者を見いださなかった。新しい尺度のより平凡なものはたいていチェイピンとその弟子によって先鞭をつけられたものであった。用いられた統計法は非常に多様であった。因子分析、カイ二乗検定のようなノンパラメトリック法、相関分析はすべてこの時期に見いだされる。並みの社会学者にとっては、高額の基金の付いたサーベイの重要性は主として彼らが計量に付与する威信の中に見いだされるものであった。大学の登録の拡張とともに小規模なりサーチはそれ自身の期間に発達した。調査への大学の期待の徐々の変化は上記の社会学者が論文を発表することを不可欠にし、上記の方法はBASRのような組織を悩ませていた費用と組織の問題に簡単な解決を与えた。

この果実の暖かさは成功そのものであった。この新しい調査法は教えて実施するのが容易であるばかりでなく、あまりに容易になされるので、この種の初期の調査は生み出した明快な結果は、差異の中の差異、見込まれる代替物、差異に関して下位母集団間の差異を示した後期の調査によってしばしば曇らされた。

知見の簇生と理論コースで教えられる伝統との関連の欠如の帰結は「理論」と調査の問題であった。方法論のフォークロアの拡大と調査者のランク内の入り組んだ分業の創出は、社会学の歴史で初めて計量的調査者は典型的にほとんど「理論」を知らないし「理論的」野心をほとんど持たないことを意味した。文化変動に関する入念な理論的アイデアを持っていたオグバーン、チェイピンと対照的に、この新しい方法論者は聖典的問題に対する忠誠心を持たず、社会学的文献に特別な知識のない人物から訓練された。ラザースフェルドとグッドマンは顕著な例だが、唯一ではない。例えばバーナード・ベレルソンは訓練によって図書館学者になった者（a library scientist by training）であった。

## その2：理論と調査

理論と調査の乖離は幾つかの形態をとった。大規模なサーベイリサーチ・ショップで訓練を受けた多くの学生の場合には、そのパタンはいかなる理論的文献にも何ら接したことがなく、これらのショップで発達した入り組んだ分業のなかで特化したテクニカルな任務を遂行するよう訓練された。コロンビア大学とハーヴァード大学のプログラムでは、彼らはパーソンズとマートンの見解とヨーロッパの伝統についてのパーソンズ独特の見解を教えられた。しかしこれに先行するアメリカの伝統はパーソンズ、マートンの理論の世界観の一部ではなかった。シカゴ大学では、ハーバート・ブルマーの教えの中でシカゴ社会学の伝統が生き続けたが、彼がカリフォルニア大学パークレー校に社会学部を設立するためにシカゴ大学を離れたときに、エベレット・ヒューズがシカゴ大学を退職したときに、シカゴ社会学の小さな服用は終焉した。それ以外のアメリカ社会学科では、さほど限定的でない仕方で理論は教えられ続けた。例えば、1920年代にチェイピンは多くの思想家のサーベイを教え、この雑多な要素の混じった理論教授スタイルは、ウィスコンシン大学のハワード・ベッカー、ミネソタ大学のドン・マーチンデールによって引き継がれた。

パーソンズとマートンは新しい血、新しいアイデアを代表したが、聴き手によって社会学共同体の中にすでに傑出していた問題に答えた者と受け取られた。我々がすでに述べてきたように、「社会学の諸概念」を総合的に統一したいというユーバンク（Eubank）の広く支持された野心はパーソンズの試みの先駆者であった。マートンと1930年代のさまざまな他のハーヴァードの研究者（キングスレイ・デーヴィス、ロビン・ウィリアムズのような）の「機能主義」は一層容易く受け入れられた。次の範例的な「機能主義」の文章を読めばこの理由は容易に理解できよう。

このエッセーはその中枢的社会的機能のひとつに照らして教育を解釈する試みである。教育によって、コミュニティの年長成員による年少世代の訓練を意味する。成人は親として、儀式への参加者として、市民制度の成員として自分の能力の中で教える。上記のケースのいずれにおいても、彼らの活動は社会的サンクシヨンのサポートを持っている。このサンクシヨンは集団の福祉や生存に親和的活動に対する陰に陽にの集団による是認である。集団の成功は一般的に一定の制度と連結しているので、制度を保持することは教育のねらいとなる（Chapin 1911: 5）。

この一般性の水準、集団サンクシヨンの強調、サンクシヨンを行使される「伝統」の再生と保存、説明の究極の根拠としての集団の成功と存続へのアピールは1930年代、1940年代

にハーヴァード大学に発達した機能主義の特徴である。しかしこの文章はスチュアート・チェイピンのコロンビア大学の博士論文（1911）のオープニングの параグラフである。

深い類似性はたまたまではない。「構造」と「機能」というペアになったタームのような機能主義の用語はギデンクスとサムナーにとって中心的な、すべての初期のアメリカの社会学者にとって重要なスペンサー主義の用語であるから。この同じスペンサー主義は初期の世代のアメリカの社会学者の経験的調査の伝統にも行き渡っていた。というのは、コミュニティ制度の「機能作用」の問題はまさにこれまでの「ソーシャルサーベイ」リサーチの多くがそれをめぐって実施されてきたまさに問題であったから。実際このパトロネジ乗り物はサーベイ調査者とコミュニティリーダーによって共有された「効率」の理念、それはコミュニティの目標の観点から理解された理想によって構造化されてきていた。パーソンズの「ホップズの秩序問題」は協力とその困難という馴染みの問題の別な形態であった。ギデンクスと彼の弟子達はデュルケムとウェーバーを見直したパーソンズと同じく、「経済的個人主義と社会主義の伝統に対する明示的な反抗」であった。

パーソンズの著作と 1930 年代、40 年代のハーヴァードの弟子達の「機能主義」著作 (Davis/Moore 1945) はラディカルな出発としてではなく、アメリカの理論が常に保有してきたものの再確認として読まれた。これはパーソンズの著作が受容された謎を部分的に説明する。というのはたとえば L.J. ヘンダーソン・サークルのパレート主義のような、著作のハーヴァードに局所的なインスピレーションにもかかわらず、パーソンズ主義は当時の支配的潮流の中に容易に同化した。彼の批判者が拒絶したのはヒューマンについての彼のモデル、社会学の彼のモデルでなく彼独特の言い回し、彼特有のメタ理論的アイデアであった。中西部の社会学者は、彼の説明は彼らがすでに持っていたものに内容的には何も付加しないと信じていたから、実際にはパーソンズを無視しながら、パーソンズに快く敬意を払っていた。

パーソンズは彼がのちに「構造的・機能的位相」(1968: xii) と呼ぶもののなかで構造機能主義に加わった。ひとつの違いは、構造機能主義のパートではなかったパレート／ヘンダーソン／キャンノン／ラドクリフ・ブラウンのシステム概念の導入と目的論的理由づけを通じて機能のアイデアを再編したことであった。しかしこれらの付加はパーソンズ主義の最も論争を呼んだ要素であったし、最も厳しく批判された。たぶん最も重要な点は、パーソンズが受け取られている理論的伝統から離れたもの、彼とマートンが正当性を認めなかった理論的著述、彼らが「経験」社会学に行った調停である。

我々が見てきたように、1920 年末までに、幾人かの計量社会学者が社会学から理論をたたき出そうと試みた。しかし科学主義に対するエルウッドの反抗の失敗の中で（それはマイノリティの支配的理想に対する永久の敵意と主要雑誌からのエルウッドの排除を残した）、

依然エリートであった若い社会学者達は科学主義理想に彼ら独自の調停を行った。有力者エルスワース・ファリスの政治的保護の下で、社会科学の SSRC モデルや SRA エリートと密接に連携した学科の中で、ブルマーの 1930 年代の著述は、トマス／ヅナニエツキ批判(Blumer 1939) の中ではグッドな科学理論の基準 (criteria) として「コントロール」を主張した。

パーソンズの調停は表面的には調停と別なものにみえ、むしろ経験主義に反対する新しい営為であるように見えたので、一層特異なものであった。事実彼の擁護者が行っているように、それはパーソンズの意図とはかけ離れている (Litz 1986)。この時期の終わりにパーソンズを「グランドセオリスト」としたミルズの特徴づけがこびりついており、パーソンズ自身が自分を治療できない「理論病患者」と呼称したものの、にもかかわらず彼は彼以前の理論家の多くよりも経験的調査にかなり調停的な理論と調査の関係観を抱いていた。パーソンズの著作を当時の学問内の分業のコンテキストで理解するために、パーソンズの著作の受容を再検討する必要がある。パーソンズ、マートン自身が著している理論的著述と同時代の年長世代と区別する特徴に着目せよ。

ASR が 1930 年代半ばに創刊されたとき、その雑誌が明確に責任を負った領域のひとつは「社会思想史」であった。それは過去の社会思想家の研究を意味し、社会学の開始時から社会学のカリキュラムの伝統的トピックのひとつであり、そのメンバーの多く、例えばエルウッド、フロイド・ハウス (Floyd House)、ハワード・ベッカー、ハリー・エルマー・バーンズのような人々のアカデミックな専門領域であった。エルウッドのケースが物語るように、上記の著者達は社会思想史を、今日の一般人の社会についての思惟と「科学的」社会理論の試みに適用されうる社会的理由づけに関する教訓が含まれる一連の失敗教義と見なす傾向があった。上記の著者の多くは固定した単一の終点を目指さない、是正と改良の過程を帰結で連続的なものとみた哲学のプラグマティストであった。システムの年齢は過ぎ去るものと彼らは考えたが、過去のシステムは不可避免的に現在を理解するための出発点であった。彼らは科学的な社会思考とバナキュラー (通俗的) なその区別をしなかった。公共の領域と私の領域の関係、合理的国家プランニングの役割をめぐる多くのイデオロギー的板挟みを持つルーズベルトの時代は彼らが詳細に説明する伝統の重要性を正当視しているように見えた。エルウッドの用語では、それは、サムナーとウォードの間の論争の政治的具現であった (Ellwood 1938)。

社会行為の主要な「科学的」理論家を基底にある隠れた概念システム仮説を伴ったパーソンズの『社会的行為の構造 (1934)』と「社会学的なものの歴史とシステムテックス」に関する 1948 年の論文でマートンが行った区分は、理論的著述の目的、聴衆、理論のねらいを定義し直すものであった。彼らは過去の理論がそれに反応するニーズの問いに答えることを

強いられた哲学のプラグマティストではなかった。彼らは過去の全範囲の社会思想を無駄で誤ったくだらぬ言明と見なして無視しても平気であった。この態度とバーンズ／ベッカーの『伝承から科学までの社会思想 (1938)』、バーンズ『社会学史入門 (1948)』のようなテキストとの対照性にはもはや驚かない。パーソンズのねらいは彼の系統的なプロジェクトにレリバントな過去の理論の要素を引き出すことにあった。彼はバーンズ、エルウッドが中心的と見なした聴衆（彼ら自身の社会的理想の明確化と見直しの必要を感じた政治的に自覚した聴衆）にはほとんど興味がなかった。

バーンズは特に「学問の」境界のないことを尊重した。1940年まで依然として「社会科学」と呼ばれていたコロンビア大学の学位プログラムの他の製品と同様、彼はさまざまな学問の一員として語り、社会科学の相関関係を強調した (Ogburn/Goldenweiser 1927; Barnes 1925; Beard 1934)。同様にエルウッドは文化進化に関する人類学の著者の強い影響を受け、彼らのアイデアを彼自身の社会学的著述に取り入れた。パーソンズは何か別なものを提供した。1930年代以降の院生に対する彼のアピールの明白な一部であった。社会科学が有力な経済学部によって支配されていたハーヴァード大学の彼自身の状況に反応して、いかなる他の理論的学問によっても共有されない社会学の独自の領域があると述べている (Levine 1980: xi; Camic 1979)。かくして彼の仕事は弟子たちのアイデンティティ形成の手段として機能し、問題の先史についての彼の説明は上記のねらいを共有する人々にプライドの源泉として役立った (Heeren 1975)。

社会思想史の旧来のアイデアと社会学を自然科学のような科学にしたい願望を持つ統計的科學主義とのミスマッチは次第に明白となった。1930年代のチェイピンのような人は平静に自己を理論家と呼び、彼らの方法論観との対立を感じることなく文化変動という当時の理論的問題に取り組んだ。彼らの理論は非公式で適切な統計的技法の持ち主である調査者によって経験世界で識別されるラフな相関に当たるものであった。測定の正確さをラディカルに改良する可能性というアイデアはこの状況を非可逆的なものに変えた。方法論者によって眺められた理論への帰結は次のものであった。理論とは正確に与えられる領域を明確にする手段として役立つ、もっと正確にそしてテストされうる仮説の源泉であった。理論の「理想的」形式は正確さという目標を達成しなければならず、この目標に向けてのステップと見なせない理論はそれゆえ科学的には無縁である。スタウファーによるこの理想の定式はきわめて明白であった。つまり  $x_2$  と  $x_3$  が与えられていて  $x_1$  であるならば、我々が  $x_4$  を手に入れる強い確率が存在する。あとで見ると、パーソンズは1948年の論文「社会学理論の展望」でこの基準化、それとよく似た基準を支持しており、入念な理論スキームを通じて領分を概念的に明確化するという任務を自らに課した。スタウファーはまさにこの種のスキームの必

要性を認めなかったが、物事についてのより一般的スキームの存在が進歩にとって重要なことは認めていた。それがなければ社会学は「事実発見」の営為に留まり、それがあれば社会学は、他の仮説への結果の影響が確定されうる実験になぞらえることができるものを構築できるだろう (Stouffer 1950: 359)。パーソンズ流の理論の営為と正確さを改良する戦略は調停されうるだろう。より旧式の理論は調停し得ないだろうが。

理論のねらいについてのこの新しいモデルは、社会学の分業の標準的描写から「社会思想史」という旧来のカテゴリーを排除することを伴う。実際このカテゴリーの理論はパーソンズの SSRC 提案 (1986) にも、ドナルド・ヤングの社会科学の諸問題とニーズについての特徴づけ (1948) にも、スタウファーによる社会学のねらいらしきものについての解明 (1950) にもどこにも見あたらないのである。実際「学術論文 (learned essays), 記述的報告書 (descriptive reports), 教科書の集大成 (syntheses), 一般向け出版物 (popularizations) (つまり旧来の社会思想史の主要な文字乗り物) よりも科学的論文に大きなウェイトを与える出版物間の監督的差別」(Young 1948: 332) の要求のような改善の中に政治的表現を見いだす積極的な敵意が存在する<sup>9</sup>。

上記の戦略は成功を収めた。その一つの証しは自身を社会思想史家として自認する社会学者の数の減少である。社会思想史家は社会学の一般的拡張にも拘わらず、雇用を見いだすのが難しいカテゴリーとなった<sup>10</sup>。旧来のタイプの論文は「科学的」ジャーナルに掲載されることが容易でなくなり、旧来の仕方で理論を研究することを望む著者の多くはこの新しいアカデミックな環境のなかで生き延びるのが難しいことを知った。二流の大学では数人は見かけたが、時間と資源と良質の院生を持つ最も威信の高い学科では、皆無であった。

社会思想史が地下に潜っていった過程は社会学の至る所で平行してみられた。戦後直後財団の基金を得た研究者共同体のメンバーでなかった社会学者の多くはこれらの関係の拘束的効果から隔離され、その結果彼らはハーヴァード大学、コロンビア大学の非社会学者に匹敵するあるいはそれ以上の権利を持つと自らが信じる「通常社会学」の伝統に当たるものを引き続けた。ミネソタ、ワシントンのような大学ではその継続は強く、上記の学部の社会学者の訓練を特徴づける社会学的伝統の保有感覚は、パーソンズ、スタウファー、ラザースフェルド、マートンに恩義を感じなかった。上記の学部は小規模な統計リサーチプロジェクト

<sup>9</sup> 教科書外の材料の出版機会の増大はこの時期の重要な成果と見なされた。上記の発展にコメントしながらパーソンズは自身の出版社「フリープレス社」が社会学の非教科書出版物のためのマーケットの存在を他の出版社にデモンストレートするのに重要であったことを特記している (1959: 557)。この出版社「フリープレス社」の衰退と 1970 年代初めの多くの他の出版社の市場からの撤退はこの市場の縮小の証しである。

<sup>10</sup> これらの関心を持つ多くの人物は彼らの呼称を社会変動 (研究者) に変えた、社会変動のカテゴリーの増加は部分的にはこの事実の反映である (Zetterberg 1956)。

トとコミュニティ属性よりも個人属性のルーズでアドホックな尺度の創出に向かう初期の発展を継承した。だがたいていこれらの発展は大規模なサーベイワークとは直接の対立はせず、1940年代にラザースフェルド、スタウファー重視が次第に色あせて行くにつれて、ワークスタイルの分岐も次第に間接的なものになった。

グッドマン、ラザースフェルドのような人物が易々と採用になったのは社会学が発展していないことの反映であるだけでなく、彼らの採用は彼らを採用した学部とネットワークの個々の目的に役立った。科学的方法の情け容赦のない宣伝とジョージ・ランドバーク世代を席卷した科学と計量化の一体化は、社会学の範例的方法としてのサーベイリサーチの受容とスタウファーの『アメリカ兵士』のような大がかりなサーベイプロジェクトによって生み出された結果を受容するために不可欠な前座であった。

1940年代末までに、新しい区分が生じた。アメリカの多くの社会学者は学説擁護論にも大規模サーベイ組織の調査結果にも承伏しなかった。もっと多くの者はパーソンズ流のプログラムに印象を受けなかった。1950年代末に上記の態度を攻撃の仕方です式化した幾つかの作品が登場した。その中でも最も有名なのは1958年に掲載された「ユートピアからの脱出」と題するパーソンズに関するダーレンドルフの論文であった。それはパーソンズ流の営為の無駄というアメリカ人の感覚を捉え、パーソンズのアカデミックな立場、アイヴィーリーグと財団共同体の権力に対する彼らの憤懣にはけ口を与えた。それよりもっと重要なのはライト・ミルズの著書『社会学的想像力(1959)』であった。後背地に多くの個人的コネを持つウィスコンシン大学の学位保持者<sup>11</sup>として、ミルズはパーソンズ、ラザースフェルド、マートンと彼らが代表するアカデミックな階級システムに対する敵対者となったのは当然であった。抽象的な題の下にコロンビアの感覚、特にBASRの民族誌に正確な特徴づけを覆い隠しているこの書物は、ドナルド・ヤングが軽蔑した知的な価値、ミルズが「知的職人精神」と呼称した価値の再確認であった。社会学的想像力のタイトルそのものは1970年代まで中西部の学科に発達した社会学的パースペクティブの強い暗黙の感覚を触発した。それはパーソンズ、ラザースフェルド、マートンの理論的関心、技法的関心とは決して折り合わないものであった。

このテキストの議論は、そのルーツを旧来のアメリカの社会学の伝統とそれからの逸脱にあることを示している。ミルズは当時看取された知的ニーズを考察することから始め、社会学がそれに答えられなかった理由を明らかにしている。社会における社会科学の正しい役割

<sup>11</sup> この時期のウィスコンシン、ミネソタ、ノースカロライナのような学部の高い格付けにも拘わらず、これらの大学の院生でアイヴィー・リーグに就任したのはきわめてまれであった。ライト・ミルズは明らかな例外であり、それゆえ後背地の社会学者達のヒーローであった。彼はコロンビア大学の学部生相手のユニットにのみ就任し、大学院プログラムからは排除された。

は、まさしく理性を民主主義に関連づけ、たとえこれが「リアリティについての公式の定義」(1959: 191)に挑戦することになっても、民衆の言説 (public discourse) の一部であることにある。彼が拒絶するのは、ジョン・ギリンのような改革派社会学者の旧来の個人主義偏向であった。その代わりに彼はより大きな社会構造とパーソナリティの関係の理解と統合され、「科学のモデルによってでなく歴史から発生したものとしてのリアルな問題の感覚によって」(1959: 72) 動機づけられた制度比較の歴史アプローチを説いた。方法のレベルでは彼は多元主義を説いたが、方法としての経験社会学の方法には挑戦をしなかった。しかし彼は方法論は科学哲学には基礎をおくことはできないと述べた。当時はやりの論理実証主義は従来型のサーベイ法と機能主義と一種の同盟関係にあるものと見なされた<sup>12</sup>。それに反対してミルズは、方法の前進は「成果の進歩に由来する慎ましい一般化として最も起こりがちである」と述べている (1959: 122)。

ミルズの査定と同じ頃にパーソンズによってなされた査定の間に不思議な相称 (シメトリ) が見られる。両者は1960年代が社会学の10年であったと把握し、大学が潜在的な戦場であったと見ていた。ミルズにとって、それは「適切な民主主義政党と運動」(1959: 191)の不在の中での必然的な舞台であった。プロフェッション (学会) はすでに当時の社会問題と社会学の関係の問題をめぐる分裂していた。農村社会学は1930年代に別個の学会を形成した。1950年代に社会問題研究学会 (the Society for the Study of Social Problem) が多くの社会学者の感覚に反応して創設された。近年ASAと改称されたASSの「専門職化」が貧者と無力な者に伝統的に関心を向けてきた社会学の放棄に至ったという感覚。ASAの専門職に関する委員会の部会長として働くパーソンズにとっては、それは社会学と「一般的文化的非科学的側面」との関係という題目に属するプロフェッションとしての社会学が直面する問題であった。この問題は他の問題と合成される。「ひとつの文化的複合」としての社会学の問題、特に「科学の適合性と客観性という聖典がプロフェッションの作業綱領としてどれだけ設定されているかという問題」(1959: 547)。この合成から2つのジレンマが生じる。

<sup>12</sup> 両者の密接な関係の様相は社会学理論の一卷 (Gross 1959) に掲載された機能的説明の分析を与えた論文 (Hempel 1959) とラザースフェルドとつながりのあったスウェーデンの社会学者ハンス・ゼッターバーグ (彼はコロンビア大学でエルネスト・ネーゲルと一緒にセミナーを持った) のような人物の著述によって高められた。しかしながらつながりの大半 (ラザースフェルド自身を含めて) は表面的なものであった。任意の種類のアナリストたちが実際の社会学理論と説明を論じている少数の例では、結果はきわめて批判的である (e.g. M. Black 1961)。計量的社会学者の多くは実証主義のメッセージ、特にあらゆる科学の説明と理論は同じ基本論理形式をとるというメッセージを好む。既存の形式の科学的営みに同化しようという実証主義内の動きはその科学的装いを正当化し、理論の重視を基底付けるのに役立つ。しかしながら明白な同盟関係は、従来の社会学方法論に従来の科学哲学批判者が反対したように、1960年代、70年代の論争を形成した。ウインチが最も著名な事例であるが、物理の領域と人間行為の領域を区別することに関心のある哲学文献がそうであったように。

第一のジレンマは社会学の受容特に学部レベルでのそれ。それは主として「一般教育の役割、学生に彼が住むことになる世界に向けて準備するのを助ける役割」(1959: 554)。同時にパーソンズは、これは同調問題への広いイデオロギー的洗礼（ハーヴァード大学の同僚デヴィッド・リースマンのテーマ）によって色づけられると主張する。しかし民衆は潜在的に社会学者を上記の種類の問題の「エキスパート」と定義するだろう。パーソンズは社会学が（経済学について）民衆の注目を集める好機とみなした。

民衆と学部生のこの「イデオロギー」への関心は社会的悪へのこれまでの関心にとって代わるものとパーソンズは感じた。

それは社会学者に重い責任を負わせる。イデオロギーはまさに社会の価値コミットメントとその経験科学文化の合流地である。事柄の性質上、有力な圧力と科学の客観性の基準が対立するようになる（1959: 555）。

この状況に直面して、「議論の広いフォーラムとのすべてのつながりを回避することによって」「撤退」を考慮する「純粋な者」に対して、パーソンズはこれは「ある純粋に技術的スペシャリストにのみ実行可能と見る。プロフェッション全体にとって、それは採用が難しい姿勢である」（1959: 555）。彼の読者が十分気づいているように、上記の学生を方向転換させることは、大学の資源に対する社会学の要求のもとで足下を絶つことであろう。エキスパタイズの需要問題に対するパーソンズの解答は、「さまざまな非アカデミックな組織の中でコンサルタント役割の使用を広げること」と、「医学部、経営学部に社会学者の出現を増やすことを通じて、社会学の応用サイドをもっと適切に開発すること」であった。両趨勢は当時伸びていた「アクションリサーチ」のためのセンターの設立を伴っていたが、養成に際してプロフェッションの最高の基準を要求することが必要であった（1959: 557）。

## 第4章 黄金期とその後の混沌

【梗概】主としてスプートニク後の政府資金の流入とイデオロギーに関心を高めたベビーブーム学生の流入に反応して、アメリカ社会学は急速に成長した。そのような成長は専門職組織（学会）の再編成への圧力を作り出したが、ASAの会員の大幅な拡大は学会の組織的コントロールの増大も、知的な統合の増大も伴わなかった。実は全く正反対のことが起こったように見えた。ASAはあらゆる見解と会費を納入するすべての人々を傘下におさめようとする組織となった。そのうえ分野はASAの外で急速に分化し、雑誌、個別分野学会、学

科での科目提供の数の増大, ASA からの地区学会の分離によって顕著になった。

この多様化はアメリカ社会学が深刻な統合問題を抱えることが明白になるほどまでに達した。そのような問題はすべての専門職組織同様, 社会学に常に存在したものである。しかし社会学においてはそれは特に深刻であった。社会学の目下の状態は分野を統合する当初の妥協が失敗した結果であり, 物質的資源が急速に拡大した時に, アメリカ社会学を組織的にもシンボリックにも統一する何らの術がほどこされなかったためであった。第 1 章から第 3 章で輪郭を述べた個別の歴史過程にドラマティックな成長が起こったことは社会学を多くの多様な方向に押し出したところの諸条件を作り出した。上記のものが本章のストーリーである。

### 資源の増大

ソ連が 1957 年 10 月 4 日人工衛星スプートニクを軌道に乗せるのに成功したとき, これまで想定されていたアメリカのテクノロジーの優位は突然疑問符を突きつけられた。続く年月は, この新しい挑戦に応えるのに十分な科学者と技術人員が存在することを確保するためにアメリカの教育システム再建のための劇的な奮闘を目撃した。かなりのすったもんだと論争と妥協と方向付けし直しのあとで通過した国防教育法 (The National Defense Education Act) は, 政府から高等教育に多額のお金が委譲される乗り物を造り出した (Clowse 1981)。以後のこの法律の追加, 修正, 増補は続く十年に渡って大学の物理的施設を拡張し, 学生院生が自分たちの教育に金銭を払う能力を拡張した。そのうえ連邦機関は自分たちが学生, 教員, 大学研究施設に渡すことができる資金の大幅な増額を体験した。

ハード科学は大半が上記の恩恵に浴したのに対して, 社会科学もまた彼らの支援水準の有意な増加に与ることになった。最終結果は, 社会科学一般社会学個別にとって, 研究資金給付が私的財団から主として連邦政府の公共機関に決定的に移ったことであった。例えば 1956 年と 1980 年の間で, 私的財団からの社会科学への金銭は二倍 (2,100 万ドルから 4,100 万ドル, 変動価値を差し引くと実質マイナス), 連邦政府からの金銭は 14 倍以上の増 (3,000 万ドルから 42,400 万ドル) であった。これらの基金は大学から研究者への金銭の 27 倍増と組み合わせられたので, 新しい物理施設, ファカルティ・デベロップメント, 奨学金フェロースhipを通じての学生支援, 教員の研究のための多額の資金供給が今や可能となった。さらに私企業と公的機関の双方によって資金給付される契約研究のためのアカデミアの外部市場の成長が起こった。図 4.1 はスプートニク後の社会学の連邦政府からの研究資金給付の増加水準の大まかな感覚を与えている。

1960 年代に社会学の規模を拡大したさまざまな力は容易く仕分けはできないが, 研究資金給付の効果は決定的である。研究資金給付の拡張は院生の数を増大させた。図 4.5, 図 4.6

に記すように、社会学の毎年の博士号修士号取得者の数は非常に素早く上昇した。上記の院生の登録は、社会学に大学院プログラムを拡張するために使用されうる人口統計学的な資源を提供した。前述の図 3.2 が記したように、博士学位生産は戦後直後の過剰な拡張のあとの 1950 年代を通じて乱高下している。その過剰な拡張は、十分にトレーニングを積んだアカデミックスを非研究制度（小規模な教養単科大学、教員養成大学、威信の低い州立大学、コミュニティカレッジ）に留めていた。社会学におけるアカデミックなキャリアの魅力はスプートニク以前は低下したが、1950 年代のカレッジ登録者の減少と相まって（朝鮮戦争の勃発が復員兵を消滅させた）、アカデミックなキャリアについて学生達の間には不確実性が存在した。スプートニク後の支援拡張が上記のすべてを一変させ、それがなかったら博士課程を修了できなかった学生のための道を容易にした。

学部生の需要もまた社会学成長のひとつの重要な要因であった。1950 年代に落ち込んだあと、社会学に登録する学生数はゆっくりではあるが、一貫してのほり続けた。社会学への学生の需要のスーパーヒートは 1962 年に始まった。これはベビーブーム世代が大学に入学し始める 1960 年代の半ばから後半の時期の直前であった。図 4.7 はこの時期の学生登録の増加がどんなに劇的であったかを物語る。ベビーブーム世代の人口統計学的要因に加えて、ベトナム戦争がラディカル化したことの影響があった。この戦争は非常に多くのアメリカの家族の生活に入り込んだため沢山の公的議論と正当化を要求した。その上国内問題、特に貧困と民族の不平等がさらなる論争を刺激した。

一般大衆によって社会学者と認知される人々が、新たに問題視される社会的世界の説明者としての役割を引き受けることによってこの論争に加わった。論争は社会学がその勢力拡張に使えるシンボリックな資源となった。一部の社会学者は煽動者、ジャーナリスト的なプロパガンタを流す人、左翼組織への参加者になった (C. Wright Mills)。他の者はテレビのパーソナリティになった。さらに他の者はナショナルなエスタブリッシュメントのためのスポークスマンになった。T. パーソンズは最も目立った。彼はオピニオン誌 *Daedalus* でアメリカ人の生活のさまざまな制度セクターの問題を論じた。Irving Loui Horowitz 達は *Transaction* 誌（のちに *Society* に改称）を創設した。この雑誌はその光沢のある表紙の中に描かれた社会問題を是正することを意図したソーシャルアクションに捧げられた。

民衆の心の中にある社会学者のアイデンティティはこの時期に定着した。彼らのメッセージは次のようなものであった。自殺率の差であろうと、心臓発作率であろうと、犯罪、貧困であろうと、人々の間の差は階級位置、人種のような社会事実との関連で変異する。それゆえ、社会はこれらの差に因果的に責任がある。時には社会学者によって与えられる、時には用意された聴衆によって推論されるこのストーリーのモラルは「国家が介入すべき」という

ものであった。貧困、都市問題、教育改革、人種差別、機会の不平等に取り組む一連の政府のイニシャティブの着手は、これらのプログラムの促進、より一般的には政府支出の拡大と社会学が一体化する民衆の意識に影響があった。ある意味で、社会学は今一度アメリカ世論の改良主義傾向によって提供されるイデオロギー資本に依存していたが、このころには、私的財団からよりもむしろ政府から金を引き出すためにこのシンボリックな資源が利用された。にもかかわらず、その存在が大学管理者からの追加資源の公認として用いられうる学生を惹きつけることは以前のように用いられなかった。

社会学は当時の最も政治にコミットした学生の多くを吸収するアカデミック・プログラムとなった。その上、これらは最も学問にコミットした学生、社会学が今まで惹きつけた中で最良の学生の一部に属していた。図 4.7 が示すように、社会学登録数は特別な増加を見せた。年次毎の学士号取得者の数は、1965 年の 15,000（その数字自体 10 年前の倍以上）から 1970 年に 35,000 以上に増加した。大学院レベルでは、Ph.D の産出は、学部生人口の拡大の比率だけ増加した（図 4.5）。

この増加のひとつの帰結は、社会学の学会組織が急速に拡大したことであった。それは図 4.8 の ASA 会員の増加に証拠立てられている。社会学は金と学生登録という物質的資源を持った。人種と民族緊張、貧困、戦争、政府による権力の濫用という当時の問題は社会学と関連深かったため、社会学はシンボリックな資源も持った。それゆえ、アメリカ社会学が ASS を ASA に改組することによってこの時期にその組織資源を動員しようとしたのは驚くに値しない。しかし我々が次第に気づくように、この改組は管理の強化、集権化、コントロールの面での平行した努力を伴わなかった。実際は正反対であった。巨大な知的多様性を奨励し、許容する傘下組織の創出を伴った。

その結果は、アメリカ社会学の創設者がしたような、共通の専門職共同体の感覚かあるいは共通の知識貯蔵庫の周りにシンボリックな資源を強固なものにすることが全くできなかった。1970 年代半ばに、研究資金給付、学生登録数、ASA 会員数、Ph.D 生産数の低落が始まったとき、社会学は、衰退に対処するための、集中管理集中支配という組織資源も持たなかったし、専門職の共通の所属心、知識基盤へのコンセンサス、アカデミック共同体及び素人共同体内での威信というシンボリック資源も持たなかった。衰退期は専門職をひとつの学問としてもっと凝集したコンセプトに動員しようとか再編しようという努力を喚起しなかった。実際には、誰にでも社会学のニッチを与えることによって、ASA の会員を維持しようとした結果、衰退は一層の分化と多様性を鼓舞した。

## 物的資源基盤の変化

1960年代の社会調査への連邦政府の研究資金給付の拡張は、財団と私的寄付者に関する問題が少なくともある面では無限に単純になったことを意味した。アカデミックな社会学者は主として限られた範囲の自律性と利害をもつことになった。なぜならアカデミック社会学者は今やカーネギー・コーポレーションや私的契約者が時折行使する、社会科学者の仕事を馬のくつわのような支配をしたいという願望をほとんど持たないビュロクラートを相手にするからである。連邦政府の資金を獲得するためにラザースフェルドのBASRのような組織は、誠実な関係を維持したり、自己を売り込む活動を通じて契約を結ぶことに同じ努力を傾注する必要はなくなった。

しばらくのあいだ財団の事務官と確固たる地位にいるアカデミックスの共同体が、パネルでの奉仕と助言を通じて連邦政府資金の分配機構を掌握していた。そのうちに、政府のさまざまな機関で社会調査の支援が広がるにつれて、この権力は広く分配されることになった。多くの機関でグラントの申請 (proposals for grants) は、ピア審査を通じて評価が下された。それは専門職の基準が用いられている、少なくともグラントプログラムのガイドライン内で行われた。多くの機関では、政府の管理職の地位にいるかつてのアカデミックスによって意思決定がなされた。かくして基金が分配される仕方は多様であるが、意思決定は専門職共同体の役割を増大させる傾向があった。NSF 米国科学財団や NEH 人文学のための米国研究基金のような「ピュア」な機関を別とすれば、その手続きは直接学問的基準を再生産しなかった。例えば健康調査の領域では審査のためのパネルはトピックで組織され、各領域はそれ自身の仲間を発展させた。これは、特定のスタイルの社会学研究には有利なことがあるが、構成では学際的である。かくしてこれらの機関による社会的プロジェクトのための資金給付は、非社会学者による優れた評価を要求することとなった。それは社会学という学問のハードルと一致しない独特の選択のバイアスを持つハードルである。一般に政府機関より小さい私的財団のパネルは性格的には学問的度合いが低い傾向がある。ここでもまた社会学者からの申請とこれまでの仕事ぶりが社会学以外のアカデミックスに抱かれる評判が成功にとって重要である。それは選択のバイアスがしばしば「指導的な」雑誌に例示される計量社会学モデルと一致しないという帰結をもたらす点で。資金が潤沢でない組織であるが社会学を超えたアカデミック共同体での威信の源泉である NEH のねらいの声明とドキュメントは方法論上の対立を容認する。この機関の大きなフェロウシップ・プログラムに関する社会学の業績のための審査パネルは社会学者を抱えてきたし、今も抱えているが、人文学の方法の使用で名声を勝ち得ている社会学者である傾向がある。

一部の機関、特にこの時期実用性がほとんどないかなりの量の研究をサポートしてきた軍

機関では、グラントを与える職員（海軍調査局）がその機関が関心を向ける一部の一般的領域で仕事をするアカデミックスと築いた個人的関係にもとづいて官僚的でない意思決定がなされていた。その意思決定は官僚ヒエラルキーの下位の者の手に握られていた。これらの人物は間接的に大学の威信ヒエラルキーに体现されている専門職基準を受け入れる傾向がある。社会科学における軍の信念、あるいは費消しようとする意思は侮れないものがある。事実この軍の4ブランチは競って「行動科学」プロジェクトに資金投入を競い、悲惨なプロジェクト・カメロットに導いた。

1960年代の大学院教育への連邦政府の支援の多くは院生の生活支出と授業料のためのフェローシップを含んでいたが、支援の大半は「養成期間グラント」の形をとった。長期の実用価値が見込まれる領域での大学院教育プログラムのための「seed money」を提供する上記のグラントは授業料と生活支出も補助した。

院生への直接の補助は1970年代初めニクソン政権によって導入された科学のかなりの財政緊縮の最初の犠牲者であった。他の削減も直接社会科学、特に社会学をターゲットにしたものであった。この変化の性質は1930年代のロックフェラー援助の汚職事件を思い起こさせた。ピアによる評価に基づく社会科学の基礎研究への財政支援は、個別の社会問題への州の介入手段を見つけることに熱心な精力的な政治家が1960年代に作った有用な結果の約束による承認を常に受けたものであった。金のかかる政府の介入プログラムの結果についての懐疑が高まる雰囲気の中で、その約束は査定し直された。1960年代に社会学者によってなされた仕事はほとんど実用的な価値がないものと見なされた。それはちょうど1920年代後半から1930年代前半にロックフェラー財団の事務官から初期の仕事が不満なもので見なされたのと同じだった。ニクソン政権はNSFによって社会学に廻していた金銭の一部をRANN（ナショナルニーズに適用されるリサーチ）に充てることを提案した。この提案は社会科学研究資金給付に対する監督支配を強める始まりであった。それはNEHのような機関にまで及ぶこととなり、リーガン政権時に人文学のコアの外にある社会学のような学問の資金給付の大幅な削減につながった。他の機関でも、社会調査の支出の割合は削られた。かくして1960年代のブーム時に贅沢に花を咲かせた庭が鋤を入れられたのであった。

アカデミックな評価者の支配下での基礎研究から離れるシフトの直接の帰結のひとつは、連邦政府資金給付の代替源泉の探索であった。皮肉なことに、ファンドのひとつの源泉は社会科学のファンデングの削減理由の一部であった州介入への同じ不満であった。この源泉は連邦政府のソーシャルプログラムの有効性、非有効性を証明したいという願望に具体化された。官庁の記録に基づく計量的証拠を探す官吏（役人）の相性は、社会学者が評価リサーチプロジェクトをめぐる経理会社や他の研究者と競争した時期であった。クライアント中心

の旧式の社会調査のベテランであったラザースフェルドと弟子のコールマン、ロッシは、計量に定位した社会学者によって政策形成者によって提示される公準に経験的な正当性を与えるように設計された「政策調査」のスポークスマンとして登場した。

上記の活動は、ひとつには、これまでの期間に設置された大きな調査ショップに資金を確保するため、ひとつには、1970年代にアカデミック・ジョブ市場の崩壊に直面して社会学者に雇用を供給するために意図されたものであった。これらの試みは、社会科学の資金給付を救うための議会でのロビー活動の試みと同様、ASAの熱心な支持を得た。しかしこれらの試みは、コンサルタント機関に雇われた社会学者の小グループ、適切な設備を整えたショップを持つ少数の社会学者以外には決して適切ではなかった。いずれにせよ、上記の研究契約をめぐる競争という性格は上記のショップには有利ではなかった。むしろそれらが有利だったのは、ビュロクラートと強いコネを持つ、資金給付機関が政治的優先を変更する通りに関心をシフトする能力を持つワシントンに根拠地をおくりサーチユニットであった。結局アカデミックな社会学者はこれらの機関と競争できなかった。その上、契約によって要求される分析の種類は、社会学に独自の計量スキルを要求することはめったになかった。決定の代替肢の帰結の計量的推計を求められたところでは、計量経済学の方法がそれに向いていた。政府のデータの大規模な処理が求められたところでは、経理会社の方が備えに勝っていた。ジェネリックな行動科学リサーチのスキルが求められたところでは、心理学者、統計学者、さまざまな応用領域（公衆衛生）で訓練を受けた人物が十分に備わっており、専門技術を持ったより大きなオーディエンスとうまくコミュニケーションをとることができた。そして一般的には、サーベイ・リサーチ産業の登場がアカデミックな社会学者の特別な貢献を次第に重要でないものにしていった。市場、世論調査員のような社会科学方法の他の利用者は、レリバントな高度の技能知識を開発し行動科学者のスキルに依拠する必要がなくなった。

1970年代初期にその大半が着手されたグラントプログラム決定の大きな集団は社会学の登録に大きな影響を及ぼした。この時期以前に社会学科は残余社会科学として活躍し、老年学のようなトピック、プログラムに責任を負った。1970年代には、刑事司法（criminal justice）の沢山のプログラムが、学生の需要に支持された自立プログラムとなりそうなものにseed moneyとして役立つことが意図された特別のグラントのもとで創設された。非行を犯したものの保護観察と監督に関わる機関は、学位保有者を給与増加昇進にかかりやすくすることによって上記のプログラムの多くを財政援助した。上記のプログラムは数人の社会学者を雇い、社会学の伝統的源泉のひとつから学生を引き抜いた。上記の別個のプログラムの創設は大学院を通じて指導するコースからの学生の喪失を引き起こした。グラントがつけられていないアフリカ系アメリカ人（黒人）の研究、女性研究プログラムは、社会学の外に自分

たちの学問、組織、カリキュラムを開発する際にトピック的なプログラムを追い求めた。これらのプログラムの一部は存続できず、多くの場合当初のインセンティブや seed money が消滅したのと同時にプログラムも消滅した。一部の大学では、刑事司法プログラムは広範囲の公共部門にアクセスを与える一般教育学士号としての社会学のバカロレアの初期目的に奉仕し始めた。まだ刑事司法学士号 (criminal justice degree) は犯罪に関わる機関によって好ましい学位として扱われ、その保持者を一般の社会学の学士号保持者よりも有利に位置づけた。

同様の競争は 1970 年のブームの末期に登録の喪失に直面したソーシャルワーク (社会事業) 学科にも生まれた。過去にソーシャルワークの養成は大学院レベルでだけ与えられていた。社会学のバカロレアは連邦政府公認の共通学士号 (a common federal degree) として機能した。連邦政府によって支援されたプログラム (それは合衆国の福祉プログラムのすべてが含まれる) は、エントリー水準の位置の特化した号を持つ人物の雇用の優先を定めた連邦政府の規制を皮切りに始まった 1970 年代に、ソーシャルワーク学科はバカロレアに専門職の号を認定し始め、学生達を社会学の伝統的構成員のひとつから引き抜き始めた (Bromley/Weed 1979)。学生需要のこのシフトは 1970 年代末の学生的大幅な落ち込みを説明するものではない。にもかかわらず、それらは学生需要が 1950 年代の水準に戻ったことを意味した。社会学のプログラムは多くの学生にとって終着駅ではない。1950 年代にはなかった新しいプログラムが手頃な数の学生を惹きつけている。ようするに 1950 年代への復帰はありえない。今後の社会学の登録はさまざまな学生のミックスに基づかざるを得ないであろう。

### 組織資源の再分配

ASS と ASA の組織比較, 地区学会, 個別分野学会の簇生, 雑誌の簇生, 教えるカリキュラムの拡張 (略)

### シンボリックな資源の再分配

#### その 1: 機能主義を通じてのシンボリックな統合の試みとその後のカオス状況

モダン時代の開始期に機能主義がかくも成功を収めたのはなぜか。パーソンズ概念図式の内在的なアピールに加えて、機能主義の理想がありふれた説明パターンを正当化するフレームワークとして役立ったことがある。所与の現象の理論的分析は次のような簡単な形式を取った。第一印象に反してその現象がその一部として記述されうる「システム」の大きな「目的」と何らかの関連を持つことを明らかにする。それはそのような説明を発明することが容易であったし、結果を統計的に証明するためにリサーチ・プラクティスの支配的モデルを用

いることが同じく容易であった。「結果」を記録する相関技法に支えられた機能的説明は社会学者に社会生活の非常に多くの領域について述べる常識を越えた何かを与えた。

その方法と理論はある現象に学問的主張をする有用な工夫であったが、その方法も理論も強固にすることなしには増殖し得ないので累積的發展を方向付けなかった。実際所与の現象が社会的機能作用にどのように寄与するかに関する多数の仮説は社会学者が研究したほとんどどんなパターン、制度にも生成され得たが、これらは何らかの種類の機能作用のおおまかな考察が構築されうると仮定される部分説明に過ぎなかった。だが実はそのような機能的説明は往々にしてシステムの目的、要件の用語からの制度の再記述にすぎないものだったし、機能的説明を完了するために多くの異なった「システム」、「目的」、「系統的関連」像が用いられ得ることが明白となった。そのうえオペレーションリサーチ、サイバネテクス、情報理論、自己規制マシンのメタファーの流行がこれらの説明に「科学的」正当性を賦与したが、人々が様々な種類の機能主義者として自らを誇示し始めるにつれて同時に多様性も加わった。それによって上記の択一イメージが決定的に拒絶されるか強固にされる言説手段がほとんど存在しない。せいぜい他の説明が合致することか、より広い事実集合と関連することが証明されるに過ぎない。しかし大ていは、説明は排除によってでなく、吸収併合によって変化した。

1959年のキングスレイ・デーヴィスのASA会長演説の時期までは、機能的説明を社会学的説明と同一視すること——機能主義が独自の社会学的説明を代表するというのは神話である——が可能であった。だが上記の自信に満ちた主張が発せられたまさにそのときに、構造機能主義の支配はアメリカ社会学の中で次第に挑戦を受けたのであった。例えば1940年代末にブルマーによって独自の「見地」に転換されたシンボリック相互作用主義は、常識を越えた仕方であらゆる素材を素早い再記述を与えるために用いられる語彙であった意味で、機能主義に似ていた。機能主義のように、シンボリック相互作用主義は教えるのが容易で学生を虜にした。

シンボリック相互作用主義のほかに、1960年代初めに個別の社会パターンによって奉仕される「目的」の特定に関してのみ機能分析としばしば異なっていたものの、マルクス流の分析のひとつのリバイバルがあった。パーソンズ理論に対する「闘争」（理論による）批判が優勢となった。この理論はロックウッド（1956）、ダーレンドルフ（1958）のヨーロッパ人と、少数のアメリカマルキスト（e.g. ミルズ（1959））によってリードされた。上記の批判の中身は多様であったが1960年代に争点は次のようにルーチン化された。批判者によれば、機能主義は現状を擁護するイデオロギーであり、不平等、権力、強制、対立、変動に十分な概念的注目を払わない。その結果は機能主義批判とニューレフトの同一視であった。学生を魅了することによって一時的に批判者を助けるアイデンティティであった。しかし長期的な帰

結は、説明の理想として「変動、権力、対立の考察」を支持するある様式のメタ理論的批判の確立であった。

1960年代が進むにつれ、また「闘争」理論による批判が他の内容批判や論理批判と合流する<sup>13</sup>につれて、パーソンズ流機能主義は熱が冷め始めた。機能主義が衰退を始めると、機能主義批判の先頭にいた旧来のパースペクティブは様々の方向に分裂し始めた。それに加えて非常に様々の新しいパースペクティブも登場した。その最終結果は、機能主義の短い期間の支配のあと、折衷、多様、論争、辛辣の時期がアメリカの理論を特徴づけるようになったことである。

この30年以上にわたって、理論社会学は数多くの方向に動いてきた。ひとつの方向は、個別分野理論の引き続きの繁茂をめぐる展開である<sup>14</sup>。犯罪、非行、性役割、貧困、家族、フェミニズム、都市生態学、態度変容、集団力学、人口統計の推移、人格、経済成長、世界システムの力学、社会の革命、帝国の勃興と崩壊、民族関係、階級関係、政治エリート、組織の成長、感情等社会学のほとんどすべての下位分野の構造と過程と現象についての理論である。個別分野理論のこの繁茂はもちろん第二次世界大戦以前の遺産の延長である。それはスペンサーと有機体論の没落のあとアクションアプローチに向かっただけでなく、個別のトピックに関する理論に狭まってきた。

もう一つの方向は、実質的トピックを横断するもっと一般的な統合理論の発達である。これらの理論は包括的であると主張するが、実際には、理論家が自分たちのアプローチはすべての実在を説明し、唯一の適切な理論戦略であると主張するのしばしば行き過ぎである。複数のオリエンテーションの存在が理論統合を達成することの難しさを物語っている。そのうえ、様々のオリエンテーションの提唱者はしばしばお互いを疑いの目で見ている。

さらにもう一つの方向はメタ理論で、これはある意味で現在の理論の多様性に対処する努力を代表している (Ritzer 1975, 1989)。ここでは学者は既存の理論を分析し、その前提、認識論、存在論、形而上学を抽出する。このメタ理論化はすべての理論のための一般的な指針を作り出す試みを伴っている。ある意味でメタ理論は現行理論の断片性と多様性を承認して、その状況を何かをしようと試みるものである。しかしメタ理論家の助言は、しばしばやや曖昧で一般的で、性質が雄弁である (アクトとインタラクションと構造と文化を研究する)。結果としてメタ理論家は主として互いに語りかけ、そこで統合の試みとしては成功を取ってきていない。

残る最後の方向は、既存の理論オリエンテーションを拡張する試みか、より折衷的で他の

<sup>13</sup> そのレビューとして J.H. Turner 1986 ; Turner/Maryanski 1979 参照。

<sup>14</sup> ターナーは「あなたのお気に入り内容のトピックを取り上げる理論」と呼んでいる (1985)。

理論的オリエンテーションの諸要素を総合しようとする新しい理論的オリエンテーションを作ろうとする試みである。英国の社会理論家アンソニー・ギデンズはヨーロッパにおいてよりもアメリカにおいてはるかに受容的聴き手をもっている。彼の構造化理論は、非常に両立が難しいと思われるアプローチを一緒に束ねる。しかしこの折衷理論でさえ、ギデンズの場合に当てはまるように、すべての実証主義者、彼が借用する卓越した理論家に反感を持つ陣営を作り出す。似た宿命は総合を求める他の人々にも見舞われる。彼らは自分たちのアイデアの不適切な使用によって非難される非常に奇妙な同床の仲間の幾つかのアドホックな連携に何とか敵対しようとする。

上記の最近の総合理論やメタ理論化の今日の人気は何らかの種類の概念的統一の渴望を合図しているものの、これまでの試みは成功を取めてきていない。彼らが転向者を獲得したとしても500~600のかなり小さな集団である。その結果、大半のアメリカの社会学者、特に調査に志向した社会学者は一般理論化からの曖昧で、抽象的で、わかりにくい声明に対して注目を払ってこない。もし彼らがいやしくも理論に目を向けるならば、経験的調査者は一般理論家のより統合的試みよりも狭い理論の方にはるかに幸せを感じるだろう。

ポスト・パーソンズ期は「理論家の理論」と「調査者の理論」の亀裂の拡大をみせた。そのうえ理論内部の多様な仕切りの広がりも見られた。新たな仕切りは内容的コミットメントだけでなく、戦略的、哲学的コミットメントをも反映している。ある者は、人間組織の法則が開発できると信じ、他の者は、人間組織の性質そのものを人間によって変更することができるもの、従って恒常的な法則には従わないと見なす。ある者はメタ理論に賛成し他の者は命題の演繹体系に賛成し、さらに他の者は言説分析に賛成し、また他の者はフォーマルモデルに賛成する。ある者は理論はミクロな過程から始めねばならないと述べ、他の者はその逆であると述べる。それゆえ調査者が彼らの手を理論家に任せ、自分はデータ収集に従事するのは驚かない。

しかし理論と調査のこの分裂は社会学が分化するに留まるだけでなく、知的にも断片化するに留まるだろうことを約束するものである。調査者と理論家はめったに互いに語りかけず、理論社会学内部でも尽きることのない論争がみられる。この状況は、組織資源、物質資源、声望資源の分散によって維持強化されている。例えば、ASAの構造は組織ヒエラルキーに定性的調査より計量的調査への偏向がみられるものの、あらゆる人々をアコモデートしようと努めている。ASA内部には非常に多様なアプローチのための部会が存在するが故に、妥協、総合、コンセンサスを求めることは不要であり、ASAがひとつのアプローチをアコモデートできなくとも、それをアコモデートできる個別分野雑誌と学会が存在する。かくして知的な多様性とアメリカ社会学の組織はお互いに強化しあっている。

理論的アプローチの多様性に反映された資源のこの分散に鑑みれば、アメリカ社会学が自然科学のように理論的に統一されることは無理であろう。本書のタイトルを裏書きする事実である。この多様性のひとつの兆候として、多くの理論家は成熟科学のこの基準が社会学にレリバントすることに疑問視するだろう。アメリカ社会学に知的な統一が起こるとすれば、それは理論を通じてではなく、今世紀の計量的方法の登場を通じてである。

## その2：多変量法を通じてのシンボリックな統一の試み

1960年代の膨大で空前の院生の登録は社会学者が学生に関してもっと選抜的にさせ、ある程度今まで以上に選抜性が存在したが、この選抜性は特異な分布をもたらした。院生レベルでの選抜がなされる基準が一般的な文化的リテラシーよりもむしろ、統計学的能力となる傾向があった。そのうえテニユアの水準でも同じ種類の選抜が起こった。多くのアメリカの大学はこの時期に相対的な地位の上昇の野心を持ち、「論文を書かなければ消えろ」システムを敷くことによってこれを追求した。これはアカデミック革命の鍵であり、いままで以上にマイナーな大学の教員を全国的な学問基準の影響下に置くことになった。このシステムは著名な社会学雑誌に沢山の論文を載せる能力のある社会学者に有利に働いた。

上記の雑誌のスペースをめぐる競争は統計的業績に非常に有利な新しい現象であった。論文が統計的でルーチンになるほど、主要雑誌に掲載される傾向が強くなった。マイナーな雑誌まで威信のある雑誌を見習いはじめ、その結果社会学の論文は主要な雑誌もマイナーな雑誌も同じ様相を呈するようになった。著者の観点では上記の論文の受諾は批判からより容易に防衛されることになった。社会諸科学の各々において、雑誌のベッキングオーダーが確立され、雑誌はリスペクタブルな掲載記録に野心のある著者とベッキングオーダーのなかでの自らの位置に関心のある編集者の双方によってベッキングオーダーの観点から価値づけられた。

人はかくしてベストな雑誌における統計的性格をもつ成果の比率の急速な増加とこの新しい競争環境の大学院プログラムへの影響の複雑な知的な理由を挙げる必要はない。プロフェッションの中で自らの位置を維持したい防衛者は上記の論文を産出できる若い社会学者を雇い、指導的な大学の院生がこの種の論文を産出できることを保証する大学院要件の変更で賛成した。これらの変更は今度は上記の方法で院生を訓練できる若い教員の採用を要求し、上記の教員をめぐる争奪が一層その要件の極端な増加をもたらした。ベストな雑誌のスペースをめぐる競争の高まりは申請される作品の統計法の洗練をエスカレートさせた。結果として社会科学の大学院教育の統計的内容の増加を訴えた1930年代のSSRCの目標は最終的に叶えられたのである。

しかしながら、分野のヒエラルキー的区別と統計的方法への依拠の高まりのタイアップの帰結に複合が現れている。統計の使用、特に社会学を「科学」にする希望を統計学と一体視することに関する、賛成反対する旧来からのイデオロギー的理由が存在する。これらはすでに学部の政治闘争に見られた。1950年代はシカゴ大学で学部の支配をめぐる激しい闘争を見、統計に志向した社会学者が勝利した。1960年代は学部内で統計学の要件をめぐる闘争が繰り広げられ、その社会学への関心が内容的でときに実践的ないし理論的な学生によって不満を抱かれた。かれらはしばしば一致した要求であると知覚されたもののレリバンスに気づくことができなかった。その上、上記の新しい基準に同調しなかった教員はしばしば学科の調和を犠牲にしてそれらに反対した。最も熱心な統計法の支持者は反対を排除し、反対を「非専門的」、無能と定義する野蛮な試みに荷担した。

学科内の政治闘争は社会科学の性質をめぐる論争と批判的文献の創出に寄与した。この批判的文献の大半は「実証主義」の考え方を中心とした。ここに大きな皮肉が存在する。なぜなら科学の道としての統計的方法の信仰という先行物はインスピレーションにおいて元々実証主義ではなかったから。当時の卓越した「実証主義」哲学者であるカール・ヘンペルの標準的な議論は当時の非理論的統計的業績に対する批判として容易に読むことができた。いずれにせよ批判者がすぐに気づいたように、社会学の科学的地位を否定する「反実証主義的」哲学の膨大な意見群が社会学外に存在した。その上、個別の内容的な問題に関心のある多くの社会学者にとって、計量的方法の登場は無縁のもの外部的なものと体験され、ナショナルな学問からの疎外感をエスカレートさせた。当時の基準によって十分に訓練を受けた社会学者ですら、自分たちのスキルが急速に時代遅れになり、自分の分野で最も威信の高い雑誌の掲載論文も近づきたいものになった。

1950年代末に2つの系譜が互いに顔をつきあわせた。ランダムな分布とランダムでない分布間で、典型的には2×2表で差異を立証するフィッシャーの系譜。それと相関分析の復活した形態。サミュエル・スタウファーはかれの最後の著述のひとつで、代替物の近年の歴史を次のように描写した。

過去10~20年の間に、その数学的有利さの一部にも拘わらず、相関のような伝統的な技法の一部からの離反が見られる。付加変数が導入されるにつれて（しばしば各変数をほんの2つか3つの大まかなカテゴリーを持つものとして扱う）連続的にデータを細分したり再細分する方向に向かう傾向が認められる。…

しかしながら、他の方向に向かう別なトレンドも存在する。高速のエレクトロニック・コンピューターマシンの使用の増加がそれである。新しいコンピュータのプログラ

ミンクの訓練はいまや我々の院生の多くがもつ体験の一部である。IBM モンスターのひとつは一時間に ASA の相関係数の巨大なマトリックスを産出する。デスク計算では一人の書記が1年を要するであろう (Stouffer 1963 : 74-75.)。

代替肢の第一のものは生み出すことが容易である。要求される技術はカードソーターと計算器である。1960年代半ばになってようやく、学科は学生が博士論文や研究論文のためのデータ提示をメーキャップする数ダースの表を生み出すために、マスターし使用することが期待される上記の工夫を含む「統計ラボ」をもった。学生達はしばしば自分たちでデータを集めた。心理学と同様、「社会心理学」のプログラムを共有する社会学科は、初級コースの学生を質問紙研究の被験者として使用した。学生がアシスタントとして働く研究資金のついたサーベイプロジェクトから得た、他のローカルに生成されたサーベイデータが利用可能で、この材料が典型的な博士論文の主題であった。それはひとつの因果解釈が施される帰無仮説を検証する。利用できるデータは代理コントロールとして働く人口統計学的変数や何らかの社会的バリエーションの帰結である投入変数と産出変数を含む。説明のバリエーションが質問紙の回答に基づいて尺度、宗教、アノミーその他の態度特性が形成される。

従来 0.05 水準で有意として扱われる差異はポール・ミール (1986) が指摘するように、発見が容易である。上記の「テスト」で棄却される帰無仮説はほとんど常に文字通り誤りか誤りであることがリーズナブルに予想される。問題の変数はお互いにあるいは大多数の他の未測定ないし含まれない変数との関連でランダムには分布していなかった。事例の数が多いほど、上記の関連は「有意」となる傾向が強まる。「差異」を発見することは、社会学のプロジェクトではめったに当てはまらないが、人が唯一の統計的にそして因果的にレリバントな変数を同定したと信じる明確な根拠を持たないならば、ほとんど価値がない。驚くなかれ、「結果」は増殖したのである。

サーベイのための研究資金の入手しやすさ、この種の統計法を用いての「結果」の生成の容易さ、データのアクセシビリティ、緩い測定慣行、テクノロジーのアクセシビリティは、この種の業績のための雑誌市場があふれていることを意味する。多くの研究領域において統計方法の沢山の気まぐれが起こっている。この流行は、流行をセットする人物がリーダーシップを維持することができる事実によって助けられるのに対して、中心でない制度にいる他者が追いつくことに努力を投資しても彼らが多額を払って獲得した技能が今では時代遅れなことに気づく。

威信の高い雑誌でスペースを競う競争の見地からは、方法の他の特性がレリバントである。第一に、新奇の統計方法はしばしば文献ではうまく描写されないで、当初は少数学科の少

数の社会学者に限られる。第二に、統計方法は大半の実践的な社会学者のテクニカルな訓練の多くを時代遅れのものにしてきた。さらに方法そのものをマスターするのに必要な投資に加えて、ユーザーはコンピューテーションに必要なコンピュータ技法をマスターしなければならなかった。最後に、完全な利用のためには、統計方法は個人が通常有意なグラントの支援がなければ集めることができないデータを要求する。

これは当初は大きなデータ群を開発するための研究資金にアクセスを持つ大学がそれほど備わっていない大学より有利であることを意味した。しかしその方法の主要な使用は既存データの二次分析であることが判明し、開発は他の様々なトレンドと関連している。例えば、実験社会心理学の一般的衰退、サーベイのコストの増大。

最後に挙げた発展は重要である。社会学にとっての研究資金をめぐる雰囲気はニクソン大統領時代の1970年代に劇的に変化し、その結果個々の社会学者はNORC（国立世論研究センター）のGSSのような集散的に収集されたデータに依拠することを強いられた。上記の新しい環境の下での競争する主要な手段は新しいデータの膨大な収集よりむしろ、既存データ、他の目的のために収集されたデータを分析するための技法の洗練である。成功するためには、人は通常の構造方程式ではなしえない差をつける方法、欠損値を補償する方法を必要とする。そしてこれらの洗練は1970年代1980年代の方法論者を虜にしたものである。

上記の方法の独占は決して絶対的なものでなく、言い換えれば価値をおかれた分析方法は凝集する全体（a cohesive whole）を形成しない。様々な計量的系譜を含むさまざまな方法的系譜が1960年後も生き延びてきている。ラザースフェルドはレオ・グッドマンの分割表法リバイバルは正しい道だと信じたし、ネットワーク分析はブロックモデリングのような短命に終わった沢山の工夫を生み出した。幾つかの仕事は経済モデルでなされてきているし、JMS誌はフォーマルなモデルの成果を発表し続けている。参与観察のような定性的方法は社会学のプレステージの高くないリーチの中ではあるが、生き延びてきている。

### 組織の略号

- ASA American Sociological Association アメリカ社会学会
- ASS American Sociological Society アメリカ社会学会 1959年にASAに改称
- SSRC Social Science Research Council 社会科学リサーチ協議会
- NSF National Science Foundation 米国科学財団
- BASR the Bureau of Applied Social Research 応用社会調査研究所（コロンビア大学）
- ISRR the Institute for Social and Religious Research 社会宗教研究所
- ISR the Institute of Social Research 社会調査研究所（ミシガン大学）
- NORC National Opinion Research Center 全国世論調査センター（デンバー→シカゴ大学）
- NIH National Institute of Health 国立衛生研究所

NIMH National Institute of Health 国立精神衛生研究所  
 SRA Sociological Research Association 社会学リサーチ学会  
 NEH National Endowment for the Humanities 人文学のための国立基金  
 RANN Research Applied National Needs ナショナルニーズの適用されるリサーチ  
 GSS General Social Survey 総合的社会サーベイ

文献一覧

- Adorno, T.W./Else Frenkel-Brunswick/D.J. Levinson/R.N. Sanford** 1950 *The Authoritarian Personality*. New York : Harper
- Bannister, Robert C.** 1987 *Sociology and Scientism : The American Quest for Objectivity, 1880-1940*. Chapel Hill : Univ. of North Carolina Press.
- Barton, Allen H.** 1982 “Paul Lazarsfeld and the Invention of the University Institute for Applied Social Research.” in : Burker Holzner/Jiri Nehnevajsa (eds.) *Organizing for Social Research*. Cambridge, MA : Schenkman.
- Black, Max** 1961 *The Social Theories of Talcott Parsons*. Englewood Cliffs, NJ : Prentice Hall.
- Blau, Peter M./Otis D. Duncan** 1967 *The American Occupational Structure*. New York : Wiley.
- Blumer, Herbert** 1969 *Symbolic Interactionism*. Englewood Cliffs, NJ : Prentice-Hall.
- Bulmer, Martin** 1984 *The Chicago School of Sociology : Institutionalization, Diversity, and the Rise of Sociological Research*. Chicago : Univ. of Chicago Press.
- Buxton, William/Stephen Turner** 1992 “From Education to Expertise : Sociology as a Profession.” in : Terence C. Halliday/Morris Janowitz (eds.) *Sociology and Its Publics*. Chicago : Univ. of Chicago Press. pp. 373-403.
- Camic, Chaeles** 1979 “The Utilitarians Revisited.” *American Journal of Sociology* 85 : 516-550.
- Chapin, F.Stuart** 1911 *Education and the Mores : A Sociological Essay*. New York : Columbia Univ. Longmans Green.
- Clowse, Barbara Barksdale** 1981 *Brainpower for the Cold War : The Sputnik Crisis and National Defense Education Act of 1958*. Westport, CT : Greenwood Press.
- Collingridge, David/Colin Reeve** 1986 *Science Speaks to Power : The Role of Experts in Policy-making*. New York : St. Martin's Press.
- Converse, Jean** 1987 *Survey Research in the United States. Roots and Emergence 1890-1960*. Berkeley : Univ. of California Press.
- Dahrendorf, Ralf** 1958 “Out of Utopia : Toward a Reorientation of Sociological Analysis.” *American Journal of Sociology* 74 : 115-127.
- Davis, Kingsley** 1959 “The Myth of Functional Analysis in Sociology and Anthropology.” *American Sociological Review* 24 : 756-772.
- Ellwood, Charles A.** 1938 *A History of Social Philosophy*. Englewood Cliffs : , NJ : Prntice Hall.
- Ford Foundation** 1949 *Report of the Study for the Ford Foundation on Policy and Program*. Detroit : The Ford Foundation.
- Fosdick, Raymond B.** 1952 *The Story of the Rockefeller Foundation*. New York : Harper & Brothers.
- Furner, Marry O.** 1975 *Advocacy and Objectivity : A Crisis in the Professionalization of American Social Science*. Lexington : Univ. Press of Kentucky.
- Gross, Llwellyn** (ed.) 1959 *Symposium of Sociological Theory*. New York : Harper & Row.
- Heeren, John William** 1975 “Functional and Critical Sociology : A Study of Two Groups of Contemporary Sociologist.” Ph.D dissertation, Duke University.
- Klausner, Samuel Z.** 1986 “The Bid to Nationalize American Social Science.” in : Samuel Z. Klausner/Victor M. Litz (eds.) *The Nationalization of American Social Sciences*. Philadelphia : Univ. of Pennsylvania Press. pp. 3-29.

- Lipset, Seymour/Martin A. Trow/James A. Coleman** 1962 *Union Democracy: The Internal Politics of the International Typographical Union*. Garden City, NY: Doubleday.
- Litz, Victor M.** 1986 "Parsons and Empirical Sociology." in: Samuel Z. Klausner/Victor M. Litz (eds.) *The Nationalization of American Social Sciences*. Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press. pp. 141-82.
- Lockwood, David** 1956 "Some Remarks on 'The Social System'." *The British Journal of Sociology* 7: 134-146.
- Meel, Paul** 1986 "What Social Scientists Don't Understand." in Donald W. Fiske/Richard Sweder(eds) *Methodology in Social Science. Pluralism and Subjectivities*. Chicago: Univ of Chicago Press. 315-338.
- MacIver, Robert M.** 1944 *Social Causation*. Boston: Ginn.
- Merton, Robert K.** 1947 "Selected Problems of Field Work in the Planned Community." *American Sociological Review* 12: 304-312.
- 1948 "Discussion." *American Sociological Review* 164-168.
- Merton, Robert K./Daniel Lerner** 1951 "Social Scientists and Research Policy." in Daniel Lerner/Harold D. Lasswell. (eds.) *The Policy Science*. Stanford: Stanford Univ. Press.
- Mills, Wright C.** 1959 *The Sociological Imagination*. New York: Oxford Univ. Press.
- Myrdal, Gunnar** 1962 *An American Dilemma: The Negro Problem and Modern Democracy*. New York: Harper & Row.
- Nelson, Lowry** 1969 *Rural Sociology: Its Origin and Growth in the United States*. Minneapolis: Univ. of Minnesota Press.
- Oberschall, Anthony** 1978 "Paul Lazarsfeld and the History of Empirical Social Research." *Journal of the History of the Behavioral Sciences*. 14: 199-206.
- Parsons, Talcott** 1937 *The Structure of Social Action*. New York: McGraw-Hill.
- 1948 "The Position of Sociological Theory." *American Sociological Review* 13: 156-164.
- 1951 *The Social System*. New York: The Free Press.
- 1959 "Some Problems Confronting Sociology as a Profession." *American Sociological Review* 24: 547-559.
- 1968 *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to a Group of Recent European Writers*. New York: The Free Press.
- 1986 "Social Science: A Basic National Resource." in: Samuel Z.Klasner/Victor M.Litz (eds.) *The Nationalization of the Social Sciences*. Philadelphia: Univ. of Pennsylvania. 41-112.
- Parsons, Talcott/Edward A. Shils** (eds.) *Toward a General Theory of Action*. New York: Harper & Row.
- Riesman, David** 1950 *The Lonely Crowd: A Study of the Changing American Character*. New Haven, CT: Yale Univ. Press.
- Sills, David L.** 1987 "Paul Lazarsfeld 1901-1976." *Biographical Memoirs*. 56: 251-282.
- Sorokin, Pitirim A.** 1937 *Social and Cultural Dynamics*. 4 vols. New York: American Books.
- Social Science Research Council.** 1983 "Research Support and Intellectual Advance in the Social Sciences." *Items*37 (2/3): 33-49.
- Stouffer, Samuel A.** 1950 "Some Observations on Study Design." *American Journal of Sociology* 5: 355-361.
- 1963 "Method of Research Used by American Behavioral Scientists." in Bernard Berelson (ed.) *The Behavioral Science Today*. New York Basic Books. pp. 65-76.
- Stouffer, Samuel A. et al.** 1949 *The American Soldier*. Princeton, NJ: Princeton Univ.Press.
- Turner, Jonathan H.**1985 "In Defense of Positivism." *Sociological Theory* 3: 24-30.
- 1986 *The Structure of Sociological Theory*. 4th ed. Chicago: Dorsey Press.

- Turner, Jonathan H./Alexandra Maryanski** 1979 *Functionalism*. Menlo Park CA : Benjamin Cummings.
- Young, Donald** 1948 “Limiting Factors in the Development of the Social Sciences.” *Proceedings of the American Philosophical Society* 92 : 325-335.
- Zetterberg, Hans L.** 1956 *Sociology in the United States of America : A Trend Report*. Paris : UNESCO.

#### 訳者あとがき関連

- Bulmer, Martin** 1994 “The Institutionalization of an Academic Discipline.” *Social Epistemology* 8 : 3-8.
- Camic, Charles** 1994 “Reshaping the History of American Sociology.” *Social Epistemology* 8 : 9-18.
- Demerath, Jay** 1994 “Nineteenth Century Visions and Twentieth Century Realities.” *Social Epistemology* 8 : 19-25.
- Schuman, Howard** 1994 “Possible Science, Impossible Discipline.” *Social Epistemology* 8 : 27-33.
- Turner, Jonathan** 1994 “Further Reflections on Sociology as ‘the Impossible Science.’” *Social Epistemology* 8 : 35-40.
- 1998 “The Disintegration of American Sociology.” *Sociological Perspectives*. 32(4) : 419-433.
- 2006 “American Sociology in Chaos. : Diffrentiation without Integration.” *American Sociologist* 37(2) : 15-29.
- Turner, Stephen** 1987 “Cause, Measure and the Underdetermination of Theory by Data.” *Revue internationale de sociologie* (Nouvell series) 1(3) : 249-271.
- 1994 “The Origins of ‘Mainstream Sociology’ and Other Issues in the History of American Sociology.” *Social Epistemology* 8 : 41-67.
- 2005 “High on Insubordination.” in Alan Sica/Stephen Turner (eds.) *Disobedient Generation*. Chicago : Chicago Univ. Press pp. 285-308.
- 2014 *American Sociology : From Pre-Disciplinary to Post-Normal*. Palgrave Macmillan.

#### 【訳者あとがき】

訳出したのは、1990年刊行、Stephen TurnerとJonathan Turner共著のSage出版、*The Impossible Science. An Institutional Analysis of American Sociology*の第3、4章である。訳出した部分は太字の箇所である。ただし4章は部分訳である。ボリュームにして200頁のうち74頁にあたる。

Preface

Ch.1 The Academicization of Reform : American Sociology Before World War I

Ch.2 The Focused Replaces the Grand : American Sociology During the Interwar Years

**Ch.3 The New Optimism : American Sociology After World War II**

**Ch.4 The “Golden Era” and Its Aftermath : American Sociology Today**

## Ch.5 Possible Sociologies, Recalcitrant Worlds : Conclusion

本書は、アメリカ社会学は創設以来決して安全な資源基盤を持ったことがなく、絶えず変化していること、その結果アメリカ社会学はシンボリック、組織的、物質的に自らを固めたことがないことを明らかにしている。アメリカ社会学史の初期においては、コロンビア大学とシカゴ大学の社会学科が支配したこと、1930年代の大恐慌が教員のリクルートメントに与えた影響、第二次世界大戦前の社会学の珍しい年齢構成、すなわち創世世代の退職、死去によって非常に若い世代がリーダーシップを握ったこと、スプートニクショック後15年間に大量の研究資金の流入、社会学登録者数の急増、70年代以後の学生の反乱、社会学人気の低落混迷と続く内容が興味深く語られている。

アメリカでは本書の書評シンポジウムが行われ、非常に反響を呼んだのであるが、日本で本書に触れたものを訳者は寡聞にして知らない。シニアオーサーのジョナサンは、1974年初版から7回も版(2012)を重ねる現代社会学理論学説のテキスト(*The Structure of Sociological Theory*)の執筆者でよく知られている人物であるだけに不思議である。

訳者がこの部分を訳出箇所を選んだのは、戦後直後から60年代までの興隆と、70年代から80年代半ばまでの瀕死の状態までを扱っているからである。興隆を扱った部分は、ハーヴァード大学のパーソンズ、スタウファー、コロンビア大学のラザースフェルド、マートンに焦点を置いて扱っている。

シニアオーサー ジョナサン・ターナーは1942年生まれで、1968年にコーネル大学から博士号を受け、1969年より現在までカリフォルニア大学リバーサイド校教授である。ジュニアオーサー ステフェン・ターナーは1951年生まれで、1975年にミズウリー大学から社会学の学位を受け、1975年より現在までサウス・フロリダ大学に勤務、1987年に大学院教授(哲学担当)に昇格している。

本書の出版のそもそもの発端は、ポーランドで(ポーランド語)で各国社会学史シリーズを出す企画で監修者からアメリカ編の担当を依頼されたジョナサンが、方法論、調査史の部分をステフェンに依頼してきたことである。ポーランド版の単なる英訳でなく、それと別にアメリカの読者向けに書き下ろされたのが本書である。

両者の分担、どこの章は主に誰が執筆したかいつさい明示されていない。しかし推測はできる。ジョナサンには、本書の縮刷版のようなアメリカの社会学史についての論文がある(Jonathan Turner 1989, 2006)。本書の分析枠組みのバックボーンである、物質資源(財団研究資金の給付、学生院生の入学者数)、組織資源(アメリカ社会学会、大学の威信ヒエラルキー)、象徴的資源というフレームはジョナサンのものであることが、そこから把握できる。

ステフェンの担当箇所は、彼の自伝 (Stephen Turner 2005) に、方法論、統計分析家、計量分析家の部分をジョナサンから依頼されたことを述べている。さらに本書の誌上合評会で 4 人のコメンテーターの書評に執筆者を代表して応答している。ジョナサンのリプライは短く、コメントに反論はなく、自説の補足に留まる短いものなのに対して、ステフェンは長文のリプライを寄せ、この書物の隠れたメインメッセージと 4 人のコメンテーターの注釈に詳細に反論している。あたかも彼の単独著作の観がある。

書名の「不可能な科学」という言葉が何を指すか。それはアメリカの社会学の歴史が科学理論になろうと目指したが、それが挫折してきたことを伝えようとするのが趣旨であるが、わたしはいまひとつ、概念定義、分類、記述段階にとどまる社会学を、科学的理論を持つ段階につり上げようとする、つまり自然科学にあやかろうとするジョナサンと、その悲願達成は土台無理と判断するステフェンの不協和音を暗示しているものとしても受け取る。ジョナサンは、社会学の知識の累積、原理法則の抽出、その工学的利用を目指している。ステフェンは社会学が自然科学のようにはなれない、また目指してもできないからあきらめるべきという立場である。不可能な科学という題は、ステフェンの主張を述べたものである。ステフェンは、ジョナサンの目指す、ゼッターバーグ、ホームズ、ブラウ、バーガー地位衡平論等の命題、変数、相関の定式化をカリフォルニア大学派理論構築 (カリフォルニア派実証主義) を批判する論文の著者でもある (Stephen Turner 1987)。ジョナサンの知識の累積化、理論原理の開発の概要については、拙稿「ジョナサン・ターナーによる社会的実践における社会学理論の応用」(東北学院大学教養学部論集 154 号) がある。これはリッツァー編「社会学理論の百科事典」所収のチャールズ・パワース執筆項目「ジョナサン・ターナー」とジョナサンの「理論と調査と応用の連結」の試論 (1998, 2001, 2008) を適宜抜粋して編集したものである。

ステフェンについては、アメリカの戦前の社会学者、特に社会統計学 (因果性、相関分析)、計量社会学 (測定) に精通している印象を持っている。有機体論、目的論、機能主義についても、社会科学哲学の発展史から考察している。ステフェン論文の唯一の邦訳として、拙稿「沢山のアプローチがあるが、成果は少ない—マートンとコロンビア学派の理論構築モデル」(東北学院大学教養学部論集 163 号) がある。これは、ラザースフェルド、マートン、ゼッターバーグ、サイモン、ネーゲルら 50 年代のコロンビア大学学者サークル (その薫陶を受けた弟子達のコロンビア学派と別) を批判的に考察したものである。

本稿の原稿締め切りまで 3 週間の時点で、ステフェン・ターナー著 *American Sociology: From Pre-Disciplinary to Post-Normal*. Palgrave Macmillan 出版が刊行された。この書物は *The Impossible Science* の続編として位置づけられている。前著が 1990 年の刊行で、それから 25

年が経ち、その後 25 年のアメリカ社会学の動向を追加している。前半では前著の内容をステフェンが単独で新たに要約し、後半が 90 年以降の動向の描写である。下記に掲載目次の太字部分が前著にない内容を扱った部分である。この 25 年は、80 年代半ばに瀕死の重傷を負った社会学が持ち直し、学部、大学院の社会学専攻登録者が男性より、女性が圧倒的に多いこと、女性の博士学位取得者が増えたにも拘わらず、大学の教員になる比率はそんなに増えないこと、ASR, AJS に掲載されるフェミニズム、女性研究者の論文掲載率がきわめて低いこと、それが女性研究者の団結をうみ、旧態依然たる学会、学部に変革を迫る圧力になっていること、エリート大学（トップ 20）ほど旧態依然たる傾向が強いことが述べられている。

#### Introduction

Ch.1 Pre-Academic Reformism and the Conflict between Advocacy and Objectivity until 1920.

Ch.2 The Revolution of the 1920s and the Interwar Years

Ch.3 The Postwar Boom

Ch.4 The Crisis of the 1970s and Its Long-Term Consequences

Ch.5 The Near-Death Experience and Its Consequences

**Ch.6 Feminization, the New University Environment, and the Quest for a Sociology for People**

**Ch.7 The Elite and Its Power**

**Ch.8 Activism, Professionalism, or Condominium ?**

本訳稿がきっかけとなって、90 年の共著、14 年のステフェンの著書への日本の社会学者の関心が呼び起こされることを祈念して、擱筆することとする。

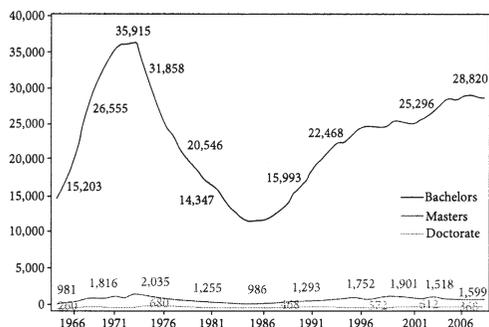


図 5.1 社会学学士号修士号博士号取得者数, 1966-2009 (2014 : 57)

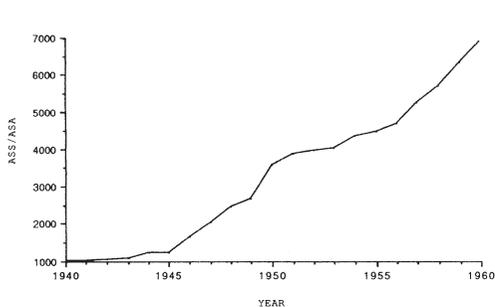


図 3.4 アメリカ社会学会会員数 1940 年から 1960 年まで (p. 89)



図 4.8 アメリカ社会学会会員数 1960 年から 1987 年まで (p. 141)



図 4.1 社会学への連邦政府からの研究資金給付額 (p. 135)

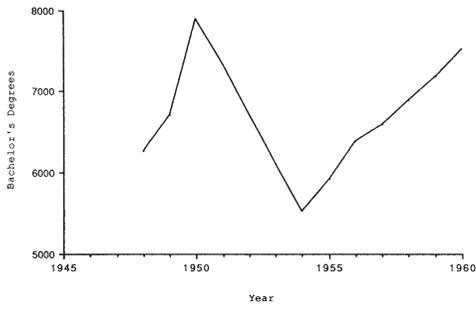


図 3.1 社会学学士号取得者数 1945 年から 1960 年まで (p. 86)

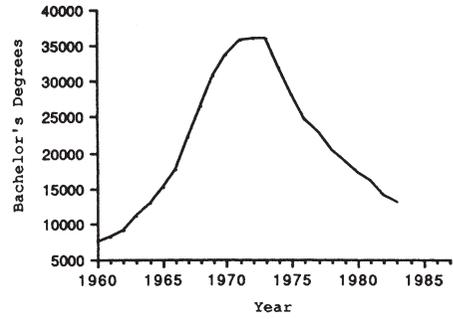


図 4.7 社会学学士号取得者数 1960 年から 1983 年まで (p. 141)



図 3.2 社会学博士号取得者数 1945 年から 1960 年まで (p. 87)

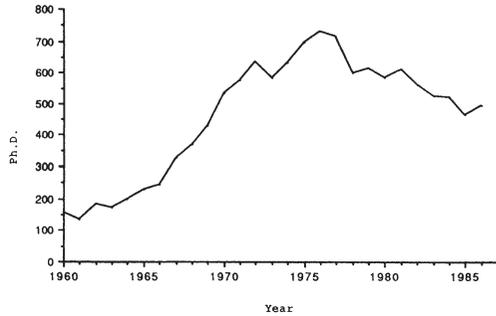


図 4.5 社会学博士号取得者数 1960 年から 1987 年まで (p. 139)



図 3.3 社会学修士号取得者数 1945 年から 1960 年まで (p. 88)

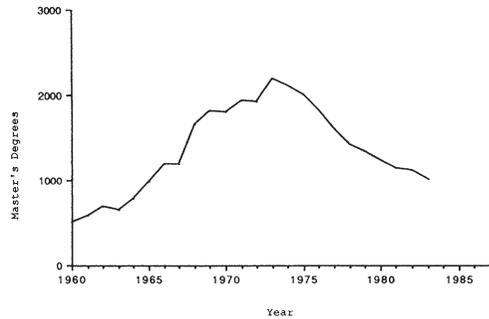


図 4.6 社会学修士号取得者数 1960 年から 1983 年まで (p. 140)

平成 25 年度 東北学院大学学術研究会評議員名簿

会 長	松本 宣郎
評 議 員 長	加藤 幸治
編 集 委 員 長	加藤 幸治
評 議 員	
文 学 部	[英] 遠藤 裕一 (編集)
	[総] 佐藤 司郎 (編集)
	[歴] 加藤 幸治 (評議員長・編集委員長)
経 済 学 部	[経] 泉 正樹 (会計)
	[経] 細谷 圭 (編集)
	[共] 佐藤 滋 (編集)
経 営 学 部	斎藤 善之 (編集)
	小池 和彰 (会計)
	折橋 伸哉 (編集)
法 学 部	黒田 秀治 (庶務)
	白井 培嗣 (編集)
	木下 淑恵 (編集)
教 養 学 部	[人] 鈴木 宏哉 (編集)
	[言] 伊藤 春樹 (編集)
	[情] 佐藤 篤 (編集)
	[地] 柳井 雅也 (庶務)

東北学院大学教養学部論集 第 167 号

2014 年 3 月 4 日 印刷  
2014 年 3 月 11 日 発行 (非売品)

編集兼発行人 加 藤 幸 治  
印 刷 者 笹 氣 幸 緒  
印 刷 所 笹氣出版印刷株式会社  
発 行 所 東北学院大学学術研究会  
〒 980-8511  
仙台市青葉区土樋一丁目 3 番 1 号  
(東北学院大学内)